

時關東の或る部分に講學の如何に盛なりしかを推し測らるゝのである。又江州永源寺の柏舟宗趙が抄したる周易歸藏抄の卷末にも、曾て東國に學問した事を記してをる。

予昔於武州箕田縣、就希禪禪師學易、時三十一歲也、今以余所學易、并三箇秘訣、盡以奉傳於小補翁與景徐老、無餘蘊矣云々、(下略)

文明丁酉(九年)十一月二十七日

柏舟 叟 宗 趙

此の外、南北朝末から室町時代の初めにかけて、關東に學問した例は少なくないが、今は其の最も著明なる事柄二三を擧げて見たのである。其の又關東で講學の盛なりし模様は前年宮内省圖書寮にて展觀したる慶長植字版論語抄の二の三丁に、西京東洛學徒の爭論とも云ふべき一條が記してあつた。引證して見やう

萬里ガ云、余曾聽先輩之言、云ク本邦ニ禮樂學問盛ニ行之時、西京、東洛之間ニ、有ニ學徒之爭、西京ノ徒ハ、曰ク、思無邪ノ三字已ニ出ニ 篇ヨリ、今マ講ニ論語ニ者往々ニ讀デ云、思無邪ト、與詩頗相違矣、東洛徒曰ク自古昔ニ講ニ論語ニ者皆云思無邪不及質ニ 詩正義論語正義等及末書、東西ノ徒紛爭無レ罷、於是、就ニ翰林學士大外記質ヲ焉

此の爭論は多分、鎌倉時代より南北朝頃にかけての事であらうと思ふ(一寸断つて置く事がある、鎌倉を東洛と雖に實して見たるに別段異見もない様だか)又、曾て内閣記録課の藏本を觀た時に、六冊本の植字版周易抄の中

一ノ二十八丁に抄者柏舟が、鎌倉でも周易を聞いた事を記して居た、

鎌倉デ、易ヲ、キク、トキ我ガ師ハ喜禪ト云人ゾ、其ノ師ハ義臺ト云ゾ、喜禪ノ語ラレシハ、我レ義臺ニ傳易ノ時、鎌倉持氏ノ喪禮ニ逢ゾ、云々(下略)

持氏は嘉吉二年に卒したから此は恰も足利時代の中頃である。又京都文科大学所藏の清原宣賢の自筆本、中庸章句の卷末識語中に

僧俗學徒、關東學士十三經訓點、清濁、悉背先儒之說、且失師家之傳、悲哉(下略)

云々と記しあつて、特に關東學士の四字は注目に價すべきであらう。宣賢は天文、永祿頃の人であるから室町時代の季世で、此の季世にも猶ほ關東で講學の絶へなかつたことは、前に引例した老人雜話の妄を辯するに足るばかりでなく、東西共に講學に油断なく、五山の僧徒のみならず、僧俗の間にも一道の文學が維持されて居たことを知り得らるので、史家の所謂闇黒時代と云ふ語も暫らく棚に上げて置きたくなる様な心地がせらるゝのである。

從來關東と云へば、東夷アノマエヒスと云ふ位に考へて、武斷、粗暴、俗に云ふ「荒くれない人間」とのみ解せられて、文學などの方面から關東を論じたものが少ない様である。然るに事實は之に反して、南北朝の末から室町時代に負笈講學の徒が踵を尋いで箱根の關を越へたことは、將來關東を研究する人に取りては忽諸に附すべからざる一新事實ではあるまいか。余は徒らに奇を衒ふて關東を謳歌するものでは

ないが、今時の史家が云ふ程に、當時の文學は衰頽したるものではなかつたかの様に思はれるのである。

關東の學問は鎌倉、武藏の間に止まらずして、東南に流れて下野に至り、足利學校は更らに一段の盛況を現はして居たのである。從來、足利學校は多くの人に研究せられ、東國の文學とし云へば必ず足利が引證せられて居る様であるが、其の多くは學校創立の時代、或は希觀書の貯藏談に止まつて、一も其の講學の沿革を叙述したものがない。足利學校のことに就いては羅山文集、鵝峯文集、日光名勝志、古文故事、岐蘇名所圖繪、岐蘇路の記、護草小言、一話一言、柳巷隨筆、病間長語、提醒紀談、鹽尻、東路の津登、陽春廬雜考にも見へ、近來にては土井禮氏の華山研究、國學院雜誌の十六の一、二、五、六の四號に涉り藤岡繼平氏の足利學校研究、等が現はれて居るが、是れ又一も講學の事蹟に就て叙してない。其の外、足利學校で出來た、貴重書目録、川上廣樹氏の足利學校事蹟考等も結構ではあるが、是れ又告朔の餼羊の如き感がある。

足利學校は下野國足利郡足利町にありて、其の遺蹟たる聖堂、寶藏等も現存し、現に足利町の保管に屬して、今猶は當時の俵を見ることが出来るのは當代の文明を討ぬる上に頗る便利であるが、其の創立年代に就ては或は上古國學の遺制とも云ひ、又は小野篁の創立とも傳へて今に確定したる説がない。たゞ現今明確に知り得らるゝのは、永享の頃、上杉憲實が鎌倉建長寺の快元和尙を請じて中興となし、

書籍を寄附して學徒講學の便を計つた事に始まり、爾來連綿として庠主相續ぎ徳川氏の末、第二十世謙堂に至つて其の終りを告げて居るのである。上杉安房守憲實は武人にも似ず頗る學問を好む人で、當時京都の縉紳を始め五の山僧徒とも詩文の唱酬をなした様で、瑞溪周鳳の臥雲稿には、彼れに與へた作が載つて居る。

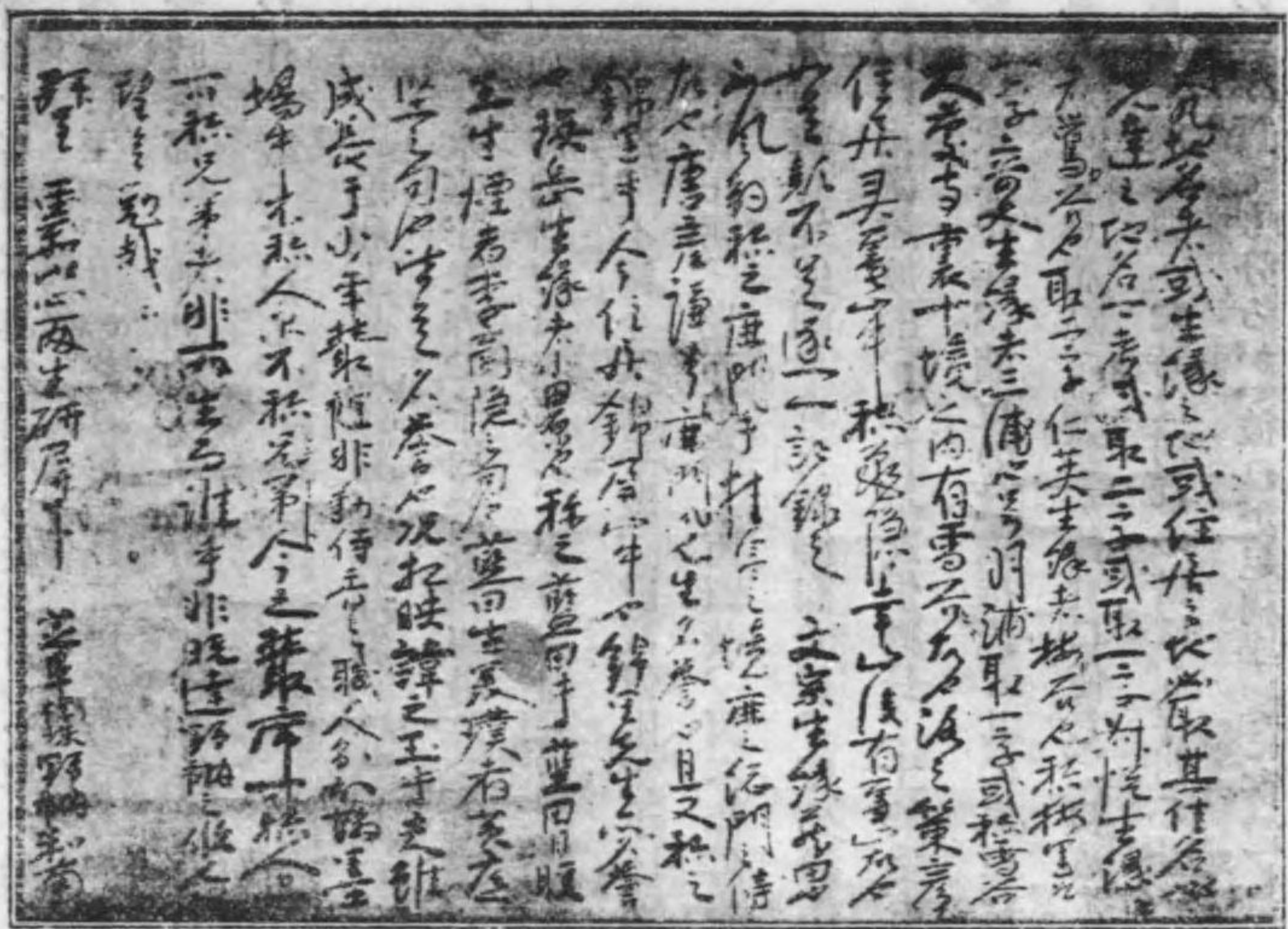
追和上杉房州見寄韻并叙

永享丁未春、予因公事到相陽、遂挹閣下光風、然館居纔數日、忽々告別、別後未幾拜詩章賜、將獻拙和以答盛意、于時東西飛檄、關譏甚嚴、雖詩筒來往、而得無爲官吏所疑乎、是以默而止矣、不圖今又枉手教、感戴何限、予已老矣、再游難得、所庶高車入關慰予東望之情、矧賢子姪皆在朝、豈亦不爲之西顧哉、因奉和舊韻者二章、少贖前年默止之罪耳。

兒似韓符姪似湘、青雲並轡寵光長、留公猶作雪山重、春靜東方君子鄉。

憶昨東游遠渡湘、歸程草々恨猶長、士峰幸有擎天勢、一朵飛來鎮帝鄉。

是れは永享十年、關東の執權持氏と其の家臣たる憲實とが確執して遂に上野に反旗を擧げた時に、將軍義教の命を帯びて瑞溪が鎌倉に使い、初めて憲實と知り其の後に贈つたものである。惜むらくは憲實の瑞溪に與へた詩は何れの書にも存して居ない。憲實は武人にも似ず書を愛し文を嗜んだことは此の一事實でも分るが、彼れが足利學校に寄進した書籍には、一々其の姓名を手署し且つ間々年月さへ書



足利學校龍派禪和尙筆

一八八
いて居るのは注意頗る至れるものと謂つてよい。
扱て足利學校は上杉憲實の功勳に依て再興せられ、建長寺より快元和尙を迎へて座主としたが、快元は文明元年四月に寂し、其後も多くは鎌倉の建長寺或は圓覺寺より、材幹ある僧徒を請じて生徒に教授した爲に學校の盛名は、京都は勿論、遠き四國九州の果てまでも聞へて、學問とし云へば多くは足利の地に足に向けた様である。現今、足利學校に存する書籍の中にも、是等負笈の徒が其の必要の書籍を同校に寄附したことが、其の書の卷末に識されてある。今其の二三を舉れば、元版詩傳綱領一の奥に
野州足利庄學校常住也 如道寄進
永正丁己秋九月日修復焉 蕤陽之好老人
如道は何人か分らぬが、之を修復した之好老人は

學校第五代の主にして大永年間に歿した人である。又、古寫本の毛詩鄭箋十冊の奥には

洛之相國卜隱軒主心甫傳西堂寄附

慶長二十稔乙卯上巳後二日

董席鐵子寒松叟龍派禪珠野禿誌焉

とある。龍派は建長寺の百七十八世で、學校の十世に當り、寛永十三年に寂した人である。又、ズツト古い所では、周易傳義三冊の奥に

應安五年極月八日讀書寫之。

時文明九丁酉仲春日、紫陽大奇置之

とあり。周易抄三冊の奥には

足利學校常住 易學之徒寄進

と記し、同く古寫本易學啓蒙四冊の卷末には

能化肥後之天矣、

洛之建仁大龍菴一牛寄置

とある。天矣は學校第二代の主にして延徳年間に寂した人であるから、一牛の寄進した時代は文明から延徳の間であらう。建仁寺の一牛藏主は該書の外に元板禮記集說五冊を卷進し卷毎に

延德二年壬辛五月二十二日、建仁寺大龍菴一牛藏主寄之、能化肥後之天矣、長門之西燕誌之

又

加州之産、洛建仁之僧一牛寄之

古寫本の禮記十冊も同く一牛之を寄進して前條の如き識語がある。又宋熹元修本の周禮二冊の卷末

には

下野州足利庄學校之常住

文安六年己巳六月、洛陽僧砒愚置之

とある。又、植字本、春秋經傳集解十五冊の奥には

奥之會津人、宗祥藏主入杏壇、稱津梁、不幸逝矣、遺此本作當痒什物

慶長十七年壬子閏十月二十七日、痒主寒松叟誌焉

是等は其の一例であるが、當時負笈の徒より書籍を寄進したることは、一は憲實の好模範を尋いだ譯でもあらうが、是れによりて當時講學の徒が、京都は勿論九州邊よりも陸續至つたことを知り得られるは全く紙墨の賜である。是れより少しく五山の文學書類により當時如何に足利學校が全國の學徒より注目せられて居つたかを述べて見やう。

足利學校の第十世禪珠龍派の寒松稿に記する所に據ると、同校には掛籍帳とでも云ふべき物があつた

と見へて、其の中に

大凡、天下之間、志於學者、入庠門則不分僧俗、不論貴賤、題學徒之名字於僧籍、以爲吾門弟子、是古來之箴規也。

とあつて、當時は其の名籍帳があつたに相違ないが、現今は存して居ないから其の時代々にドレ程學徒があつたものか薩張り分らない。併し五山僧の詩文集又は抄物に據て第一代の快元和尙時代から學徒が雲集したことを知り得らるゝので、相國寺桃源瑞仙の百衲襖、文明九年三月講抄の條に

(上略 與派菴玉之二老、曾在足利學易之日、至於閏算、雖有師說、甚不曉了、二老相俱校讐撰之、與派者今講圭柏舟師也、余寫之、入百衲襖中、(下略)

是は江州永源寺の柏舟宗趙が、足利學校に學んだことを知るに屈強の材料ではあるが、年代の上から推測すると、柏舟は學校の中興快元に就きて易を聞いたものと思はれる。併し元の學力は餘程怪しかつたものと見へて「至於閏算、雖有師說、甚不曉了」とあるに至つては多少心細い次第である。足利へ負笈の徒の事實を記した文籍は多くある中にも、鎌倉建長寺の百六十四世玉隱永璵の語録は最も其の事實に富で居る。第一に見ゆるは圓覺寺の器朴が就業のことである。

利陽搏桑日域之名區、而有學校、夏曰校、殷曰庠、周曰序矣、有虞氏之學美老之官之、今如庠庠、推博學多聞者師之、猶孔丘於魯、文翁於蜀、之四海九州、關之西東、有志游學者、輻輳于此

無學而不成者、故風俗皆効之、或田夫野叟、吟詠於山林壟畝之間、況學之徒乎、寔風雅之一都會也、爰鹿山之器朴上人、寓利陽有年矣、瑩雪之席孳々不倦、今茲文明丁未之元日、造雪詩、詩者天地之清氣、非胸中有清氣者、不足與論之、艷麗新美、如插花舞女者、清氣染上人之肺肝者乎、付其詩于介人、以求湘之巨山諸彦之和、和者五六輩、予預其韻、彼岸必有楊子雲之眼膜顏而已、

琢雪煎裁非女紅、清詩歌付小鶯風、乾坤一樣六花瑞、白盡虞清美老官、

第二に賢轉號說の中に、建長寺の祖養首座が掛籍して居つたことが録してある。

天龍國師遠裔、福山第二位祖養首座、因州英産也、游學乎利陽庠序、而勲業已成矣、今居赤甲城龍珠、寄紙求雅號、號以賢、易頤卦、聖人養賢以及萬民、故云養花如養望、又云釣築收望輔般、高宗夢得賢相、曰朝夕訥誨以輔台德、若歲大旱、用汝作霖雨、首座他年出世、普施法雨、作法輔佐、刮目俟之、重說小偈曰、

緇林元氣有斯郎、披起宗風德愈彰、不袖傳岩霖雨手、英材羽翼法中王、辛卯春日

第三に隱甫が二年以上、足利に學で居た時に詩を以て歸を促したことが記してある。

隱甫丈、處利陽二年、以詩督歸、

萬一記會雲懶邊、別時鳥過已環年、利陽春色深君後、花暮巨山文字禪、

第四には永正第五年五月の記に成る乾翁の號說に、長州の僧瑞元なる者、十五年以上も足利學校に游學したことが記してある。長文であるから其の大意を抄出して見やう

吾佛中天竺人也、四十九年說經、孔釋之徒所翻譯也、故欲得此道者、竺冊魯典、先學而後入總持門也、爰有中國長門之產瑞元者、由良開山法燈圓明國師遠裔、蛋歲而顯名於洛之南禪、掌藏司職、俄然有徧參志、到曹洞下有歲矣、自反復謂、不參文字禪、佛語祖語難明、遂入足足利學庠、勤魯典者十五年、藏舊名曰文長、功成後、欲歸鄉振起吾宗、檀越之志難默、暫淹耳、就于懶菴求別號、欲拒辭、聞其爲人、律而勲業風韻之不泯、感之乃字曰乾翁、(下略)

第五には天文二年、肥前の僧、存公藏主が同く足利の歸途、湘南の地に遊び、號說を需めたことを記してをる。

九州肥前法泉寺、山號萬歲、其緇侶存公藏主、游學于利陽、功成名遂、歸國之次、轉作瀟湘遊、袖片楮、需雅稱、廼稱以菊徑、贅一章證其義、兼壯行色云、

依約陰君無俗曹、九衢天外姓其陶、三々若著紅塵脚、恐有黃花咲裏刀、天文第二蒼龍蝨兒之歲端午、以上の五通りの例は玉隱永瑠の語録中に散見する所であるが、今日までまづ隠れた事實と見做してよからう、次に相國寺景徐周麟の翰林葫蘆集の中に石室觀鞏が足利に游學した事柄が見へる、

惠日双峰國師派下佳袂、其諱觀鞏、字曰石室、隸石州萬壽、嘗登靈龜領記室、遂負笈游於東關之

儒席、頃入洛、托紹介求予之作偈以證石室之義、弗克辭、大書二字係其下、

千古生公高座前、點頭動地不頑然、看他嵩少雪深處、春屬拈華面壁邊、
是れは東關の儒席とあつて足利とは明記してないが、儒席と云ふからには先づ足利と見てよからう。

次は建仁寺悅巖東窓の詩集の中に、同く建仁寺の文伯藏主が、東關に游學のことを載せてある、

東山文伯藏主、遊東關者數歲、頃旋洛、無何而又東奚、詩以壯其行色云、

東州游學六霜餘、一日歸來問舊盧、怪得忿々重告別、客窓知有讀殘書、
次には相國寺仁如集堯の縷水集の中に、日向の僧承貞と薩州の僧宗紹座元とか足利に游學した事柄を
録してある。其の二に

日州長樂禪寺、承貞書記者、古林和尚末裔也、元龜元年庚午、負笈爲學問欲赴關東足利、解制之日
入洛、因扣予弊廬、說件々事、(下略)

其の二に以繼號説と題し

宗紹座元者、本貫薩州人、(中略)壯年志於學、見佛法東流之機、秣鞋不遠千里、一到鎌倉足利、先學
典籍、後扣諸知識、密室參決已事矣、今也居常州正宗禪寺、(下略)

とある。次は東福寺の彭叔守仙の猶如昨夢集中に景歐字銘と題し

正叔藏主者、讚陽寒河郡得月禪庵之宰也、甲族、紀之殖田氏、祖派由良之法灯國師、數歲之先、遠

東關村校、勵車笠孫雪之業、云々

とあり。又同集の中に、一僧の關に入ることを録してをる

癸丑之歲、予有招熙春首座之野作、學校九華老師次其韻賜一章、後日不聞鴻音、因而弗能再和、多
罪々々、今茲乙卯、熙春旋京、於是乎、有僧入關左、(下略)

次には又、東福寺の僧熙春龍喜が、曾て足利學校に在て、九華に就學したことが其の文集の枯木集に
載せてある、

利陽能化玉岡大禪師七周忌

天正第十二秋之秋十莢、伏值利陽能化前禪興玉岡大禪師七周忌之辰、(中略)予東遊之日、就大禪師、
聞講周易十旬而終之、恩義大哉、(下略)

玉岡は學校の第七世九華和尚の別號で、在座三十年の久しきに及び學徒三千人の多きに達したと云ひ、
彼の閑室元佾も此の九華に就きて儒學を修めた様で、在座の久しきだけ九華の名は足利學校と相關聯
して知名である。同校現存、宋版文選の卷末に永錄三年九華が六十一歳の時、學校を辭して其の郷里
なる大隅に歸らんとして鎌倉に立ち寄り北條氏康、民政等に強いられて再び學校に歸住した事を記し
て居る。九華が如何に當時講學に努めたかを知ることが出来る。云々

隅州産九華、行年六十一之時、欲赴于郷里、過相州、太守氏康氏政父子、聽三略、講後話柄之次賜

之、又請再住于講堂矣、

九華は天正六年八月、七十九歳で足利で寂して居る様である。次は南浦文集の下卷、寄僧徒詩と題する序引の中に

老師者何人、即前建長雲夢大和尚之徒弟、而其諱曰崇春、十九歳而赴東關郷校、而隸止者五六年矣、學徒之時、改崇春名不閑矣、

是れも足利とは明記してないが、東關の郷校とあるから足利と見たのである。

又、月舟壽桂の幻雲稿に、建仁寺の丹功甫が足利に游學したことを記して

功甫昔在關東足利而學、今年領壽勝帖、

とある。經籍訪古誌に擧げたる舊鈔本老子道德經の卷末にも

于旨天正六年戊寅孟夏下旬寫之關東足利之内學校下、真瑞

とあり。龍崇常菴の文集の中にも

關西羊角老人、游學利東者久、其還也、假道都下、滯滯三歲、將行、漫寫小詩爲贈

羸糧東魯十餘年、了得六經中有禪、一衲卷還海西寺、夕陽依舊在君邊、
とある。それから確か蜀山人の一話一言の中で見て書き抜いたと思ふが、足利學校に舊存したる鈔本補註蒙求の卷末に

天正十年卯月廿八日於關東下野國足利、此一部三卷書寫了、沙門魯窮

とある。又江城年録にも、一溪道三か廿歳の時(慶長元年)關東に下り足利學校の文伯に従學したことを記して居る。

以上、擧げた所は、五山の文集其他を涉獵して漸く拾ひ集めた極めて貧弱なる事實であるが、精査したならばまだ、新奇なる事柄を發見するかも知れない。文明の頃より元龜、天正頃までは京都の五山には隨分碩學の僧もあり、又詩文ではあまり堪能の人はなくとも、講筵は彼の所でも、此の所でも開かれて、經史子集は勿論、佛典なども盛んに講せられて居つたにも拘らず、九州四國の遠方より何故に京都を後に見て足利に就遊したのであるか、是れは少くとも當時の文學の一斑を知るものには一の疑問に屬する譯で、上國に觀光すると云ふことならば天子、將軍の御膝下で、是れ以上はない、何が故に旅路遙けき東路の空にまで重き笈を負ふて、渡良瀬河の邊り僻地の一村舎に永き歲月を送つたであらうが、是れは容易に解釋し難き問題である。併し今は是非之を解結せねば此の一篇を結了することが出来ない、貧しき二三の例を假り來つて管見を呈露して見やう。

轉じて當時京都の學問状態を一瞥するの必要がある。先づ公卿の方に就て見れば國史、國文、有職故實、或は物語類は主として研究せられたが、其れと同時に漢文學も又忽諸に附せられては居なかつた様である。其の實例は、實隆公記、延徳三年二月二十二日の條に

今日中庸有講釋於小御所一勤講之各參候
 とみえ。康富記、嘉吉三年九月二十日の條には
 詣勸修寺左兵衛佐亭、述而篇講釋了
 とあり。又、看聞御記、應永三十一年九月四日の條に
 亞相大學本、申出之間、秘藏本一篇借遣了
 など記され、實隆公記、文龜四年二月五日の條には
 周易愚本加朱點、(中略)其外第九第十一覽之
 と見え。建内記、嘉吉元年五月一日の條に
 清大外記入來、(中略)莊子第一不審處々演說
 とあり。又、實隆公記、大永四年二月二十四日の條には
 漢書帝紀列傳點、今日帥終之
 と記し。永正八年十二月九日の條には
 史魯世家終功、燕世家立筆
 など各所に講學に關する記事がある。又、實隆公記文明十八年四月二十九日の條には
 今後向德大寺、東坡第十一有講釋事、孟酌及數巡、

など、當時の記録中より提舉し來れば此等の事實は百を以て數へねばならぬ程である。又彼等が五山の僧徒より其の講釋を聽き得たるの例は、看聞御記、永享七年五月四日の條に
 慶西堂參、有談義、元享釋書第一二復二帖畢、第三之初聊被談退出
 とあり。慶西堂は一條兼良の舍弟にして、東福寺の僧、雲章一慶を指したのである。又、實隆公記、大永八年十月二十三日の條にも
 今尅參禁闕下委月舟有講釋、小御所杜子美第二卷被申之一卷先皇御宇被申云云
 是は建仁寺一華院の月舟壽桂が後奈良帝へ進講の時、當時の公卿達へ陪聽を許されたるものらしい。「一卷先皇御宇被申云々」とは、後柏原帝の時代より進講し初めたる事が知られる。又、實隆公記、大永三年閏三月二十日の條には
 建仁寺史記講、哺罷向
 と記し。康富記の永正三年九月十三日の條にも
 頭中將、詣萬松軒、古文眞寶講釋也
 とある。萬松軒は相國寺の塔頭で、講者の何人なるかは今茲に詳でない。又五山僧が公卿に就て疑義を質したるの例は、實隆公記、明應八年四月六日の條に
 自大昌院有使者、新古今序不審事也、切句改文字、返遣之
 室町時代關東の學問

とある。大昌院は建仁寺の塔頭にして當時錦繡段の編者を以て高名なる天隱龍澤が住したれば爰に云ふ大昌院は天隱のことであらう。又天隱文集の中に

余自去月、隨_三古雲侍史、就_三府中民屋、而卜_三環翠先生之隣、其志在_レ聽_三絳帳餘論、所_レ恨十年前、不定斯策、云々

此の環翠先生とは明經家清原常忠を指したので、天隱が當時如何に斯文の研究に意を注ぎたるかを知ることが出来る。殊に「所恨十年前、不定斯策」とあるからは、彼れが而立以後の事であらう。轉じて當時五山學問の状態を願れば又公卿に譲らざるものがある。翰林葫蘆集の中に

(上略)因憶二十年前、(中略)吾山(相國寺)飛樓湧殿未委地、大衆掛名籍者、未減千人、上而鳴于僧中者講詩文、下而少年侍者挾笈奔走、東廊下嘯風、西廊下吟月、互指其名曰、某也善絕句、某也善聯句、某也四六、某也散語、汲々於名者、猶汲々於利也、

とあるのは、單に形容でなくして其の事實は當時の文學并に記録が證據立て、居る。今二三の例を擧ぐれば、默雲稿の中に

(上略)本朝禪林耆宿、太年、心華、太白諸大老、口義惟夥、後學抄以留之於中筭、留之机上者幾家哉、獨心華臆斷、與劉氏評點、盛行于世也、五十年前、吾山(建仁)江西和尚、集諸家善說、以爲絳帳談柄、聽徒如市、

とある。又、横川の京華集の中にも

純仲、諱_三嚴、平居講_三蘇黃、曾從_三雙桂_二云

と云ひ。翰林葫蘆集の中にも

玉府先天隱大禪師(中略)昔日師之踞乎玉府也、學者歸之者、以七十子之游於仲尼門、各得其所而去云々

と記し。又、同集の中に

妙智大士(竺雲等蓮の事)據_三華藏室、說_三十々法門、接_三四方之士、旁精_三于易、推爲_三僧中儒宗、(梅莊字說)

とあり。又同集の中に

慈眼蒼頭、積江厚公座元禪師、禪餘講_三四書六經、以教_三黑白之志、於斯文、洎使倭人不_レ踰_三大洋、而得游於中華仁義之邦、不知其幾千、皆是禪師之賜也、樞府之近習、雅樂修理亮尙忠、親灸講帷者有年矣、

とある。積江厚公は景徐周麟の親友で、景徐も益を受けた人らしい。又同集中に

乙卯春之季、德藏師叔入洛、因寓_三葦寺、談_三法華、一夏、蓋應_三于僧某之請、也、事畢、少年之徒、又令_レ講_三論語、

とある。又、碧山日録、長祿三年五月の條に

三日、甲申、等持院主竺雲和尚講授漢史、欲予侍其席、使龍子扣寂、侍者於雲頂問其日也、可三十日有此講也

とある。又、月舟の幻雲稿後集の中にも

萬年相文聰老人、就吾山仁默雲翁、需講杜詩、蓋始于辛未、終于戊申、可謂勤也、余又侍傍、聞焉、とあり。又、蔭涼軒日録、文明十六年九月二十日の條に

頃、善應老人、見講魯論、漸將畢、其功、以故今晡、招善應老人於意足、勸晚食云々

とあり。同く文明十七年五月二十日の條には

午後、興子雲來曰(中略)、德濟首座字祖溪、近日講柳文、蓋、華嚴院適慶堂發起之、我亦可赴講筵(中略)、子雲語曰、今我所居者、建仁寺瑞松院也、塔主瑞迦首座也云々

又、文明十八年六月十一日の條に

赴栖芳軒莊子講後、延橫川、桃源有一小宴、景徐依有所用不被來云々

又、同年六月二十五日の條にも

天快晴、齋了、赴莊子講筵、自講筵、廻小補、桃源、春陽三老、調湯漬進之

云々とある。以上の如き例を挙げれば是亦幾十頁かを填めても猶ほ盡きないから此に省略して、更らに當時の禁中、并に柳營でも講學に怠られなかつた一二の例を挙げれば、京華集の中に

文明庚子(十三)仲冬、天子(後土御)親選中華故事三十題、命歌人(詠)和歌、又選本朝故事三十題、命

詩人(賦)唐詩、(中略)蘭坡長老賜座以講心經、吉田三位昇殿以講神書、

云々とある。又、月舟の幻雲稿の中、蘭坡の相國に住する江湖の疏中に

應仁丁亥、兵亂以來、今上遷柳營、此時長安收復、還幸禁中、公(舟)奉敕講三體詩、

是れは後土御門帝に進講したものであらう。又將軍家にも講學に怠らなかつた例は、孝經論議の奥

書に、昔天山相公(滿)治世之餘暇、引菅原秀長、藤俊任、明經清原良賢、以孝經爲論議、座有二條

攝相、義堂和尚云々

とある。又、翰林葫蘆集の中、鹿苑院殿百年忌陞座法語の中にも

台靈、明德年中、迎廣照(海經)師於花御所、夏中日々講此經(柳)

とあり。又翰林葫蘆集の中、常德院殿(足利義熙)像贊の部にも

(上略)命雅久宿禰講論語、又召兼俱卿講神代記云云

とあり。

蔭涼軒日録、長享二年六月十三日の條にも

相公御尋中庸、中庸本、多々相尋可進上、一見之後、乃可被返還、只今在御前一本、皆寫本、手
迹不可也、故被命當軒、乃返章遣之、唐本三本、此内新注一本進上之、一本丹公、一本昌、新注、

維俊本也、對面直見渡之云々
とある。

次に臥雲日件録、文安三年十二月二十六日の條には

大外記業忠來訪、茶話歎曲、因曰、府君前日自天子賜名曰義成、階則從五位上、然古以從五位下
爲始也、予曰、府君管領皆妙年、不可不學、外記曰、府君今學論語第二卷末畢云々

是れは相國寺の瑞溪周鳳と清原業忠との問答であるが、以上掲げた二三の例に見ても、當代に於ける
上流の學問の衰へて居なかつたことを知るに足るであらう。併し五山では室町の初期より講義は一の
流行となつて居たが、其の流行にも多少の變遷を経て居るかの様に思はれる。例は長祿の三年より寛
正の四ヶ年に涉つて、東福寺の雲章一慶の講られた百丈清規の雲桃抄の中に

舊ハ四書五經ナントノ、俗書ヲ讀ヲハ世ニ落法師ノ様ニ云タカ、其後ハ史記漢書ヲ讀タカ、今ハ其
ヲモ、トツテライテ、詩注文集ヲ本ニ習ソ、東坡山谷詩ハ、幾卷アルヤラウ、四五卷、十五卷ハカ
リ讀テ、末終ニハヤ住持長老ニナツテ、皆モ不知ソ、今ニ亦、唐ノ代ノ詩注文集モ、昔事ニナラウ
ソ、アサマシイ、事ヲサフソ、佛法ナントノ事ヲハ、知ラウス事ノヤウニモ、セヌソ、

と云ふ様なことが書いてある。是れで見ると五山では南北朝より應永の初め頃までは經學の研究が流
行し、次で史類が愛讀せられ、それから又詩集の看讀又は講義が流行した様である。現存の五山の抄

物には、詩集類が多く残つて、經書と史類の抄は先づ殆ど存して居ないのは確かに此所に原因を持つ
て居るかの様にも考へられるのである。詩集では杜工部、東坡、山谷等最も流行し、而も此の流行は
比較的永續して居る。史類では史記、漢書は一時流行したが永く續いて居ない。従つて現存の抄物で
は史記抄の外にはあまり珍らしき物は残つて居らない。經書では論語抄、周易抄は僅に二三を存して
居て其の抄者も亦極めて少なく、逆も詩集の抄の如く豊富でない。此の點から觀察しても、五山では
詩文にのみ耽つて經學の研究には甚だ怠つた傾きがある。併し其の詩文さへ或る時期にはあまり振は
なかつた證據は、禿尾長柄帚と云ふ書の中に

（上略）比來乏其才、從而道衰文弊矣、癸酉初秋、遺老三四輩相謀曰、吾玉府（建仁の事）職已曠、事已廢、
不可慨乎（中略）於是、遂張詞場於知足堂招衆、以會者百餘員、拔其尤十餘人、操筆以擅場、僉曰、
玉府不減昔也云々（答潛輝老人詩序）

と記されてある。文中の癸酉は享徳二年で、應仁元年より十五年前である。當時ですら箇様の有様で
あるから、應仁以後、亂離の世の中となつては、詞場を張つて唱酬なんぞ云ふ優暢なことは、あまり
出来なかつたことは、横川の東游集を見てもよく分つて居る。

之を要するに當時京都には二種の學問が現存した、一は公卿の學問、是れは古注を主として明經家の
持場となり。今一は五山の學問、是の方は經學は勿論新注に屬して居たが、併し應仁以後は一向經學

に心を傾けるものなく、文明時代を中心として前後に史類が暫らく流行したが、是れもホンノ一時の時花で、前後を通じて一番重んぜられたのは詩集ばかりである。従つて五山の學問は、作詩、作文、四六駢體で持ち切つて、所謂堯舜を祖述し文武を憲章すると云ふ側は全く閑却されて居たのである。適々岐陽の如き、惠風の如き、其他其の流れを汲んだ新注崇拜者も出で經學の研究に熱心なる人あり、竺雲等蓮の漢書に於ける、桃源瑞仙の史記に於ける、著明なる人も有りはしたが、是等は一局部に止まつて、前後を通じて幾百人の世に所謂五山文學者は、全く詩文の學者であつた。經學の造詣に至つては甚だ乏しかつた様である。斯く論ずると何だか彼れを擧げむが爲に之を貶する様にも聞へるが、事實は全く吾人を欺むかぬのである。

此の時に當つて關東の學風、就中、足利學校の學風は如何と云ふに、岐陽門下の衣鉢を傳へて、後に西埜の一角に文教を興隆し、後年には僧服の儒者とまで稱せられた桂菴玄樹の家法倭點の中に、先輩岐陽和尚の説を引いて居る。假り來つて當時足利學校の學系を知るの便に供しやう。家法倭點の第三丁の裏に

建仁龍雲有論語集註、其卷末有書、岐陽和尚講筵之說、之本、云、大唐一府一州、其外及郡縣、皆有學校、日本總足利一處學校、學徒負笈之地也、然在彼而稱儒學教授之師者、至、今不知有、好書、徒就、大唐所、破棄之註釋、教誨諸人、惜哉、後來若有志、本書之學者、速求、新註書、而可讀之、

云々、

と記してある。岐陽は貞治二年に生れ、應永三十一年に寂して居るから、即ち南北朝を経て室町初期の僧である。京都では南北朝の初めから玄惠の輩によりて朝廷にも新註が用ひられ、五山では勿論一般に新註が流行して居たことは、岐陽以前の南禪寺義堂の空華日工集の中にも明かに記されて、此の人等の力に依て柳營の内にも新註が用ひられて居たのである。然るに足利學校で當時猶ほ岐陽の所謂「大唐所破棄之註釋」即ち古註に依て教授して居つたと云ふことは、蓋し從來の校規を重んじて、浪りに新註を門内に入るゝことを許さなかつたのであらう。由來關東と、京都との學風には随分相違があつた様で、永正十一年に出來た東福寺の僧笑雲清三の論語抄の中にも、從來兩地の讀み僻せの相違を所々に擧げてある。一例を示すと、論語の「周公謂魯公」の條の中に

魯公ト云ハ、伯禽ソ、關東ニハ、伯禽ト、ニゴリテ、ヨムソ。京ニハ、禽ト、スムソ、

は其れである。又飽くまでも新註を採用せなかつたことは

小野ハ、正義ヲハ、異義ト、取リ、本註ヨリ、ホカハ、不取ソ、サルホトニ、新註ナントハ、申スヘキ事デハ、ナイゾ、世間ニ用ルホドニ、才學ニ、申スマテソ、

とある。茲に小野と稱したのは足利學校は小野篁の創立と云ふ傳説があるから、當時足利學校の變名を小野と稱したのではあるまいか、よし小野が足利でないまでも、上に引いた例は關東の事柄である。

又、同抄の中に

日本テハ、關東へ、此論語ヲ、傳ハ、小野侍中カ、傳ソ、其ニハ、官ノ事カ、ナイソ、周體ニ、官ノ沙汰アリ、周體ハ、東國へハ、ユヅ、サテ、坂東ニハ、官ノ沙汰カ、無イヅ、

とある。此れでは小野が人名となつて居る。して見ると甚だ勝手な推測ではあるが、前に擧げた小野は篁の創立と稱する足利學校と見ても當らぬこともない様だ。是れは兎に角。關東では新註を輕賤して居たことは實に久しいもので、足利の末期とも稱すべき、永正頃でも猶ほ如上の有様であつたとすれば、上に擧げた岐陽の古註破斥説ぐらゐは當時に在ては當然のことである。又、永正よりズツと遡つて文明の初に抄せられた相國寺桃源瑞仙の百衲襖の初めにも

凡、易經ノ倭點多ト云ヘトモ、先ツ江家菅家ノ二點ナリ、江家ハ今ハ則亡ソ、足利ハ皆江家ノ點ナリ

とある。「足利ハ皆江家ノ點ナリ」と云ふ上から觀察すると、京都の所謂公卿の學風と似通つて居る所がある様にも思はれるが、翻つて又、足利學校に現存する同校七代の庠主九華和尚(在庠三十年、天正六年寂す)の講せられた抄かと思はれる周易抄の初に

四召ハ學校ノ點ソ、召ハ外記ノ點ソ、

と云ふ辭も見へ、又、中ノ卷、初九の條、兄懲云々の下に

菅家ハ、コラス、江家ハ、コロスト云點ソ、點ノカハリソ、此ハコラストヨウテ、ヨイソ、足利ハ、コラストヨムソ、

とある。是れで見ると、足利學校の學風は別に明經家の説に依違した次第でもなければ、又、江家に私淑した譯でもなく、菅江二家を始め清原家等の説の中に就て長を取り短を捨て、古來より一種獨特の學風を維持し容易に改められなかつたものと想像されるのである。

次に足利學校は、關東に於ける易の本場でありはせなかつたと思はれる節がある。第一に同校に現存する古書の中にも、易に關する書物が割合に多い。其の一例を擧ぐれば、宋版の周易註疏(十三冊)應安五年の寫本周易傳(三冊)古寫本周易傳(三冊)古寫本洗心易(三冊)古寫本周易抄(三冊)易學啓蒙(二冊)重離疊變譯(二冊)歸藏(一冊)此れ等は其の中の尤なるものである。随つて周易抄三冊の卷末には「易學之徒寄進」などの文字も見へて、易を學ぶ爲に遙々笈を負ふて來たものがあつた様に思はれる。帝國圖書館の所藏本中にも

足利學校流古筮傳授要說 (一冊)

と云ふ寫本を見たことがある。それから内閣文庫の藏書目錄の中にも足利學校釋奠式并學規と題する一冊をも見た。是れは別に易に關係はないが兎に角足利學校では易を教授するのが一の得意となつて居た様に考へられるのである。故に徳川時代に及びては年々百石の學祿を與へて、年の初めに當歲の

吉凶を占ひ、之を幕府に上るのが例となり之を年筮と稱して居つたのである。思ふに徳川時代文教興隆の世に及んでも、猶ほ足利學校を見捨てなかつたことは、蓋し從來の易學系統を絶へさせない様にと云ふ考であつたかも知れぬ。次に同校に現存の舊刊書の中で詩集又は文集は極めて少なくして、經書、史類が多くある。就中經書は其の大多數を占めて居る、其の證左は明治三十九年七月に同校遺蹟圖書館で發行せられた貴重目錄を繙けば余が言の妄ならざることが分明になるから爰には一々例を擧げない。是れに由て見ても室町時代の足利學校は、周易の本場なると同時に、京都の明經家を除いては、日本での經書を教授する唯一の場所であつたに相違ない。岐陽和尚が、かの

日本纔足利一處學校、學徒負笈之地也

と云つたのは實に此の場合に引例すべき絶好の適證である。反之、京都五山の各院には今も猶ほ多少の藏書はあるが、詩集、文集乃至禪に關する典籍が其の大半を占めて、經書の如きは殆ど存して居らない、恰も足利學校と正反對の傾きがある。足利學校では代々の座主が經史の講釋を主として詩文を弄ばなかつた爲に累代座主の詩文集は殆ど存せず、僅かに第十代の座主禪珠龍派の寒松稿と題する詩文集が七冊(但し足利學校には欠本一冊のみ存して居るばかりである。其中に龍派和尚が當時宇都宮城主の請に應じて論語を、其の臣下志水由子の爲に職原鈔を講じたことが記してある。繁を顧みず其の要を掲げて見やう、

維時慶長戊申三月二十八日、寒松叟與二三子、共早出利陽杏壇、晚到宇都宮之封疆、去城十里、城主扈從勇士數十騎被迎予、既而來城下投宿於志水長右衛門尉信教之第、(下略)

二十九日、黄昏登城謁見、大官令俄頃具杯盤、清話之次、請講論語、不獲拒辭、柱廳嚴命者也、其翌又入城中、講者如前夜、聞鷄人報曉籌而歸宿所矣、(下略)

又、四月の條に入りては
六日、沐浴之餘暇、志水由子、求講職原鈔々々(下略)
とある。又、假山水詩序の中に

往歲戊申春之暮、老衲過宇都宮、駐錫於志水右金吾信教之宅。信教嘗入學、座爲門弟子、稱之由子云々、

是れが五山の僧ならば、先づ三體詩か東坡か山谷か乃至は杜詩の一部分でも講ずる所だが、論語を講じ、職原鈔を講じた所は、よし城主より需められたにもせよ、平素足利學校の學風が思ひ知られるのである。それと同時に一國の城主として僧を延びて學を講せしむるの志は以て當時關東文教の盛なりしことを證するに足るであらう。傳ふる所によれば上野國群馬郡白井にも長尾昌賢は聖廟を設け京都より儒者藤原清範を召して學を講せしめ常に家臣を率ゐて講筵に列したと云ふことである。關東に於ける當時經學の流行は實に京都を凌駕するの趣きがある様にも思はれる。

以上に於て、足利學校に於ける當時の講説が、經書を主として其他の史、子、集を度外視したるの傾きあることを續述した。是れは同校の教育主義として文安三年上杉憲實が定め置いた三條の學規に基いたものであらう。其の文狀と云ふは

一、三注、四書、六經、列、莊、老、史記、文選外、於學校不可講之段、爲舊規之上者、今更不及禁之、自今以後、於腋談義等、停止之訖、但於叢林有名大尊宿在庄者除之訖、禪錄詩註文集以下之學、幸有都鄙之叢林、又教乘者有教院、於庄内自儒學外、偏禁之者也、猶々先段所載書籍之外、縱雖爲三四輩相招、於開講席、在所者自學校、堅可有禁制、猶以不能承引者可被訴公方、

一、在庄不律之僧侶事、至于令許容族者、於士民者永可令追、於諸士者許容在所可被闕所者也、但至改禪衣者不及制之、

一、平生疎行而無處置身僧侶、號爲學文、雖庄内江令下向、自元依無其志、動不動學業、徒游山翫水輩、每々有之歟、以彼素澹僧侶、至令許容者、罪過與前段同、

文安三年丙寅六月晦日

釋長

棟(意實の法名)

此の第一條にある「禪錄詩註文集以下之學、幸有都鄙之叢林、於庄内自儒學外、偏禁之者也」と云ふ箇様を見ても、足利學校が専ら儒學の鼓吹に努めて、自餘の詩文雜學を顧みなかつたことが分る。

現今大抵の史家は、室町時代の學問は五山の僧徒に由て維持せられ、學問の事と云へば一にも五山、二にも五山と推獎するが、足利學校が當時關東の一隅に在りて數百の學徒を集めて盛に經學の講明に意を用ひて居つたことを忘れて居る。是れは足利學校の歴史を侮辱したもので又史家の不明と云はねばならぬ。當時五山の學問の一般は詩文の研究を主として經學は全く閑却されて居つた。故に都鄙を問はず苟も學に志すの徒は足を關東に向けねば純粹の經學を研究する事が出来なかつたのである。是れ當時、世に所謂五山文學の盛時にも拘らず全國の學徒が西より南より東より北より遙々笈を足利に負ふた次第である。余が前に挙げた負笈の徒は皆是れ經學講習の目的であつたのである。於是余は室町時代の學問を二種に分ち、五山は詩文の淵藪、足利は經學の道場であつたと斷言して憚らぬのである。夫れと同時に五山の學僧が當時の文獻に裨益した事は勿論だが、足利の庠主は、當代の教育に偉大の功勳を貽したものと謂つてよい。五山の學問は多少世に知られ其の人の名も今に傳はつて居るにも拘らず、足利累代の庠主は、其の名さへ世人に知られて居ないのは實に惜むべく果た悲むべきことで、當時の五山は官寺と稱して夫れ／＼將軍の寵遇を受け所謂學者と云はるゝ人には紫衣の大和尚が多かつた。之に反し足利の庠主は漸く西堂位の人が多く、建長又は圓覺に住山した人は數人に過ぎない。是れ世に其の名の聞へざる所以であらう。殊に詩文は文字を假つて其の意志を後に貽す事は出来るが、經學の講明は實際の教育であるから、其の教を受けたる人が亡ぶと共に其の功績も湮亡して仕

舞ふ憾みがある。五山の文學が當時の外交、内治其他風教の上に貢獻したとすれば、足利の學問は單に一郷一郡に止まらず、全國の學徒を吸集して平民教育の根源地となり、而して其の學徒は夫れ々地方に歸つて教化を垂れたのであるから、我が文化史上に於ける足利學校累代座主の功績は決して五山學僧の下にあるべきでない。從來足利學校の研究に従事した人は二三に止まらぬが其の多くは同校の起源、或は沿革、其他遺事の拾收に止まつて、一も其の根源たるべき當時教育の效果又は累代座主の功績に着眼せないのは實に惜むべき事で、苟も當時の教育史を研究する人々が切に此校往昔の教育状態に思を致さん事を希望して止まぬのである。

本邦現存の支那錄

宋末から元初にかけて支那禪僧の語録は随分澤山ある、多く一度は日本にて開版せられ、徳川時代に再版せられて居るものもある、今その中で重なる物を記せば

- 無門錄(惠開) 一冊 ○應菴錄(曇華) 三冊
- 虎丘錄(紹隆) 一冊 ○密菴錄(咸傑) 二冊
- 破菴錄(祖先) 一冊 ○佛鑑錄(無準) 四冊
- 環溪錄(惟一) 一冊 ○斷橋錄(妙倫) 二冊

- 石溪錄(心月) 二冊 ○虛堂錄(智愚) 三冊
- 大川錄(普濟) 一冊 ○平石錄(如砥) 一冊
- 月江錄(正印) 二冊 ○恕中錄(無愠) 一冊
- 希叟錄(妙曇) 一冊 ○古林錄(清茂) 三冊
- 淮海錄(元肇) 一冊 ○物初錄(大觀) 一冊
- 無文印 十冊 ○東山錄(雪峰) 一冊
- 雲谷錄(懷慶) 一冊 ○了菴錄(清欲) 三冊
- 雲巖錄(典牛) 二冊 ○痴絕錄(道冲) 一冊
- 高峰錄(玄妙) 一冊

ザット擧げて此の位ある。是等は一度は皆日本で開版せられたものじやが、現今讀まるゝ物は虚堂錄を除いては絶無であらう、併し支那錄はまだく有るに違ひない。此外に支那僧で來朝した人々の語録も随分あるが、坐右の分だけ擧げて見やう、

- 寧兀菴錄(普寧) 一冊 ○圓鏡堂錄(覺圓) 二冊
- 隆蘭溪錄(道隆) 三冊 ○俊明極錄(楚俊) 六冊
- 澄清拙錄(正澄) 八冊 ○梵竺仙錄(梵仙) 五冊

○佛光錄(無學) 八冊 ○寧一山錄(一寧) 二冊
 ○念大休錄(正念) 六冊 ○日東明錄(惠日) 三冊
 ○東陵錄(永興) 一冊

等である。此等の録はまた前者に較ぶれば少々は讀み手は有るだらうが、是れとても多くは高閣に束ねられて居るのである。其他支那僧の文集で

- 天隱文集(圓至) 一冊 ○東山外集(雪峰空) 一冊
- 藏叟摘稿(善珍) 二冊 ○淮海掇音(元肇) 二冊
- 北磻文集(居敬) 三冊 ○北磻外集(同上) 一冊
- 物初賡語(大觀) 七冊 ○蒲室集(笑隱) 一冊

の如きは五山の學者には相應に珍重がられたものであるが、是れも現今は全く用ひられない。以上に掲げた支那録には或る一二種を除く外悉く日本僧に關する事實が記載せられてある。例せば佛鑑録の聖一國師に於ける、石溪録の無象靜照、了菴録の椿庭海壽、古劍妙快、希叟録の北條時宗、古林録の月林道皎、別源旨等枚舉に遑ない程である。中には日本では名も知れぬ入宋入元禪僧の名が、この支那録に依て知り得らるゝことが多くある、一例を挙げば斷橋録の「日本國參學比丘正見」とか日本雲上人とか日本門上人と云ふが如き、了菴録の日東果藏主とか、希叟録の日本景用禪人と云ふが如

き段々法系を調べて來ると傳燈録にも高僧傳にも全く今日まで隠れて居た入宋入元僧を發見することが出来る。五山時代の文學の發達、更に廣義に云へば室町時代に於ける文献の流通は其の淵源甚だ深く、決して偶然の出來事でないことを悟り得らるゝのである。

惠鳳藏主と宋學

今日迄に宋學の傳來に就ての著述は、鹿兒島の伊地知季安の漢學紀原(五卷)位で、近頃に至つて二三の是れに關する編述はあるが悉く漢學紀原の拔萃に非ずんば和譯位なもので一も見るに足る物がない。

漢學紀原には寧一山、信義堂、秀岐陽、章一慶、嚴惟肖、麟景徐、悟了菴、樹桂菴、降ては月渚、一翁、之玄昌等の學統を叙して、就中桂菴に關して、精叙の迹が見へるが、惜哉、鳳翔之の事蹟に關しては一言も及んで居らぬ、其の名さへ擧げてないのは少々物足らぬ心地がする。

惠鳳翔之は東福寺の僧で、嘉吉元年足利義政が徳政の令を發した時に、徳政論一篇を作つて將軍に上つた有名僧じや。美濃の産で幼年より東福寺に入り秀岐陽に師事し、後には支那に游で當時の名公鉅儒と唱酬往來したと云ふ位じやから、曾に詩文の達者と云ふ計りでなく、經學にも深く通じて、所謂僧にして儒なる者と謂てよいのである。其の著述の竹居清事には「晦菴序」が載せてある、これだけ

を讀でも彼れが宋學に通じ、又朱子を崇拜して居つたことが歴々分明である。其要を擧ぐれば

(上略)主人要_三更就_三予述_三晦菴之義、建安朱夫子、出_三於趙宗、南遷之後、有_三泰山巖々之氣象、截_三戰國秦漢以來數千歲間、諸儒舌頭、躬出_三新意、聖賢心胸、如_三披_三霧而見_三太清、數百年後、儒門偉人名流、是_三其所_三見、非_三其所_三非、置_三之鄒魯聖賢之地位、仰_三之如_三泰山北斗、異矣哉三光五嶽之氣、鐘_三乎是人、不_三然奚以致_三有_三此乎、然而不_三以明、而自居謙々、如_三不足者_三以_三晦菴_三稱、退而處_三雲谷之幽、今雲谷如_三有_三慕_三蘭於朱夫子_三者、其樹_三立於內_三者、不_三言可_三知也云々

とある。取て朱子の贊語に充つることが出来る。彼の師たる秀岐陽は當時五山に於ける宋學の泰斗で、其の下に雲章出で、惟肖出で而して彼れを打出したのじやから實に門下多士濟々と謂ふべきじや。然るに漢學紀原に此の名僧を逸して居るのは如何なる理由であらうか。

那波道圓の備忘録

彼の藤原惺窩、林羅山等が五山の學統を受けて世に出でたることは今縷々するまでもないが、彼の二人が盛に中古五山僧の詩文集を讀たことは惺窩文集や羅山文集等に明かである。のみならず其の門下の那波活所なども大に精讀したらしい。近頃活所備忘録(寫本三冊)を讀みし中に圓覺寺の開祖佛光國師が香を紀州熊野の靈祠に献じた詩がある、

先生採藥未曾回、故國關河幾塵埃、今日一香聊遠寄、老僧亦爲避秦來、

活所は此の詩の下に「此徐福爲熊野神之證也、絶海告明太祖詩、本于此者必矣、中津無學四世之法孫也」と附記して居る、絶海が明の太祖に英武樓に見へ熊野峯前徐福祠とやる時には其の頭の中にチャンと此の事が浮んで居つたかと思はれる。

活所は又東山の銀閣寺に遊び東求堂に題した詩がある、

寂寞將軍廟、無邊草木肥、苔深過客少、松臥古人非、流水幾時盡、行雲何處歸、長嗟山路暮、幽鳥傍吾飛、

又、癸丑元日の詩に

新年景象入陶泓、不呵浮澌試管城、兒擊飛毬俱戲笑、我題卑句寫幽情、座看殘雪白梅色、臥聽東風翠竹聲、朝日暉々如有意、牕前啼鳥正嚶々

二首共に「山人以結爲好」と記し「凡載予詩者、非曰敢自善之、欲不忘山人陶冶之辱也」と書いて居る。彼れは推敲成れば必ず羅山に批評を需めた様じや。

史記抄の著者桃源瑞仙

足利時代、五山の學問と云へば詩、文の鍛鍊が其の主なるものであつて、經史を講じて學徒に授け

るなぞと云ふことは一向重きに置かれなかつたものである。應仁以後、文明年間を中心として漸く此の講書の風が彼所にも此所にも開かれる様になつた。而して桃源瑞仙も亦其の講書家の一人で、就中、

備史事

備史事向日移專執於我罪非知者全無故公月十吹毛其九舟
後代文章又史家一事序至如霞送錢任知非子孰与江空情也
一字專執此後解小事史更難自當初雖疑焉遠乎唯有意匠森然
于第一事名不往何名作史字傾斜文章也同遠平次作事凡固也
語史收地倚一事文章也其羽老身必多酌使人醉令上氣者味不醒
一字新事氣似在筆端風雨墨痕自大明也製諸史佳國合、乃には
事叙筆削香世間情史事而日已曉教者曰又者附信梅也其是也常君
一事作史就名尚行筆鋒峻及感天怒斯又徒對地重執司馬出宗門
遂成史事也

桃源瑞仙和筆蹟

て母を失ひ、四歳にして出家し、後に相國寺の明遠俊哲に就て大事を究め、嗣法の後文明十八年に相

桃源は學殖もあり、識見も高くして、當時、桃源の先輩と云ふべき雲章一慶、竺雲等蓮、横川景三、月翁周鏡等よりも遙に一頭地を抽じて居た様に思はれる。桃源瑞仙は相國寺慈照院の一代で、永享二年六月十七日に江州に生れ、二歳にし

國寺に住し、延徳元年十月二十八日、壽五十七歳で寂した人である。

桃源の出家は生母の遺言であつた様だが、出家の後も其の繼母に對して毫も悪感情を抱かなかつたことは百濟襖、文明八年十一月五日の條に、

禪餘天寒稍甚、焦糊餅一防、寒、無、老、無、少、各、唯、一、枚、焉、耳、此、餅、昨、日、余、之、萱、堂、所、賜、也、萱、堂、即、後、母、也、非、所、生、也、不、面、者、良、久、於、義、不、可、也、然、余、有、義、與、孟、八、弟、不、可、通、者、八、弟、與、萱、堂、同、居、故、不、能、升、其、堂、遺、憾、爲、不、淺、矣、不、敢、以、非、所、生、而、疎、之、蓋、余、二、歳、而、失、母、矣、自、非、後、母、之、生、二、男、則、殆、乎、妨、余、之、出、家、之、志、焉、使、余、歸、釋、氏、而、至、今、日、者、後、母、之、恩、也。

と記して居る。弟の孟八と不中であつて、孟八が繼母と同居して居るために時々見舞ふことの出来ぬは遺憾であると云ひ、又自分の出家が出来たのは繼母が二男を生みて呉れたから、素懷を遂ぐることを得たのであると云ふ、其の親子の情愛は生母も變りがなかつた様である。弟孟八と義絶したのは、孟八始め官軍に従つて功勞があつたが、官軍が敗れてから後には賊軍に與みした爲めに、桃源は太た之を憎んで居た様である。

桃源が最も學問に興味を持ちかけた、齡三十八歳の應仁元年には、京都は戦亂の街となり身を安して勉強することも出来ず、遂に江州山上の永源寺に避けて禪坐の傍ら筆硯に親み、史記を抄し、周易を抄し、時には慕ひ來りし學徒に親ら口授して樂みとした様である。史記抄卷の第六、高祖本記第八の

末に、

丁亥應仁元年歲、五月、諸侯分黨相爭、東諸侯以細川氏爲首、西諸侯以山名氏爲首、(中略)京師喋血、天下洶々、余也、脫身於兵馬之間、一錫瓢然、岩栖谷飲、有年于此、江州之變亦不一也、及賊勢稍疆、勤王之兵日益少、黨逆之卒日益多、蓋人勝天之秋乎。

と、大息して居る。又、百衲襖の中にも

愚謂、自丁亥歲、天下瓜裂、於是乎有東朝廷西朝廷之言、僭偽之甚、莫大焉、夫天子相公之所在、不可加以東字也、既無則豈得稱朝廷也哉、且夫挾天子、而世居于相將之位者、自尊氏相承、八代于今、其溫恭和順之德、莫如今相、唯所少者剛武之略焉耳、是以賊臣作亂、塗炭乎蒼生、而未得撥亂之策者、其爲臣者之罪矣、猶可謂之柔弱而不可謂無其道也、彼以不湯武之臣、而犯不傑紂之君者、其勢可久哉、(中略)是愚之平素開大口、罵曰畜生、蓋是之謂也。と、云つて居る。箇様の事は當時の僧徒の一般に云ひ得なかつたことであるにも拘らず、桃源は何の憚る所もなく明かに之を書冊の上に記して居る。是れ其の識見の横川や月翁や其他の先輩に一頭地を抽いて居る所であらう。

桃源は又當時五山の僧徒が詞章字句の穿鑿にのみ意を要ひて、其の根柢ともなるべき經史の學に粗なるを罵つて、

凡言學者、六經三史爲體、諸子百家爲翼、是以見所未見之書、無不通者也、近世之學、則異于此、大抵率逐未而棄本者、什八九矣、蓋便于制作吟咏也、雖然每布一字、置一辭、往往不免差誤、則可無慚色哉、是浮華無實之罪也、近來盧陵會鼎曰、經似山林中花、史是園圃中花、古文高者似欄檻中花、次者似盆盎中花、下者似瓶中花、無根、蓋古人未發之名評矣、由是觀之、今之以詩文鳴者、不瓶花幾希矣。

と云つて居る。其時弊を指摘して餘す所なく、當時の作者を以て任ずる人々をして顔色なからしむるの趣がある。

桃源は又講學の暇、常に禪坐を怠らなかつた様で、所々に其の事を記して居る。

仲春稍溫、自今朝又打板坐禪、而不憂莊園之不登、而憂無一人參得箇狗無話者焉、古德之言、於今亦云。(史記抄、文明九年二月の條)

と云ひ。當時の僧徒が俗書に重きを置き、禪書を輕んずるを罵つて、

四書五經ナントノ俗書ヲ讀ムハ世ニ墮落法師ノ様ニ云タカ、其後ハ史記漢書ヲ讀タカ、今ハ其ヲモトツテライテ詩注文集ヲ本ニ習ソ、或ハ東坡山谷詩ハ何卷アルヲモ不知、四五卷十卷ハカリモ讀テアレハ能者ナカヲヲシテ、ヒマアイタカリテイルソ、殊ニ吾家ノ事ヲモヲロソカニシテ、舊參分上トハ云ヘトモ着語ノ意地ヲモ不知語録ヲモ不見分シテハ明眼テハアルマイソ。(雲梯抄七の册)

と云ひ、其の他所々に簡様のことを記して居る。此の點から見ても桃源は學に忠なるのみならず、禪道修行に心を専らにして、亂離の間に處しても一念常に茲に存して忘れなかつたことが推し測られる様である。

當時五山で鏘々の名ある人々か常に貧困であつて、横川と益之とが桃源の遷化の時に一文もなくて香資を贈ることの出來ず、兩人手を打つて大笑したと云ふ逸事があるが、桃源も亦其の數に漏れず居常窮困であつたらしい。其は、史記抄、文明七年十月六日の條に

早起推_レ戸、雪覆_二前山_一、於是童子開門雪滿松之句、知_レ爲_二自然詩_一、喪亂以來生涯_レ布而已、每歲爲_二風雪所_レ侵、及_レ春必嬰_二於傷寒之疾_一、大率以爲_レ常。

又同く八日の條に

夜禪罷、寒氣侵_レ肌、勅_レ厨細_二剉_レ蔓草_一投_レ之、多_レ水少_レ米之粥、與_レ衆啜_レ之、俗諺所謂增水云者也
(中略)嗚呼豪富家、觀_二此等物_一不足_二以唾擲_一而已、但解_二宿醉_一之晨、爲_二有功_一則、洒客時或一笑下_レ箸、亦是水壺先生之流亞矣、我輩得_レ之如_二天蘇陀味_一、其寒酸可見少焉、如_レ則者如_レ織、豈爲_二水之多_一耶、
呵々。

一碗の増水に舌鼓を打ちて天の甘露の如き思ひをなし、水多きがため則に何度なく通ふなどは殆ど乞食と擇ぶ所なき有様である。而も桃源は平氣で志氣毫も屈せず、晏如として講學を怠らなかつたこと

は頗る偉とするに足るのである。百衲襖、二十三冊の卷末にも、
余之貧與寒俱徹骨也、勝_レ去年焚無_二膏油_一、猶分_二延丈之燈_一焉。

とある。其の貧困の有様は今猶ほ歷々として見える様である。其の便所の如きも住菴以後八年目に漸く作つたものと見えて、百衲襖、文明八年十月二十六日の條に

昨日匠氏來、造_二小遺後架_一、嗚呼、自_二誅茅_一以來八年于此、未_レ有_二此作_一、抽_レ脫_レ則、向_二虛空裏_一揮_二淋漓_一、豈不_レ快矣哉、自_レ今又似_二破禪長老相似_一乎、可_レ笑。

とある。其の窮困の狀推して知るべきである。而も桃源には小倉將監實澄と云ふ大名が其の歸依者の一人で、桃源が山上に居る様になつたのも實澄の世話であつて、實澄も時々來りて禪話をなした様であるから、桃源にして請ふ所があつたならば、實澄も相應の盡力をしたに相違ない。桃源、窮困の裡にありて求めず乞はず、晏如として法施より入る所の淨財によつて終始志を渝へなかつたことは誠に慕ふべき行牀と云はねばならぬ。

桃源の遺事として傳ふべきことはまだ、澤山あつて、數十頁を費すも尙盡きないであらう。併し簡様の事を書き立て、桃源を紹介するのは寧ろ桃源の本意でもあるまいし、又余が志でない。何となれば桃源の本領は常に禪宗の不振を挽回し、一人にても作家を打出したいと云ふのが宿昔の志であつたらしい。桃源ほどの深遠なる學殖と當代に超絶したる識見とを持ち乍ら枯淡寒酸の生涯に甘むじ、終

生權貴に近かず、名利を求めず、終始一貫した人は南北朝以後あまり多くの類を見ない。此點に於ては横川も月翁も、遡つては雲章も竺雲も操志の堅きには及ぶまい。

近時、萬里や瑞溪、乃至、横川、景徐などは稍世人から知られて来た様だが、桃源の眞價はまだ毫も世に知られない。若し他日知らるゝ時代が来たとすれば、桃源は以上諸師の上に嶄然一頭地を抽くであらう。「其源深者其流遠」余は桃源傳の終りに此の一語を加へて置きたいのである。

本邦に於ける百丈清規の流布

日本に百丈清規の渡來した年月は詳には分らぬが餘程古くから流布せられた様に思はれる。その將來は聖一國師の法嗣、佛照禪師白雲惠曉あたりではなからうかと思ふ。白雲惠曉の入宋はその傳記に據ると「在宋十四年、至元己卯歸朝」とあるから入宋は恰も我が文永二年(紀元千九百二十五年)にして、歸朝は弘安二年に當るのである。弘安二年は支那にては南宋の亡びた歳で、その翌年に元の世祖が正統を受けた、宋と元との過渡期である。

白雲惠曉の入宋は、其の師聖一國師の歸朝後二十六年目にして、是れより前きに南浦紹明の入宋あり、又進では永平道元の入宋もあり、榮西祖師、明全和尚等もあつたが兎に角當時禪僧の入宋者としては五指の中に屈せらるべき人である。當時既に蘭溪、兀菴の二師も來朝して北條氏の歸崇を受け禪風は

鎌倉、博多あたりには盛に擧揚せられて居つたことは明かであるが、上來の諸師方が百丈清規を將來せられたか否やは語録に據て見たゞけでは不明瞭で、漸くその百丈忌を營まれた法語の見ゆるのは佛照白雲の語録が初めである。是れ余が白雲惠曉を以て百丈清規の將來者ではないかと推測するので、勿論、永平道元を初め聖一、蘭溪、兀菴、南浦の諸師も入宋して百丈の清規は修習せられたには相違なく、本邦にも流布せられたであらうと思はるゝも、その語録の上に散見せないから、今は假りに散見したる最も、古き語録を證據として白雲惠曉を擧げたのである。

白雲惠曉に次いで百丈清規の流布に畢生の心力を傾けられたのは建仁寺の清拙正澄(大鑑禪師)で、清拙は白雲惠曉の寂後三十三年目に來朝せられた方で、嘗に百丈清規の流布に努められたのみならず、自ら大鑑小清規一卷を編して叢林に布かれた誠に今日の禪宗にとりては最も恩徳ある方である。その小清規の維那須知の條、十佛名云々の下に

多有維那、不依唐僧說、堅執日本古例、不念小廻向、此非通人達士、殊不知、禪宗規式、皆依法云々

とありて當時我國の叢林では往々唐僧の清規に依違して居なかつた模様が分る。のみならず清拙和尚が如何に百丈禪師を追慕せられて當時の禪院に百丈忌を營ましめ様ど力められたかは師の語録中に散見する百丈忌拈香偈の數首あることゝ、その附記に由て明らかである。大鑑録日本部の中にある百丈

忌拈香偈は

湖水橋邊、野鴨飛入鼻孔、寶峯室內、怒雷轟破調樓、卷簾機、得路塞路、下堂句、看樓打樓、八十四人上、大得馬師機用、獨座大雄峯、靠定佛祖咽喉、至若創立規繩、萬古不易、此特大願海中之一毫末、有子如黃藥、孫如臨濟、子以見蓋天蓋地之源流、四夷八蠻、仰望光烈、道齊日月、無照不周、今朝諱日斯臨、圓覺遠孫、修陳薄供、不為鄉情私設、亦非記劍刻舟提香云、老和尚、是其麼、恩大難酬、

百丈祖忌、日本未曾講行、今次初設此禮、百丈以前無住持、今之住持兩序、大小職任、堂宇規式、皆百丈祖立之、為長者、不肯設忌、可謂味本、本且不知、未奚取焉、聞之者、足以勸、

此の附記の中に「百丈祖忌、日本未曾講行、今次初設此禮」とあるも、是れより先き東福寺栗棘菴の開山白雲惠曉の語録中に左記三條の拈香偈が存してある點から考ふると、日本でも清拙の來朝以前に白雲が修行せられたかとも思はるゝが、併し清拙は支那僧で日本の事情にはまだ充分でなかりしため斯くは云はれたのではあるまいかとも思はれる。参考のため白雲の拈香偈を掲げて置かふ。

百丈 忌拈香

白雲 惠曉 (同和尚語録)

江西馬駒嫡兒、天下叢林祖師、居八十四人頂、畫模樣制清規、接黃檗宗教、共舉得山體用交馳、雖然如是、大和似截鶴膊續鳧足、未免千古萬古被是非、舉香云、東福今日為是他為非他、舉香云、本分草

料還他方須知、

同

白雲 惠曉 (同錄)

當機一喝三日耳聾、獨體無識堪續家風、浩然卓犖、獨座雄峯奇特妙用、諸方不同、何故如此、江西一脉浩渺無窮、大唐日本洪波拍空、往々叢林盛如鼎沸、在々子孫宗通說通、且道是為恩是為怨、若恩須負、若怨須還、東福今日拈片木熱向爐中、是為負是為還、良久舉香云、債無頭怨無主、

同

白雲 惠曉 (同錄)

居八十四人首、為馬駒第一兒、獨座雄峯頂上、展大用振大機、潔於玉明於鏡、外無物內無私、創叢林作規矩、撲不破故不委、因甚如此、須識一喝三日耳聾、黃檗開舉無端吐舌、東福今日要雪此屈、拈來片木熱向爐中為委、只有辜負無輔弼、

次に清拙和尚語録の附録に、左記の無隱元晦の記事が載せてあつて、其の中にも本朝の禪林にて百丈忌を營まないことを云つて居られるし、又塔銘の中にも同く記してある。元晦の文に

建武甲戌二月、予酒掃本師明覺禪師塔、寓建仁普光菴、東道主者、大鑑禪師也、五月下旬、師獨來菴所、告予曰、爾補後板、缺予願不腆、固辭過三、師強不、免、六月既望就職、予白師言、不敏僻在鄉村、不歷叢林清要、久矣、舉措不諳法度、請師見教、即袖携禪林備用問師、從頭講、到百丈忌段、師告予曰、我欲斯日死、何故、本朝禪林、未做百丈忌、深可歎也、斯日我死、令

本邦に於ける百丈清規の流布

我小師、不_レ做、我、忌、做、百丈、忌、當時予以謂戲耳、別後六年、曆應己卯歲、予在_二樂之顯孝、忽聞_レ訃、問_二臨終日、果是正月十七日也、善知識、一念善觀無量劫、嗚呼誠哉、予以_二斯事、徧問_二其高弟小師、鮮_レ有_二識者、貞和戊子歲、予繼_二師、後席、南禪重寶、資都寺、禪居雁門、序首座、偕來而求_レ記_二於斯事、明年貞和五年、歲次己丑、正月十七日、建仁住持比丘無隱元晦謹識、

又、同塔銘の記中、末後の模様が録してある中にも

(上略)遂呼侍者澄密曰、汝是末後侍者、還會末後句麼、密泣而無言、師呵々大笑曰、今日_二適、百丈、祖忌之辰、吾將行矣、命請_二璞翁琢首座、古田虞首座、玉峰璨都寺、至、爲證明、云々

とある、

白雲惠曉の語録を見ずしてたゞ清拙和尚の語録だけを見て居れば日本にての百丈忌營辨の鼻祖は清拙和尚の様に思はるゝが清拙は後醍醐天皇の嘉暦二年に來朝した方で、白雲惠曉の寂後三十一年目に相當するのである。白雲の語録に百丈祖忌の香語が三つも載つて居る位であるから東福寺では當時百丈忌を修せられたことは明かで、爾後或は中絶して清拙の來朝頃には何れの叢林にも百丈忌は修行せられずに居たから斯くは云はれたのであらうと思ふ。若し白雲惠曉の生前中に清拙が來朝せられたならば東福、建長、建仁の諸山は相俟つて盛に百丈の祖忌も營辨せられたのであらうと思ふ。

併し此の白雲惠曉や清拙正澄の時代には、まだ現存の百丈清規は出來て居なかつたので、當時の清規

は所謂百丈の古清規でありはせなかつたかとも思はれる、今ざつと支那に於ける禪宗の清規の種類を擧げると第一が唐の元和中に出來た、百丈清規で、第二は崇寧清規(或禪苑清規とも云ふ)である、これは宋の徽宗皇帝の崇寧二年に長蘆願禪師の作られたものである。第三は日用清規で、是れは宋の寧宗嘉定年間に無量壽禪師の作である。第四は咸淳清規(或は婺州清規、叢林校定清規とも云ふ)で、是れは宋の度宗皇帝の咸淳十年に婺州金華山後湖の惟勉和尚が作られたものである。第五は備用清規(或は澤山備用清規、至大清規とも云ふ)で、これは元の武宗皇帝の至大二年に廬山東林の澤山咸淳禪師の作である。禪師は松源岳より四世の法孫に當る人である。第六は勅修清規で、元の文宗皇帝の時に百丈山の東陽德輝が百丈の古清規を參酌して重編し、大詬笑隱が校正したもので今日所謂百丈清規と云ふのは是の勅修清規を云つて居るのである。此の外に律苑清規、教苑清規と云ふものがあつて、以上を古來よりは清規と稱し、東福寺の雲章一慶は更らに永平寺道元和尚の建漸清規を加へて九清規と稱せられたが、雲章が大鑑の小清規をその中に加へなかつたのは本邦の祖師でなかつたからではあるまいかと思はれる。

現存流布の百丈清規即ち勅修清規は、古來の一説によると、元の文宗皇帝の時代に、既に百丈の古清規が失せて仕舞つて唐の揚億の序だけが残つて居たのを東陽德輝が重編した様に云ふ説もあるが是れは恐らく間違いであらう。全體、百丈禪師の作られて以後清規が五種ばかり元の初めまでに出來たの

は時代の變遷、其他應變の關係から其の必要に應じて出來たに相違ない、あまれ清規の種類が多く出來たために後には思ひ／＼になりて規矩一ならざるの弊が生じたから、爰に於いて百丈の古清規を中
心となし其の他の清規を羽翼として東陽が重編せられたものであつて、當時既に混びて居つたと云ふ
ことは出來ない。何となればその現存の百丈清規以前に、百丈清規を行つて居たことが歐陽玄の序文
の中にある。

天曆、至順間、文宗皇帝、建大龍翔集慶寺於金陵、寺成以十方僧居之、有旨行百丈清規、元統
三年乙亥秋七月、今上皇帝申前朝之命、若曰、近年叢林清規、往々増損不一、於是特敕百丈山大智
壽聖禪師住持德輝重輯其爲書、仍敕大龍翔集慶寺住持大訴、選有學業沙門共校正之、期於歸
一、使遵行爲常法、

とある。現存の百丈清規の出來たのは順宗皇帝の至元二年であつて、而も是れより數年前の天曆、至
順年間、即ち文宗皇帝の時に「有旨行百丈清規」とあるに見ても明かである。又「近年叢林清規往
々不一」とある、是れが即ち百丈清規を重編した理由で、決して亡びて仕舞つたと云ふことは出來な
い證據である。

現存の百丈清規は元の至元二年即ち我國の延元元年に重編せられ、其の初めて上梓せられたのは元の
至正三年我國の康永二年に當るので、恰も重修以後八年目に支那で板に刻せられたのである。而して

此の至正二年は白雲惠曉の寂後正に三十九年、清拙正澄の來朝後正に十年であるから、白雲は現存の
百丈清規を知らず、清拙も我國に來て居られたから或は重編せられたことを知らなかつたかも知れぬ、
併し此の二人は勿論百丈の古清規を携へて來たのだらふと思ふ。而して清拙は百丈清規の重編後、四
年目に寂せられたから勿論彼地にて出來た版本を見なかつたことも明かである。

然らば現存の重修百丈清規は何人が初めて日本に流布せられたであらふかといふに、余の考ふる所で
は建仁寺の中岩圓月か又は古鏡明千の二師の中であらうと思ふ。中岩圓月は正中元年支那に入り後に
百丈山に登りて輝東陽に就きて法を嗣ぎ、後四年目の正慶二年に歸朝した方で、東陽は即ち文宗の
敕を奉じて百丈清規を重修せられた人である。併しその重修の年月は中岩の歸朝後三年目に當る元の
至元二年、我が延元元年に當つて、當時中岩は鎌倉の圓覺寺又は常州の鹿島等にあつたが、歸朝の後百
丈山の輝東陽に書を贈つて問候せられ其の文も既に東海一瀉集に載つて居るし、又會下に在りし時に
は天下師表關の記迄も作らしめられた程に東陽から重んぜられて居られたから、重修本は多分東陽よ
り贈られたであらふと思ふ、東陽に贈られた書簡は、年月は確に分らぬが「吉祥寺副法小師圓月九拜
上書」とあつて、圓月の吉祥寺を上州利根に創められたのが康永三年であるから、恐らくは此の年頃
であらふと思ふ。然れば此の前年には支那では東陽の百丈清規は開版せられて居るから思ふに最新刊
の重修百丈清規を日本で初めて手にしたのは中岩圓月ではあるまいかと想像せられるのである。古鏡

明千も支那に遍参せられた人ではあるが、其入元の年代が今一つ分明ならぬために、先づ東陽に縁故の深い中岩を擧ぐるも敢て不當ではなからう。而して此の百丈清規をば日本に印行し流布したのは清拙の法嗣に當る建仁寺の古鏡明千である。百丈清規の卷尾にも

龍翔笑隱、百丈東陽、迺天下名師也、同時奉 敕以重編校正百丈古清規本、寔元朝叢林之盛典也、厥禮數顛末、便于觀覽者、智者、東林兩本之所不及矣、予故摹繪、繡梓于板、以廣其流通云爾、

文和丙申王春初吉

前真如明千謹識

とある。清拙には天境靈致、獨芳清曇、古鏡明千、大材堅梁、正翁清雅、中山清閭、溫中清瑜等七人の法嗣があつて、就中、天境と古鏡とは傑出した人である。古鏡明千は蚤に元に入りて久しく雪峰の樵隱悟逸の室に入り、又樵隱に隨つて抗州の淨慈寺に移り長らく彼の國に居た人で、歸朝後に京の眞如寺に住し尋いで萬壽寺に移り、延文五年五月二十二日に建仁寺の禪居庵に寂した人である。

百丈清規の我國に翻刻せられた文和五年丙申は、元朝で刻版後、十四年目であるから思ふに古鏡明千が支那に參學中、其の新刻本を得て之れを我國に齎らし歸つてしたものか、或は中岩圓月から之れを得て覆刻したか、此邊は史實の徵すべきものがないから疑問に附するより道はないが、兎に角現存の百丈清規の本邦に流布したのは全く古鏡明千と中岩圓月の力で、而も元朝にて開板後僅か十四年目に日本で覆刻せられたる事は古鏡明千が其の師清拙正澄の遺訓を深く心に銘して居たからではあるまい

か、此點に於ては清拙和尚は日本の百丈和尚とも謂ふべく、若くは百丈の再來として尊崇すべき人云はねばならぬ。當時信州の太守小笠原貞宗は清拙和尚に歸依し其の地に請して開善寺を創め開山第一世となしたが、今日所謂小笠原流の禮式は當時清拙和尚が百丈清規を本として口授せられたものであると云ふことである。天龍寺の東陵永瓊の撰したる「清拙大鑑禪師塔銘」の中にも

如建仁時、信州太守小笠原朝臣貞宗、領男并老幼、俱稟戒受衣、執弟子禮、就信州伊賀良庄、創建梵刹一所、山名、壘秀、寺曰、開山、并依百丈清規行焉、

とある。百丈清規は今や叢林に廢れて居るにも拘らず、却て其の一部分が在家の禮法の上に殘つて上流家庭に存して居るのがまだしもの慰安である。

日本では大鑑禪師の小清規以後、曹洞の道元、瑩山二祖の清規を別として、五山にては惠日清規を始め、南禪寺にも清規があつたと見えて、余が前年内閣文庫の藏書を閲覽した時に韋菴日用と題する古寫本一冊を手にしたことがある、その奥書の中に

桃洞移寮以來、禮法樣、所見所聞、梅藏惟敬西堂求所問、日々記焉、復引規舊之本、據書耳。

釋周建、記於葦菴撰焉

とあつて、中に南禪法規の一斑が記してあつた。是れで見ると釋周建が南禪日用の清規を記したものである。天龍寺にも心翁和尚假名清規が一冊あつて、是れは靈龜山天龍寺の年中日用清規を書いたも

ので、足利の末に天龍寺心翁等安の手によりて出来たものである。又相國寺にては、能言清規一冊があつて、是れは應永の頃、相國寺の開創間もなく出来たものらしく、同く相國寺の日用の規矩が假名で記述してある。

要するに本邦にても便宜上、本山毎に清規は出来てはあつたが、其の根本は百丈清規に依違してあるのを見ると百丈の流風が如何に日域の叢林に感化を與へたかを想像することが出来るので、後昆たる者は長へに百丈祖師の恩徳を忘れてはならぬ。

次に此の百丈清規は南北朝の頃より中岩圓月、義堂周信等が幾たびか講せられて叢林の學徒をして其の修習に力めしめられたことがある。足利の末頃に出来た日用清規鈔の中には

敎修清規ヲ講シ始メマシタ事ハ慈氏和尚(義堂ノ事)權輿也、在唐ノ僧ニ御問ヒアツテ清規ノ本ノ首書ニメサレタ別ニカキワツシテ抄ト云フ

とあるが、是れは間違ひで、日本で此の清規を講じ始めたのは建仁寺の中岩圓月で、中岩は前にも云つた如く正中元年に元に入り、入元後、六年目の冬、百丈山に掛錫して時の住持輝東陽に就きて嗣法し、其の翌年百丈山にて天下師表閣を建てた時には日本僧でありながら閣の上梁文を作することを命ぜられたことがある、是の事は中岩の自ら筆録した自曆譜に記してある。簡様な譯であるから重修の百丈清規とは最も縁故の深い方である。而して歸朝後、二十七年目の延文四年には京の萬壽寺に住し秋

に至り百丈清規を講せられたことがある。自曆譜の延文四年の條に「六月得洛之萬壽之命、八月八日入寺、秋講敎修清規」とある、恰も古鏡明千が百丈清規を覆刻してから四年目に當るので、中岩の講はなほ是れに止らず、八年の後、即ち貞治六年には鎌倉建長寺に在つて同く百丈清規を講じたことは、自曆譜の中には見えないが義堂の空華日工集に據ると、集の貞治六年十二月十三日の條に「就于建長衆寮、聽長老中岩講清規」とある。自曆譜に據ると「秋受建長之請、冬十月初三日入寺」とあるから、當時、中岩の建長に住して居たことは確實である。是れで見ると百丈清規を日本に始めて講じた人は中岩が最初で、義堂は二番目である。

義堂が百丈清規を講じたことは是れも空華日工集の中に數所に散見して居る。第一は應安三年正月十三日の條に「建長寺泰崇二侍者、求講百丈清規、余戲答之曰、今時所講皆孫吳兵法耳、清規雖講、恐無所施、皆憤謝而去」とある。同く二月二十一日の條には「泰侍者、重求講百丈清規、余拒而曰、夫清規者、日用四威儀中事、具於一心、一心若正、則清規何施哉、而反是、則終日口談目視、只是虛費工夫耳、泰不復言、遂巡作禮而去」とある。是は一時の激勵でなくて多分講せられなかつたであらふと思ふ。その初めて講じたことが見ゆるのは日工集康暦二年六月十日の條に「爲妙夫藏主、元隸侍者求、初講日用清規、管領及令弟將作、特來聽之」とある。併し是れは百丈清規にあらずして日用清規である。此の講は同年十一月に終つたと見えて十一月二十三日の條に「爲衆、講日用清規」とあり、又二

十六日の條には「講畢」とある。その百丈清規を講せられたことの始めて見ゆるのは永徳三年京の等持寺に在りし時、六月二十日の條に「余歸_ニ等持_一講清規」とある。清規とあつて百丈とはいはれないが、前きの日用清規の時は題號があつたにも拘らず此れには記してないから、多分百丈清規であらふと思はれる。次に同年九月一日の條に「講清規」とあり、越へて至徳二年五月二日の條には「開講教修百丈清規」と明らかに記してある。而して六月一日の條にも

說法罷下座、衣鉢侍者告、玉振岩、誦南源聽法、然在衆中立、余不能見及、故缺謝詞、余以使報齋、山門行事畢、二人來謂、今日齋罷、當陪講筵、幸而聽上堂法語、是以冒早而來云々、衆寮化席大衆、點茶上堂、有偈曰、

百丈當初曾卷席、趙州一味只行茶、叢林禮樂從茲盛、徧界香飄蘆蘂華、

今日講清規、余入院以後、振岩自東福、移居山中天德菴、蓋爲近聽余講、且欲便問字也、

とあり。又、同月二十九日の條に「清規畢于今日也」とある。即ち中岩に次いで義堂の百丈清規を講せられたことは明瞭である。是れに由て之を見れば百丈清規の日本に流布した最初は東福寺の白雲惠曉と、建仁寺の清拙正澄とにその功を歸せねばならぬし、又現存重修の百丈清規が流布せられた功績は中岩圓月は之れを叢林にて講じた第一人として、古鏡明千はその覆刻の翹楚として共に功績を録せねばならぬ次第である。

義堂以後に於て百丈清規の講せられて、而もその講本の現存せるは後花園天皇の長祿三年より寛正三年の四年間に涉りて相國寺の益之宗儀、月翁周鏡、龜泉集證、壽春妙永、横川景三、萬里周九、景徐周麟、南禪寺の希世靈彦、利涉守湊、蘭坡景。建仁寺の正宗龍統、桂林德昌、古雲云。東福寺の大痴、起春、岷江、天覺、桃溪、季弘、春湖、萬壽寺の天祐梵蝦等、當時鏘々の老宿が發起によりて、東福寺の雲章一慶を請して百丈清規の講筵を請ひ、其の筆記を相國寺の桃源瑞仙がなして

○百丈清規 雲桃抄 五冊

が出来て居る。此の抄本は寫本のまゝ、轉々して今日に残つて居るが是れを見ても如何に本邦の五山にて百丈清規を重寶として之を日用に遵守したかを想像することが出来る。當に足利時代のみならず徳川時代にも開版せられたが寶永五年に祝融の災に版木が失せたのを享保五年に妙心寺龍華院の無着和尚が再刻して居らるゝに見ても我が叢林に於て百丈清規を重むじたことは明瞭である。

更らに一事の附記すべきことがある。それは百丈禪師の述作が榮西禪師の禪宗を我國に流通せらるゝより以前、大凡三百八十年前に日本に傳來して居たことである。榮西の傳來した禪は南禪であつて、所謂北宗の禪なるものは比叡山の傳教大師が傳へて歸つたと云ふことであるが、今ま傳教の將來目錄を見ると、禪に關する書物の中では

○曹溪大師傳 一 卷 ○達磨系圖 十五紙 一 卷

本邦に於ける百丈清規の流布

より見當らないし。更らに弘法大師の將來目錄の中には何等の禪に関する典籍が將來せられて居らぬ。而して慈覺大師の將來目錄に據ると、

○曹溪寶林傳 十卷一帙 會稽沙門靈徹字明泳序

が將來目錄の中に載つて居る。次いで又智證大師の將來目錄によると禪の典籍は以前に倍して將來されて居る、先づ。

○禪門要略 天台 一 卷

○南宗祖師謚號 一 本

○新州忍禪師碑文 一 本

○南宗荷澤禪師問答雜微 一 卷

○達磨宗系圖 一 卷

○達磨和尚悟性論 一 卷 未詳

○曹溪能大師壇經 一 卷

○六祖和尚觀心偈 一 卷

○見道性歌 永嘉 一 卷

○永嘉覺大師集 一 卷

○達磨尊者行狀 一 卷

○菩提達磨碑文 一 本

○少林寺釋慧可本狀 一 卷

○可和尚碑文 一 本

○唐部州曹溪釋慧能實錄 一 本

○荷澤和尚禪要 一 卷

は其の主なるものであつて、此の將來目錄の中に

○百丈山和尚要決 一 卷

と云ふのである。此は勿論百丈大智禪師の著述に相違ないが、智證大師が入唐せられたのは仁明天皇の仁壽三年で、在唐六年にして文德天皇の天安二年に歸朝せられたのである。従つてその將來目錄の終りに「巨唐大中十二年五月十五日、日本國上都比叡山延曆寺比丘圓珍録」とある。唐の大中十二年は恰も我國の天安二年に相當するのであるが、此の天安二年は榮西禪師の禪宗を傳へて歸朝せられた建久二年より三三三四十一年の前者で、聖一國師の禪宗を傳へて歸朝せられた仁治二年より正に三三八十四年の前者に當るのである。然れば茲に掲げた智證大師將來の十四種の禪宗典籍は榮西の弘通前、三三四十一年の先きに我邦に渡來し、聖一の禪宗宣布より前、三三八十四年の先きに日本に將來せられて居たものであると云つてよい。殊に六祖壇經、永嘉の證道歌を始めとして百丈和尚の要決が榮西、聖一兩祖の禪宗弘通前に我國に傳來されて居つたと云ふことは如何にも百丈禪師が我國に因縁の深いことを暗示して居る様である。百丈禪師は唐の憲宗の元和九年正月十七日に寂して、滅後四十一年目に其の述作が我國に傳はつて居る次第で、よし其の要決一卷が今日既に混びて傳はらぬにもせよ、日本の天台禪に少なからぬ法益を興えたに相違ない。此の事に關しては、義堂の空華日工集の應安四年十一月三十日の條に、實因と云ふ人の談話を記した中に

又説、信心銘、證道歌、比叡山慈覺大師、一箱有之、先皇對天台座主問之、座主應諾、蓋慈覺、唐會昌年中入唐、

とある、此の慈覺とあるは知證の間違であらふが、兎に角此の頃、既に禪宗の人にも知れ涉つて居たと見えるから、別に珍説とは思はないが序でに記したのである。禪宗と云へば達磨大師に限られて百丈禪師を云ふ人も聯想する者も少ないが、若し不幸にして百丈禪師が當時出現せなかつたならば法堂、僧堂の設けを始めとして、叢林の規矩は勿論制定されずして、禪僧は何時までも或は律院に寓舎し、樹上石上に座して諸部の阿笈摩教徒に隨行し、獨立したる禪居を立つる事が出来なかつたかも知れない。否、出来なかつたであらふ。故に黃山は百丈山天下師表閣の記事にも

蓋佛之道、以達磨而明、佛之事、以百丈而備、

と云つたのは千古不磨の明言であつて、此の點から推しても百丈祖師の忌日は年々禪宗に於ては達磨と同じく之を修行して報恩の意を表せねばなるまい。實に報恩たるのみならず擁僧をして百丈の何者たるを知らしむるだけでも將來綱紀の頽廢を防ぐ一助ともなり、又現時の如く亂れに亂れたる宗門の風紀を振肅するの裨補ともなるであらふ。

余は近頃三十餘種の語録を披覽して百丈禪師に關する法語の數章を検出したから、左に録して本邦に於ける百丈忌の沿革を知るの参照に供しやう、

百丈大智禪師

清拙正澄 (大鑑錄、贊之部)

野鴨橋邊鼻頭痛、繩牀角畔雙耳聾、言爲天下禮法、道爲萬世師宗、使四海叢林左規右矩、鏗々鏘々

乎碧玉黃琮、是以有龍縱之姿、能荷馬祖大機大用、有鸞翔之勢、立名教盛德豐功、最是異常奇特事、巍然獨座大雄峯、

百丈大智祖師塔

清拙正澄 (禪居集)

一喝當陽吼怒雷、耳聾三日便生理、若論大寂全機用、喚起重教喫棒來、

百丈忌拈香

乾峯士曇 (乾峯錄)

天下禪林行植來、英標拔出振風拈、道香果熟憑茲得、德蔭敷榮藉此知、大輅推輪論不足、住山矧斧自當持、今朝擊碎野狐窠、五百生前一段疑、

百丈忌

雪村友梅 (雪村錄)

巍然獨座大雄峯、規矩清嚴怕近濃、一陣香風迎花信、雪消丹嶽見春容、

賀穎中山住東禪贈敕脩清規

義堂周信 (空華集卷の二)

重刊百丈舊清規、十卜千于字々疑、送與東禪憑校定、叢林古格貴人知、

大智禪師

別源圓旨 (商游集)

相見先須還主禮、叢林千載有清規、若論當日耳聾事、未肯炊巾展向伊、

百丈餓死

三首 一休宗純 (狂雲集)

爲人苦行也天然、大用分明即現前、一日不作必不食、大人手段作家禪、

古人受用幾嘗艱、不是尋常談笑間、飲食痛飲飯袋子、又衣翫水又游山、工夫長養大慈心、臨濟消來萬兩金、昔日艱難聞吐哺、簑衣、笠鏗頭吟、

百丈絕會

一休宗純 (狂雲集)

大智禪師難行道、末法爲人眞落草、飽食痛飲熱鐵丸、初懼泉下閻羅老、

百丈和尚

一絲文守 (佛頂國師錄)

再參喝下見全機、不是銷玄與鑠微、若解長誇窮活計、誰教禮樂屬緇衣、

百丈關田圖

澤菴宗彭 (明暗双々集)

祖父田園草日深、耕開來地有黃金。若於佛法欲求義、獨掌拍空如待音、

百丈持杖見死野狐圖

同上

後百丈兮前百丈、從來五五二十三、野狐變未必爲變、甘草苦黃連却甘、

百丈大智禪師一千年忌 文化十年癸丑正月十七日

妙心住山 海門禪恪

鼻痛耳聾那一物、千年滯貨少人求、賣來黃檗機先喝、吐出春風百草頭、

五山時代の聯句

天龍寺策彦和尚の書たい書に蠶測集と云ふものがある。この書は主として當時五山で流行した聯句に用ゆる故事を、童蒙のために解釋したもので當時の五山僧が如何に詞章、字句の穿鑿に耽つたか其の一斑を知ることが出来るのである。

聯句と云ふものは勿論支那の産物であつて、彼國にては古くより流行したので、韓退之の如き最も好むだらしい。これが我邦に流行した年代は不明であるが勿論五山僧が輸入したらしい。余が見たる五山僧の記録に現はれて居るのは義堂の空華日工集で、康曆二年庚申八月の條に

八日赴二條殿倭漢聯句會

云々とあつて、同く十日の記録に

玉岡、將二條准后書來、詳說八日和漢聯句之會

同く三年九月の條に

二十四日、二條准后以三和漢聯句一見招、以疾辭焉

同く十月の條にも

二日爲二條攝政殿求點漢漢聯句

又十一月七日、義滿と對談の記事中にも

二條殿昨者出三和漢聯句序、因勸幸有二等持長老何不學風雅云々

と記し、其他同月の條に

十九日、與大清同赴二條殿、而聯句、句殿下發題、同會者萬里小路父子、侍從中納言坊城父子、僧伴、相山、雲溪、

二十二日(中略)天境諱靈致、甲州人、嗣澄清拙、享年八十一、余在東山時舊交、性喜聯句、故雖臥病亦與客聯句、

とあり。同く十二月の條に

二十三日赴等持院雪庭忌齋、齋前游法華堂、堂主人元章舉和、余送中竺偈、曰、等持三昧力、竺土大仙心、余曰、止々、只箇一聯說得十分也、芳玉腕袖茗而來且出、看山聯句一百韻者、而求點兼改、改且點、仍跋于其尾、又改看字作觀

又永徳二年十二月の條にも

二十七日晴、二條准后以使送聯句、求改且點、點六十句、改數十字

云々とある。此の外、聯句に關しての記載はまた十餘箇所もあるが、繁を避けて爰には載せない。

以上記した所に據て見ても、當時聯句の流行したことが窺はれるので、五山僧の側では玉岡如金、太清宗渭、天境靈致、元章周郁、玉腕梵芳、雲溪支山。公卿の側では二條太政大臣、萬里小路、坊城中納言等の名が見へる。又足利義滿なども大に聯句を好んだ様子が日工集の中に書いてある。

先皇曰潛邸梵宮冠東南金碧羅綺室書旌幢覆瓿
 龍駐神光百靈護靈地蛟龍窟氣新殿雍
 聖覽蟾生瀛樓道星辰直新秋練烟霧合浮園琅當
 語著藻井衆慈尚曾暉鏡風光清旭冰蠶望氣
 芭砂遠開空同地御承座宛宛著仙仗華純純
 珠橋鏤玉栴提座滿寶龍遺了注父老朝豆奔
 侯男衣冠開原廟着才戰園精才尺尺京訓光銘
 鼎紀書評
 聖作萬世新法慈諸佛兼目譯經六者圖繪笑
 像三華髮象頰作光象教一嚶語猿鶴驚此志新林
 彌先餘慈齊厨飯香露著暝閣鐘聲銷萬渴獸快
 光礎臨摩庸耽洒掃地無補新偈勇知匪堪燥勿若
 屢沃肅苦心策頻探焚膏續迅畧老捲簾納露嵐
 能月采淨斷歡落雲液甘風韻擬古栢著秋陰挾高
 掛戶騰蜂脚盡光丹青海波滴社中合陶謝新方外
 時醒神息影了虛寐者極禪屏癡貪慈翁交折聖光

聯句の書物で今日に残つて居るのは随分ある様だが、五山に關したものの中にても

湯山聯句 (景徐周麟、壽春妙永)

江東識盧三千句 (横川景三、桃源瑞仙等)

城西聯句 (策彦周良、江心承董)

鳳城聯句

等は多く人の知る所で、版本も今日に傳はつて居るが、この他に寫本で、應永から文明頃へかけての聯句本が大分に現存して居る。

余が手許に聯句の寫本が二部あるが、其の一部は應永十二年の正月五日東山の慈聖院で作つたものと、其外に文明から寛正頃の聯句を集めたもの、今一冊は嵯峨天龍寺で熙春龍喜、策彦周良等の會して作つたものを集めたので、當時の五山僧が寄るとさはると直ちに文字を

弄したところだけが知り得らるゝのである。上に記した應永十二年正月五日の聯句の如きは全く滑稽を以て充たされて居る。一二を例せば

錢持慈聖院 今秋十三霜 佛事難請假 布施暗推量 預欲摩韻府
又案作衣裳 古綿不足質 小袖破難張

と云ふが如き、又
火後東山寺 零落目不當 立名字接待 開賄賂私倉 新掛塔充滿
瘦蒙堂繁昌 衣鉢脚生蚕 行者脛下益

と云ふ様な調子で、全篇洒落盡してある。其の代りに奥書には「此聯句、専有名無實、新來濫進、當山熟人沙喝等、請勿敢嘆」と云ふ様な斷り書きがある。是れ等は全く異例として掲げたのであるが、前に掲げた湯山聯句は相國寺の景徐周麟が明應九年の五月に、壽春妙永と共に有馬の温泉に湯治に出かけて居た時の、二人の唱和を集めたもので、五月の五日から二十三日迄に一千句を作つて居る。江東識廬三千句は文正元年八月二十四日に相國寺の横川景三が桃源瑞仙と共に京師の亂を避くるために江州の永源寺に行き、寺内の識廬菴に在て唱和したもので、大凡三千句ほどある。城西聯句は天龍寺妙智院の策彦が、三秀院の江心承董と唱和したもので是は九千句ある。其他鳳城聯句或は石哲集の如きは慶長以後の和漢聯句を集めたもので、南北朝以後、聯句の流行せなかつた時代はないと云ふても

よい位である。

又聯句の中でも和漢聯句、漢和聯句等の種類もあるが是等は別に後日改めて述べることにしやう。聯句のことに就ては相國寺光源院の惟高妙安が城西聯句の跋に下の如きことと書いて居るから採萃して見やう。

斯作倡空花(義堂のこと)蕉堅諸老以來、公襲甚者、玉府汝梅、天隱、二甘露。金春玉應累々榮々好事編集名要澤聯句。近來吾山横川師有江東識廬三千句、景徐翁有津南湯山一千句、是皆脗灸叢林、云々とある。是れにて見るも五山の聯句は義堂や絶海から始まつたらしい。この外に時代は下るが建仁寺の月舟壽桂、龍崇常菴、雪嶺永瑾の如き、當時東山の三佛と稱せられ、詩文の達者として知られた人で、聯句の批點なども此等の人に依て多くせられ、又天隱龍澤の如きも、天隱の批點として今日に残つて居るものが少々ある。

禪文學より觀たる花園

日本の臨濟宗は二十四流或は四十六流に別れて居りますが、併し之を大觀すれば無準派と松源派との二つが日本の臨濟宗を代表して居ります。モー一つ遡つて之を大別すれば青原派と南嶽派との兩派に歸する次第であります。その南岳系に屬する松源の一派は日本にては南浦大應國師が之を代表

し、無準派の一派に屬する日本の代表者は東福寺の聖一國師と、圓覺寺の佛光國師とが代表となる譯
 けであります。鎌倉時代に於きまして此の二大系統が臨濟宗の上に角立致しまして大應國師の一派は
 鎌倉にては建長寺、京都に於きましては大應の下に大燈國師があられまして大徳寺がその本家本元と
 なり、尋いで大燈の下に關山國師があられて妙心寺も其の代表者となり、ツマリ大徳寺と妙心寺とが
 對立して大應一派の根據地を作りました。而して無準一派に屬する系統は鎌倉にては圓覺寺、京都に
 ては東福寺がその根據地となりましたが、京都にては東福寺の聖一國師門下に十三人も一時に傑物が
 輩出しまして盛んに無準一派の法幢を建立し、鎌倉にては佛光國師の下に佛國國師出で、佛國の下に
 夢窓國師があられて南浦一派に對抗する様になりました。

大別すれば右様の次第であります。無準下に屬する佛光國師の一派は鎌倉にては北條氏の歸崇を受
 けて門風はますます盛んになり、夢窓に至りましては足利氏の歸依を受けて一時は殆ど天下の禪林を
 席卷したと云つてもよい位に立ち至りました。然るに一方の松源下に屬する大應國師は後宇多帝の寵
 遇を蒙り大燈國師は後醍醐帝の殊遇を受けましたが何分にも大權が武門に歸して居りました時代であ
 りますから北條氏や足利氏の歸崇を受けました佛光、夢窓の一派は事實上に於いて天下の禪門を席
 巻するの便があつたのは大勢上然るべき事であります。従つて當時の所謂禪なる者は佛光、夢窓の禪が
 行はれて居つた次第で、大應一派の禪は妙心、大徳、建長以外には其の勢力はなかつた様に思はれま

す。然るに關山國師の下に數傳して雪江宗深出で雪江の下に東陽英朝、特芳禪傑、悟溪宗頓、景川宗
 隆の四神足が輩出して門風を擧揚しましたから遂には今日の如く日本の臨濟宗を折半して其の半ばを
 領有する様になり、のみならず徳川時代には白隱和尚はその法流の下から崛起して今日日本の臨濟宗
 をして悉く南浦一派の下に歸せしむる様になりましたのは全く鎌倉や足利時代に於いて竊かに養ふ所
 があつたから今日此の光明を發揮することが出来たのであらふと思ひます。此の點から推して論じま
 すれば無準の一派は今や松源の一派に壓倒せられたと申しても差支へなき様に思はれます。

右に申しました如く、佛光、夢窓の二師は北條、足利等の歸依を受けましたから所謂武家宗になりま
 して就中、足利時代に至りまして其の法子法孫は殆ど武家の手先き足先きになつた傾きが見えます。
 是れは勢ひ免れない事ではありますが、幸に夢窓の下に義堂、絶海、龍湫、古劍の如き文才ある人
 物が輩出し、聖一國師の法孫には虎關が出で、建仁にては雪村、別源の如き學徳并び高き人が鬱然と
 して輩出しましたから、禪文學の上に於きましても前古未だ觀ざるの盛觀を呈しました。是れを世に
 五山文學と稱しまして或る一時期を劃してその研究に志す者が出づる様になりました。併し此の文學
 が禪林の間に起る様になりましたのは偶然ではなくては當時は元、明の間に禪僧が往來しましたから
 彼れの文物が自然に我國に移植された影響で不思議はない、寧ろ必然の結果ではあります。是れが
 又偶然にも當時我國にては比較上文運の衰頹した時代に起つたのでありますから我が文運に多少の貢

獻をして居ると云ふことを認めねばならぬ、従つて此の時代を研究する人には輕々に看過することの出来ない事實の存するのは當然であります。此の時代に於いて花園一派にては文學の狀態は如何様でありましたか之れを穿鑿するのも一興であると存じますから是れより本題に立ち戻りまして所見のあらましを申し上げます。

南北朝より足利時代を通じて夢窓一派の勢力發展と共に五山の文學も勃興しましたが、花園、即ち妙心寺に於きましても私の敬服する人々は多少此の時代に輩出した様に思はれます。その第一に數ふべきは桃隱、玄朔であります、桃隱は日峰宗舜の法嗣で關山國師より五代目の法孫に當る人でその傳記は延寶傳燈錄の二十八卷に出で居りますが、始め東福寺に入つて僧となりましたが天性才學に秀でた人でありまして、ために同參の衲子から嫉まれ、殊に當時の東福寺は九條家一條家を始め公卿の小供が多く僧となつて居た際に桃隱は大工の子でありましたから大衆から輕賤せられ、一日桃隱を挑みて壟を越ゆるの遊戲をいたしました時に、大衆相約して壟を越へんとする者は先づその家系を名乗ることに相談しました、時に或る者は某帝幾世の末裔とか或る者は某大臣幾代の孫とかそれ／＼名家豪族の裔たることを唱へたに拘らず、悲哉、桃隱は大工の子でありますから之れに拮抗することが出来ない、是に於て桃隱は己れの番に至るや大喝して「吾は是れ釋迦牟尼佛幾世の法孫、性は釋、諱は玄朔」と違りました。乍併、桃隱は是れを不快に思ひまして即日走つて妙心寺の日峰の門に入り遂には日峰門

下の駿足として後には伊勢に大樹寺を開き禪源大澤禪師の徽號さへ賜はりたる名僧となつた方あります。此人には桃隱集といふ詩集が一冊ありまして是れが先づ妙心派下に於ける詩文にては最も觀るべき者の第一位でありまじやう。桃隱の寂年は分りませぬが享徳三年に尾張の瑞泉寺に退隱しましたから先づザツト足利初期の人と見てよからふと思ひます。その雪江宗深に寄するの作に

短衣銀鹿扣吾廬、報言明朝赴上都、爲君欲寄紙三幅、近日清貧紙又無、
といふ作があります。又關山國師百年忌の拈香偈に

活蔭花園一百年、祖翁面目尙儼然、今朝別不薦蘋藻、風送梅香臘雪天、
といふ偈があります。

第二に數ふべき人は妙心四派の中で、聖澤派の開祖たる東陽、英朝であります。東陽は始め嵯峨天龍寺の玉軸英種に就いて得度しましたが、後に雪江に妙心寺に従ひまして其の四神足の一人として學徳共に高き人であります。此の東陽には禪林句集の著述がありまして、禪門の語録は勿論、諸子百家の典籍の中から一句一聯を抜き後學のために多大の便宜ある選述であります。恰も義堂が南北朝の末に祖苑聯芳集を作り、足利の中頃に天隱が錦誘段を編したのと同様の事で、是れは偈頌を作るものゝ便に供したのでありますが、彼れは助道の具として作られたので、要するに同工異曲であります。禪林句集は其の後、幾種も出來ましたが、東陽の此の選述は最も初めの様で、當時の叢林に多大の便益を興

えたものであります。東陽は永正三年の九月に八十八歳で寂しましたから足利の中頃の人と見てよろしい。

第三番目に擧ぐべき人は大休宗休であります。宗休は特芳禪傑の法嗣で少年の時には東福寺の永明菴に在つて參學した方でありましたが、後に特芳に參じてその法を嗣ぎ後年に靈雲院を開き又駿河の今川義元の歸依を受けて駿河に臨濟寺を開いた人であります。晩年には後奈良帝の召に應じて法要を奏對し圓滿本光國師の徽號をさへ賜はつた高德の人で、天文十八年の八月に八十二歳で遷化になりました。此の人には大休録或は靈雲集といふ詩偈が一冊ありまして、之れを當時の五山僧の作に比するに、優ることも劣ることはありません、殊に宗旨は當時の五山僧の上に出で居りますから一段の見所があつたかと存じます。

第四番に擧ぐべき人は太原崇宇であります。太原は今川氏親の子で、初めは建仁寺に入りて僧となりまして雪齋と號し西堂まで上りましたが、後に妙心の大休の道譽高きを聞きましてその下に走り師資の禮を執つた人であります。後には駿河の臨濟寺清見寺等に住じ又善徳寺を開いた方で、臨濟寺に住山の時には千人以上の雲衲が掛錫したと云ふことであります。天文十九年に妙心寺に住し弘治元年十月に寂しました。太原には別に著述としては見當りませぬが支那の歴代帝王の系圖を叙しました所の歴代叙略といふ書物を出版して居ります。十八史略の拔萃見た様なものであります、是れは餘程少ない

書物で一寸面白い物で、確か天文年間に版になつて居ると思ひます。太原の如き高德の人にして禪宗に何等の關係のない箇様の書物の出版は太原が如何に文學趣味の人であつたかといふことを説明して居る様に思はれて私は多大の興味を感じて居るのであります。

第五番目に擧ぐべき人は南化玄興であります。南化は彼の有名な快川國師の上足で、後に稻葉一鐵の歸依を受けまして美濃に花溪寺を開き、天正の初め妙心寺に住した人であります。後陽成院の寵遇を蒙りまして帝の間禪に奏對し、慶長九年五月に寂しましたが、その翌年に後陽成院より定慧圓明國師の號を謚られた人であります。南化には虚白集又は虚白録と稱する遺稿がありまして徳川の末に版本も出来てありますが、私は前年、或る書林で美濃の大仙寺にあつた古寫本を得ました。是れは板本の虚白録よりは内容もすつと多く餘程見るべきものがあります。南化はその徳の高かつたのみならず學識もあり文章も非常に達者であつたらしい。當時織田信長が江州に安土城を築きまして其の記文を當時五山で高名であつた天龍寺の策彦に頼みました。時に策彦は折角築き上つた堂々たる城の記文は迎も自分は及ばぬから幸に妙心寺に南化が居るから此の人に作らしたらよからうと申して遂に南化の手を假りまして出来上つた安土城の記と云ふのが虚白録にも載つて居ります。信長は非常に喜びまして南化に銀五十兩、時服一領を贈り、策彦に銀百兩と同く時服一領とを贈つたとあります。時に或る人が信長に對して作者に五十兩を贈り、作りもせない人に百兩を何故に贈つたかと問ひましたら、信

長は策彦が己れを捨て、能者を推選した雅量に服し敢て禮意を表した譯であると云つたそうでありま
す。策彦は當時の五山では第一位の能文能詩家で、外にも相國寺に惟高妙安といふ人もあり、相應に
作るべき人があつたにも拘らず、五山以外の南化に持つて行つたと云ふ事は、策彦も己れの詩文の連
も南化に及ばぬといふことを自覺して居たからであります。此の事は一場の佳話として傳ふべきのみ
ならず、南化が當時の五山衆より以上の作家であつた事を證明する材料にもなる次第であります。附
けて申し上げますが南化の門下に三江紹益と云ふ人がありまして、是れは洛東高臺寺の開山で、此人に
も語録がありますが私はまだ見ませぬ、けれど相應に偈頌の出來た人であるそうです。三江の弟子に
茂源紹柏と云ふ人があります、是の人には茂源録が四冊ありますが那波活所、松永昌三等とも親近で
あつて對州以酌庵にも行つた人であります。併し此の二人は事實、關山門派の人ではありませんが、建
仁寺に住して五山派に屬すべき人でありますから爰には委しく申し上げませぬ。

次に第六番目に擧ぐべき人は鐵山宗鈍であります。鐵山は甲州の慧林寺に得度し、京に入つて後は南
化に參じ、又天龍寺の策彦にも就いて學問して人であります。後に駿河の臨濟寺に住しまして天正三
年には妙心寺に出世致しました。南化は徳川家康と幼時より昵近でありましたから家康の招きにより
て武州の平林寺にも住しましたが慶長三年には再び妙心寺に住しまして元和三年の十月に八十六歳で
寂せられました、此の鐵山が妙心寺に住山中に徳川家康が上洛二條城に居りました一日、鐵山は蜜柑

十五個を紙に包みまして土産として持參しました事があります、時に家康は鐵山に向つて妙心寺の爲め
に西洞院より西を興へやうと申したら、鐵山は之を斷はりまして、有力の檀越とは簡様のもので御座
らぬと大に家康を諷した事があります。西行の銀の猫とは大分話が大きく御座ります、時の將軍を捉
らへて簡様の豪語をする人ですから餘程定力の備はつた人と思はれます。鐵山には鐵山録二冊があり
まして詩文は南化ほどに練達ではない様に思はれますが随分多作家であつたやうに窺はれます。併し
ながら當時五山の作家と較らべては別に遜色はない様です。兎に角、南化と鐵山とは織田、豊臣、徳
川の初期に於きましては妙心寺に於ける二大明星とも謂ふべき人で、道力、學殖並び高き傑物であつ
たのです。當時の五山には相國寺の西笑、南禪寺の玄圃、東福寺の惟杏等は作者として數ふべし詩文
の人ではありましたが、道力の優れた點と詩文の練れて居つた事は南化や鐵山に一籌を輸せねばなら
ぬ様に思はれます。

第七番目に擧ぐべき人は一絲文守であります。一絲は久我具堯の子で、十九歳にして出家になられま
して、後には大徳寺の澤庵和尚に參じ、最後に妙心寺の愚堂國師に印可を受けて、丹波の法常寺西加
茂の靈源寺等を開き、後水尾院の御寵遇も一方ならぬ實に當時にては非凡の御方でありました。一絲
和尚は或る點から申しますれば無師自悟の人ではありますが、愚堂の印可を受けられた因縁から爰に
妙心派の人の中に數へたのであります。齡三十九歳で江州の永源寺に住山中、正保三年に遷化になり、

延寶五年には定慧圓明佛頂國師の諡號を賜はつた方であります。現に佛頂錄が四冊版本になつてありますが、私は此の語録を見るたびに實にその前後大凡二百年を通じて、是の如き傑出した人はないと思ふて居るのであります。年は僅か三十九歳で没くなられたにも拘らず其の偈頌の有難い事は逆も足利時代の五山にては見る事の出来ないもので、足利の中頃に相國寺に周興彦龍と云ふ詩文に達者な人がありまして現に其の遺稿の半陶稿六冊は存して居りますが、成る程詩文は達者でありますが一絲和尚の如き詩文に品位がありません。此の周興彦龍も歳は僅かに三十四歳で寂した人で私は常に天才家として敬服はして居りますが今申した如く所謂一箇の詩文家に過ぎなかつたのは惜いものであります。かの藤原の惺窩が林羅山に與へた手紙の中にも「彦藏主、異教の徒たりと雖も亦一代の偉人、余の甚だ愛重する所なり」と賞讃して居る位ですから立派な人には相違ありませんが、道力と品位の缺けて居たのは一絲和尚より劣る所であります。

第八番目に擧ぐべき人は山師蠻であります。本朝高僧傳や延寶傳燈錄を讀まれた人は勿論御承知ではありますが實に當代にては精力絶倫の人と云はねばなりません。十八歳にして出家の後は諸方に行脚し、後ち僧傳編輯の壮志を發して史料の收拾に三十餘年を費し遂に延寶六年に至り延寶傳燈錄四十卷を編し臨濟、曹洞の禪僧一千人の傳を收め、又、元録十五年には本朝高僧傳を編纂して一千六百六十二人の傳を載せてあります。兩書共に高僧の没年又は其他の事に關して多少の間違ひもあり、妙心

本派を主として五山派を従とした傾向も見へますが、是れ等は白壁の微瑕であつて全體の苦心辛勞の上から見ては毫も批難の餘地はないのであります。序でながら本朝高僧傳の中にて一二高僧の没年の相違して居る點を申し上げますと、本朝高僧傳卷の二十八、十四紙の初めに出て居りますが「相州淨智寺沙門妙準傳」にその没年を「文和三年二月十八日化、遺偈曰、踏破虚空踏翻大地、別有末後句、今年八十二」とあります。是れは大變なる間違ひで太平妙準は佛國國師の法嗣で、天龍寺の夢窓國師とは兄弟子であり、それに妙準が遷化の後遺骨を收めた骨壺に、夢窓が太平の略傳を綴りて綴めてありました。前年鎌倉の圓覺寺でフト荒無地を開いた時にその骨壺が現はれまして現に圓覺寺にあります。私は實物を實見致しませぬが、内務省の荻野仲三郎君が古社寺保存會委員として圓覺寺に出張の節、その骨壺を見て銘を拓して歸られたのを見ました。其れに據りますと。

師諱妙準、自號太平、下野州人、性平、傳法於本州雲岩高峰和尚並親交、又無準和尚信衣之の子也、
嘉曆丁卯閏九月二十四日卯刻示寂、世壽五十二、僧臘三十、辭世頌曰、末後一句向下文長、處々無蹤跡地獄與天堂。

丁卯仲冬屬末夢窓疎石謹書

とあります。嘉曆丁卯は二年に當りまして高僧傳の文和三年より二十八年以前であります。遺偈も亦相違して居ります。今一つは南禪寺景南英文の傳に年齢の相違あることです。景南の傳は本朝高僧傳

卷の四十一、六紙目に載つて居りますがそれに依りますと景南は享徳三年九月二十二日に八十三歳で寂した様に書いてありますが、現に南禪寺に存して居ります寶徳三年に雪岫朔といふ僧の歸るを送る序の中に「享徳改元九月日景南叟英文暮齡八十八書焉」と記して印までも押してあります、是れによりますと年齢は明らかに相違して居ります。箇様の類はまだ少々ありますが、是れは當時の如く交通の不便なる時代ですし又幾千人の傳記の中には右様の誤謬の出来るのは當然とは申しませぬが勢ひ免れないことでもあります。要するに徳川時代に於ける山師蠻の功績は彼の南北朝頃に於ける東福寺の虎關と相並ぶべき人で、その功績は虎關に優るとも劣るべき方ではありませぬ。若し不幸にして當時師蠻が此の編輯をせなかつたならば過去、現在の學界は勿論、將來も尠なからぬ不便を感ずることでありまじやう。當に不便なるのみならず高僧の事蹟は湮滅して今日にても討ぬるに由なきものが多くあるに相違ありませぬ。

第九番目に擧ぐべき人は無着道忠であります。無着は承應二年の七月に但馬に生れ、延享元年に九十二歳で寂した方で、妙心寺の龍華院に居られました但其の一代の著書、選述は實に百八十種、六百六十一卷の多きに達して居ります。此の人は所謂考證家でありまして其の著述には注釋もの、考證もの、雜纂もの、清規もの、史傳、語錄、詩文等が大部分を占めて居りますが就中、考證は甚だ該博で實に精密殆ど疑ふべきなきまでに引據してあります。就中、禪林象器箋は實に叢林の重寶で是れに越す

べきものはありませぬ。その他、國語音説、梵語分韻、支那俗語、字書辨話、日本俗諺等の如き著述まであつた様ですから識見家としては兎に角、考證家としては日本禪僧の中では絶後とは申しませぬが、空前と云つて差支へない様です。足利時代に相國寺に瑞溪周鳳と云ふ人がありまして學徳共に高くして將軍家の歸依も深かつた人ですが、此の瑞溪には臥雲夢語集といふ考證に類した物もあり、臥雲日件録といふ日件記もあり、刻楮集と申して當時支那から新渡の書を讀で有益な箇所を抜録したものが二百卷もあり、他に詩集、四六文等もありて、五山ではまづ述作の多い人ではあります。無着に比しては逆も較らべ物にはなりませぬ。乍併、足利時代の五山にて無着に比すべき人を求むれば先づ瑞溪和尚位でありまじやう。

第十番目に擧ぐべき人は仙臺の瑞鳳寺に居られた南山古梁であります。南山は寶曆三年に相州に生れ、後に江戸の東禪寺に投じて出家となり、遂には東禪寺を初め仙臺の瑞鳳寺、覺範寺、瑞鳳寺等にも住し、一度は妙心寺にも瑞世せられた人であります。天保十年に八十七歳で寂せられたが委しきことは大内青巒先生の撰せられました道行碑にあります。南山は詩文には餘程達者な人で、先づ足利の末から徳川時代を通じて此れ位の作家はないだらうと思ひます。曾て齋藤竹堂が當時南山を評して天下の縑流文學に長するもの、西に玉澗あり東に古梁ありと云ひ、又筆蹟に妙であつて當時、卷菱湖は天下第一の能書と謂つたそうです。徳川時代の五山で詩文に高名な人と云へば何人も第一に相國寺

の大典次いで天龍寺の桂洲などを挙げますが、成る程大典には著述は相應にあります、併し其の詩文に至りては分量の上に於ては南山は大典に逆も及びませぬが其の作品に雄大の氣象が見えて而も字句の洗練せられて居るのは大典の遠く及ぶ所ではありませぬ。余の見た所では妙心寺の僧で足利時代より徳川時代を通じて相應に作者のあつた中で、南山を第一人とするのであります。

以上に於いて十人を挙げました、是等は悉く妙心寺派に屬する人であります。徳川時代の妙心寺派には以上十人の外に白隠、東嶺、仙崖の如き文學上より觀ても相應の位置の人はありますが是は著明ですから爰には挙げませぬ。

禪文學より觀たる花園と云ふ題を掲げたに拘らず禪僧の傳記を叙述した様ですが、是れは五山の文學と云ふものに對して、花園文學とでも申すべき事柄を御話申したいのと、今一つは以上挙げました人々は南化、鐵山、一絲を除いてはあまれ世に著明でありませぬから特に委しく申しましたのであります。要するに花園文學とでも云ふべき一つの範疇が作られるものならば、以上の方々は即ちその文學の經となり緯となるべき人々で輕々に看過すべからざるものであります。

私は常に簡様の事を云つて居ります、夫れは人間と云ふ者が盛んなる運命に助けられて仕上げた事柄でも人爲上の事は大抵は三百年前後を限りとして新陳交代して居る様に思はれると申して居るのであります。近き例をとりますと鎌倉の初め大權が武門に移りましてから大凡百五十年にして足利氏が

霸權を掌握しました。然るに足利氏は大凡二百六十年前後にして、間もなく徳川氏が、武門の大權を取つて代りました。而もその徳川氏が又二百七十年前後で大政を奉還したのであります。禪宗は如何でありましたやう、鎌倉時代から南北朝の初めにかけては宋元もたりから續々と輸入せられまして二十四流或は四十六流とまで云ふべきほど澤山ありましたが、南北朝に至りましては大應大燈の一派と佛光、夢窓の一派とが角立しまして、而も佛光夢窓の一派は南北朝より、足利時代を通じて優勝の位置に立ちまして五山と稱し官寺と號して大應、大燈の一派に對しては傍若無人の有様でありました。此の間が大凡三百年であります。然るに徳川時代に入りまして大應、大燈の一派から白隠が崛起して爾來佛光、夢窓の一派は影も形なく全く日本の臨濟禪の惣統領となり、佛光、夢窓は今や忘れられたる有様であります。併し乍ら白隠が法幢を翻してから既に二百年に近くなつて居ります。私は此の白隠の公案禪なるものが近き將來には何等かの形式に變するか、或は一大偉人が輩出して白隠に代るべき禪風を擧揚せぬとも限りませぬと思ひます。私は室内の事については門外漢ではありますがドーモ左様に考へられるのであります。

次に禪文學の事は如何でありましたやう、足利氏の初めから有名であつた、所謂五山の文學は是れも大凡二百七八十年に終つて居ります。併し徳川期に入りましてからも五山には矢張り碩學といふものがありまして幕府からは保護を加へて居りましたが丸で蟬の脱けがら見た様なもので、全く様に依つて

胡蘆を畫くでも申すべきか活氣も何もありませなかつた。儒者が跋扈したのも無理はありませぬ。然るに徳川期の妙心寺は如何でありませう、上に擧げました如く、南化出で、鐵山出で、一絲出で、師蠻出で、無着出で、南山出で、乃至白隠出で、東嶺出で、實に百花爛漫の態であります。私は爰に於て所謂天運循環の理を信せねばなりません。宿命宗の信者になるのであります。今假りに此の所謂三百年説が眞理ありとすれば殘す所の百年前後に於て第二の白隠は出現せねばならぬのであります。此の第二の白隠は今日潜みつゝある佛光、夢窓の一派から出ましやうか、又は應燈二祖の末流から出現しやうか、此の疑問の解決は一に諸君の判断に任せて置きます。而して徳川期に於て事實上の禪文學を形ち作つた應燈一派の花園は將來も猶ほ其の箕裘を續くべき人物が輩出するでありませうが、私の見る所では足利時代から徳川期に於いては花園は一種の修道院式の色彩を帯びて、其の中から禪文俱に兼ねた人が出現した様に思はれます。随つてその輩出した人々にはドツシリと何だか重味があつた様に想像せられます。現今の花園は如何でありませう、私の見る所では最近世的の着色を帯びた文藝院とでも云へば云ひ得らる傾きが見へますが、此れと共に昔の崇高なる修道院の色彩は漸々に失せはしますまいか、と思はれます。それは假りに宣布いとして果して此の最近世的の着色を帯びた花園から將來第二の南化や鐵山や師蠻や無着は輩出するでありませうか、此れは將來の宿題として花園一派の諸師に對して疑問として提供して置かうと存じます。(花園學院にて講演の大意)

天龍寺の昌緒と淨慈の道聯

禪宗の我國に傳はつて以來、彼我僧侶の來往は從來よりも一層盛んになつて來たが、殊に曆應四年(西紀千三百四十一年)に天龍寺船の法を定めてから殆んど年々彼來り我れ行く云ふ有様でザツト二百年間ほど往來の絶えたことがない。而して其の船を幸領して行く人は主として禪僧であるから、張楫が「四千客路皆由海、數十陪臣半是僧」と云ふたのも無理はない。三才圖繪であつたか確かに覺えぬが「日本人」と記して圓頂緋衣の人が書いてある。支那人の目には多分日本人は皆頭を剃つて長い袖の物を着て居るものと思ふたかも知れぬ。是れで考ても如何に日本の禪僧が多く渡航したかを想像することが出来る。勿論名は進貢船であるが實は貿易船であるから萬里が帳中香の中にも

近來跨三南船者、太半爲利、而不爲法、緇林憔悴、哀哉、

と歎息してある。時は應永の十年將軍義持は、前年に來朝した天倫と一如の二支那僧を送るために祥菴梵雲(普明國師の法子)龍溪等聞(絶海の法子)それに昌緒(普明の法子)と云ふ三人を渡航せしめた。時に等聞は其の師絶海の語録を携へて道衍に逢ふて序文を乞ひ、如蘭が跋を記して居るが、昌緒は又淨慈寺に行き道聯に謁して送別の辭を請ふて居る。其の文を讀で見ると随分痛いことを云はれて居る。昌緒は當時俗服を着けて居たものらしい。文中に

予、繕の貌を観るに僧にして俗を服す。其の動靜を察するに又僧に似たり。筆、其の言を通ずるに

普明國師の門人、又禪者なり(原漢文)

とある。冷汗背を沾すを覺ゆる様である。又次に

獨り俗服を以て使命を通じ兩國の歡を成すべからず。況や其の國俗、一たび歸戒を受ければ即ち剃髮して沙彌と稱す。繕、大僧たりと雖も而も退いて沙彌の列に就く、亦其の謙徳自ら持するに足る。

其他は予知らざるなり(原漢文)

と記してあるが、褒めたのか貶したのか何だか尻コンバイ様な云ひ方で、是れなれば頼まねばよかつたど、品繕は思ふたかも知れぬ。當時の日本から見れば支那の佛法は盛であつただけ、其の人も少からず、云ふこと書くことに、中々に重味がある。此の昌繕が日本を出發する時に、同參の人々から送別の詩を貰つて居るが、是れは現今刊行せられて居る鄰交徵書なり、古事類苑の外交部、又は外交志稿等には見當らぬ。

送繕上人之中華

松浦 玄興

禪子分携海上秋、秋風理棹事南遊、飯心一倍扶桑夢、湘水灯寒夜雨舟、

依韻

金山 心融

故人辭我海城秋、去向中華爲遠遊、離思茫茫難說得、鯨波萬里送行舟、

石城 祥鸞

奉使乘槎八月秋、此行必可漢江遊、功名一遂歸官寺、錦纜牙樁飛瀟舟、

紫陽 長卿

幽討越山湘水秋、長歌幾地恣情遊、攬蘭聊寄相思意、天末風來送畫舟、

西都 祥雄

明朝不帶魯春秋、定有麒麟閣上遊、伏拜天顏飯去日、五湖煙水一扁舟、

名城 玄升

別後參差兩地秋、楚雲湘水幾優遊、春來在在杜鵑哭、想棹飯心東海舟、

靈泉 玄秀

離別扶桑葉落秋、中華風月取遨遊、自今他夜相思夢、定在東吳萬里舟、

松下 亮逸

長風萬里海天秋、羨子今爲汗漫遊、深期須在起家業、莫効山陰雪後舟、

關西 子猷

疎髻重驚白髮秋、東遊客子又西遊、遊從今合想杜陵趣、天入滄浪一釣舟、

靈泉 祥壽

海國西風双髮秋、青松長記別時遊、從今可レ想鷗邊夢、夜雨湘江煙水舟、

西都玄碩

故人分レ手海門秋、去作二江南萬里遊一、鳥道望遙橫二眼棧一、鯨波縱遠泛二口舟一、

宮陽祥選

今日風雲際會秋、明朝水竹白沙遊、寒盟難レ熟冷泉夢、飛落江南月夜舟、

染河慶顏

離心一日似二三秋一、況復吳天楚地遊、江畔千條楊柳樹、如何不レ繫木蘭舟、

關左長芳

月上珊瑚碧海秋、蓬萊方丈幾神遊、清風滿腹飯風日、萬斛驪珠下瀨舟、

興化等顯

豈料今辭二海國秋一、觀光轉作二大唐遊一、蓬窓同結滬邊夢、一寸離心萬斛舟、

文明年間の金閣

洛北鹿苑寺の金閣は、足利三代義滿當時の建造物として、室町時代の誇りとすべき物であるが其の庭園の風致には多少の變遷を生じたことは勿論である。況や應仁の亂を経て居るにも拘らず金閣

だけが現存して居るのは不思議な位である。蔭涼軒日録、文明十七年十月十五日の條に、將軍義尙が金閣に登つた時の様子が記してある。抄出して現時庭園の模様と比較するのも一興である。

相公曰、池水減少如何、答曰（蔭涼軒主）今年天旱、爲二用水一、今度御成之前入レ水之由白レ之、御一笑、曰水之入方何方、愚、指二北方一白レ之、彼瀧頭有レ池、相公被レ諾、

大旱のために池水を用いた位であるから、當時は多少庭園も荒廢して居たか分らぬ。又

愚（蔭涼軒主）白、前年亂中、楓樹太平斫レ之由白、相公曰、此亭簷亦燒レ之、愚、應二自言一、御一笑、太半の楓樹も應仁亂の當時に斫り荒らされ、庭中の亭も焼いたらしい。其金閣に登臨の模様には

金閣可有二御登一否奉レ問レ之、可有二御登覽一云々（上略）遂登二閣上一（中略）相公、對二觀音一御立、愚曰、此觀音像、亂後安レ之、本之觀音者亂中失却、此觀音小二於本之觀音一也、

（中略）相公曰、池之南邊、曾有二一園之大樹一、今無レ之、亂中斫レ之歟、愚答曰、亂中斫レ之、又泉水之中島會有二楓樹一、亂中斫レ之歟、兩島皆有二楓樹一、皆無レ之、愚曰、亂中斫レ之云々、

是れで見ると潮音閣の觀音像も、應仁の亂に失せ、池南の大樹も中島の楓樹も亂中に斫り仆されてしまつたことが明かである。而も金閣だけが無難に残つたのは龍天の加護に外ならぬ。後の住持たるもの、よく之を寶護して當代の遺物を千萬古に傳へたいものじや。

銀閣寺東求堂の書籍

將軍足利義政が、洛東月待山の麓に銀閣を造營して一代の數寄を凝らしたことは有名であるが、同時に東求堂を建て、四疊半の茶室をしつらへたことも室町文藝史上に隠れなきことである。して其の東求堂の裝飾に就ては餘程趣向した物と見えて、書院の二重小棚に置くべき書物はどんな物がよいかと蔭涼軒主に問ふたことがある。日録文明十八年四月二十八日の條に

齊罷謁東府、東求堂御書院被置二重小棚、宜見置之書、可擇之之命有之、乃於御對面所西六間、擇書、東坡文集廿冊、方輿勝覽十五冊、韻會十冊、李白詩七冊、大廣益會玉篇五冊、以上五部奉置之

とある。是を見ても當時の讀書界の傾向が一寸窺はれるのが面白い。

東福寺の通天橋

通天橋の起原は聖一國師が東福境致の宋朝の徑山に似たるを以てそれに擬して三佛閣を構へ、又、凌霄山を開き南北の溪に橋を通じて通天と命名せられたのが始めて。其の後、同寺の四十三代に當る性

海靈見(足利義滿の歸依を受けたる人)が更めて之を修造して長廊を架せられたのである。時に相國寺の普明國師が偈頌を作つて其の落成を慶讃せられ、又、時の耆宿方が和韻して通天橋賀頌と題し、版に鏤めて三佛閣の上に掛けられて今に存して居る。其の賀頌は二十一首で當時歴々の作者ばかりである。

通天橋、是開山惠日聖尊直道也、諸人若從這裏得入、則龍子龍孫跳天門有日矣、蓋主翁成之、意在于茲耳、前南禪比丘妙範謹題

揮却風斤支落霞、虹蜺千尺截奔波、通霄一路脚痕下、來往人從鳥道過、

庚曆庚申八月初吉書于龜山雲居芥室軒下

謹和高韻奉慶常樂新作亭橋

新作亭橋高且大、任他溪瀾起風波、路穿蟬螻腰間去、人履虛空背上過、

萬丈彩虹橫玉欄、千年新物臥蒼波、滿身風露青冥外、踏斷天關掉臂過、

半千衲子躡烟霞、步步由來不犯波、三道寶階非別路、地居宮殿盡穿過、

虹影遠橫天未霞、不問略約臥溪波、脚頭脚尾通霄路、這畔人從那畔過、

○ 堪笑步虛仙飲霞、龍淵龍子渡鯨波、天台五百諸尊者、借路凌霄峯頂過、

士 東

○ 起山師振

○ 界破碧雲兼赤霞、大梁高架拍空波、脚頭踏斷四天下、步步元從這裡過、

大方源用

○ 行破斜橫校嶺霞、虹飢偃飲水天波、淵流度盡歸常樂、超得非非想定過、

大中禮制

○ 雌蜺橫空飲彩霞、巨鯨截海跨洪波、一條活路須彌頂、日月還從脚下過、

菊莊有恒

○ 長虹貫日徹雲霞、截斷銀河萬丈波、天上人間無別路、聖凡高自這裡過、

直心是一

○ 彩虹一抹出紅霞、高似龍淵高仍波、要向凌霄峰頂座、先須從者裏難過、

南堂處薰

○ 天然架漢似丹霞、步步登虛平地波、一顆明珠在驢脚、行人容易莫差過、

無塵至清

○ 高聳雲端凌曉霞、斜橫溪上俯澄波、忽然架記通天路、切利夜摩親歷過、

竺芳超曇

○ 石梁斜映赤城霞、台嶺迢迢隔海波、今日凌霄開一路、人天交接截流過、

東輝祖旭

○ 萬丈晴虹截斷霞、千尋玉澗激揚波、喚他下界衆生起、俱自通天一路過、

長安演大

○ 國師題品句千霞、諸老繼聲揚梵波、從是通天祖道大、幾孫可打桂枝過、

天祐利聞

○ 臥雲影映十靈過、偃月光涵萬斛波、中有通天廣大路、往還人自普門過、

萬峰祖燈

○ 夾截赤城映日霞、穿開銀漢浸星波、自從透出兩頭路、三十三天拂袖過、

則川光三

○ 度生未了那伽定、永作津梁歷劫波、獨步丹霄一條活路、直從這裏截流過、

振岩芝玉

○ 那伽定久千松塔、恰似鷄峰迦葉波、橋號通天良有以、時時梵釋共來過、

宗匠度生慈願大、津梁架起跨洪波、青霄雲外開行路、下界人從上界過、
 偈頌は是れだけであるが、昔人が其の風致を添ゆるに苦心せられしことは子孫たるもの恩徳に感謝せねばなるまい。降て文化五年時の住山龍河玄禎が通天の十景を選むで一條公に請ふて當時の月卿十員に和歌を裁せしめたことがある。歌は堂上風の生氣なく餘韻なく雅趣もなきものぢやから茲には省いて記さない。

禪宗の高僧と其の臨終

禪門では臨終の時に、辭世の偈を遺すと云ふことが、一の典例になつて居るが、今其の起原を原ぬるに、宋の太宗、淳化三年十二月四日、首山念禪師が示寂の日に
 白銀世界金色身、情與無情共一身、明暗盡時都不照、日輪午後示全身、
 と云ふ偈を作つて衆に示し、泊然として化を他界に遷されたのが、その始めらしい。
 鳥の死などする其の聲や悲しく、人の死せんとする其言や善し。大聖釋尊の遺教經の如き、一言一句慈母の子に教ゆるが如く、讀む者をして三千年後、面あたり慈誨に接するの感を起さぬものはなからふ。由來禪僧は殺活縱橫、與奪自在の遊戯王三昧に住して常に生死の境を超脱して居るのであるか

ら、其の遺偈の如き又大に斯道學人の照心に資すべきものが多からうと思ふ。今茲には少々日本名僧の遺偈を録して見やう。

- (一) 南禪寺の開山大明國師、無關名は普門、東福寺聖一國師の法嗣で正應四年十二月十二日に寂せられた、其の辭世の偈に云く
 生不離此、去無所去、畢竟如何、不離當所、
- (二) 南禪寺の第十九世蒙山智明は京師の人、規菴祖圓の法嗣で、貞治五年八月二十一日に寂せられた。辭世に云く
 住忘想境、滿五十年、虛空崩裂、倒上梵天、
- (三) 建仁寺三十五世龍山德見は、下總の人、寂菴照の法嗣、勅諡眞源大照禪師と號す。延文三年十一月十三日壽七十五にて示寂。遺偈に云く
 東涌西沒、南往北來、末後一句、掘地深埋、
- (四) 南禪寺二十六世放牛光林は筑前の人、關提の法嗣、應安六年八月九日寂。遺偈に云く
 一來一去、今生今死、虎吃大虫、蛇吞鱉鼻、
- (五) 清溪通徹は南禪寺の三十七世、夢窓國師の法嗣なり。辭世の偈に云く
 萬象盡虛空、空那有形容、虛空則萬象、萬象則虛空

(六) 不遷法序、勅諭佛照慈明禪師と號す、南禪の四十二世、南禪の塔院を下生と云ふ。天龍にあるを三秀院と云ふ。永徳三年十二月四日子の刻壽七十一歳にて示寂、遺偈に云く
生也恁麼、死也恁麼、不生不死、恁麼々々、

(七) 伯英徳俊は武州の人、了堂安の法嗣、南禪寺の五十三世なり、應永十年八月十二日寂、遺偈に云く
生死涅槃、全不相干、須彌躡跳、虚空展顔、

(八) 哲岩祖澗は播州の人、龍雲谷の法嗣、南禪寺の五十四世なり。其の辭世の偈に云く
倒臥横眠、七十六年、失脚踏破、刹界三千、

(九) 絶海中津は土佐の人、夢窓國師の法嗣、勅諭佛智廣照國師と號す、應永十二年四月五日壽七十歳にて寂。遺偈に云く、
虚空落地、火星亂飛、倒打筋斗、抹過鐵圍、

(十) 一菴一鱗は京の人、龍山徳見の法嗣なり。應永十四年十二月二日壽八十一にて寂。遺偈に云く
有有有有有、無無無無無、破裂鐵絲網、擊碎驪龍珠、

(十一) 大中善益は防州の人、大林の法嗣、南禪の六十世なり、年七十四にて寂、遺偈に云く
一機暫轉、閃電猶遲、掀翻大海、踢倒須彌、

(十二) 月庭周朗は相州の人、夢窓國師の法嗣、南禪の六十五世なり。應永十年五月二日寂、西山の明白菴に塔す。遺偈に云く
八十二年、幻生幻滅、纒轉一機、虚空迸裂、

(十三) 空谷明應は近江の人、無極志玄の法嗣なり。明德三年、足利義滿、相國寺慶讚の時、師其の導師たり、特に佛日常光國師の號を賜ふ。應永十四年正月十六日寂、眞淨院に塔す、遺偈に云く
倒騎木馬、踏破虚空、欲覓踪跡、結網繫風、

(十四) 萬宗中淵は丹波の人、春屋妙葩の法嗣、相國寺の八世なり。應永五年八月四日、年七十五にて寂、遺偈に云く
臨行一著示吾徒、千眼觀音見得無、穢土淨邦留不住、古今誰是赤須胡、

(十五) 觀中中諦は阿波の人、夢窓の法嗣相國寺の第九世なり。應永七年三月八日、壽六十五にて示寂、乾徳院に塔す、遺偈に云く
平吞佛祖、幹旋乾坤、末後一句、怒雷驚奔、喝

(十六) 圓鑑梵相は甲斐の人、春屋妙葩の嗣なり、相國寺の十六世、應永十七年二月二十日、壽六十五にて示寂、西山の法苑寺に塔す。遺偈に云く
內秘菩薩慈、通身鐵牛機、要知眞歸處、一鐸聲盡碧天涯、

(十七) 建長寺開山蘭溪道隆は西蜀の人、無明惠性の法嗣なり。寛元四年來朝、弘安元年七月二十四日寂、敕諡大覺禪師と號す。遺偈に云く

(用翳晴術、六十六年、一錠擊碎、大道坦然、

(十八) 葦航道然は信州の人、蘭溪の法嗣なり、大興禪師と號す。建長寺の六世、正安三年十月六日寂、遺偈に云く

空花亂墜、八十二年、即今依舊、葦航道然、

(十九) 鏡堂覺圓は西蜀の人、法を環溪に嗣く、勅諡大圓禪師と號す。建長寺の七世、徳治元年九月二十六日壽六十三にして寂す、遺偈に云く

甲子六十年、無法爲人説、任運自去來、天上只一月、

(二十) 一山國師諱は一寧、台州の人、頑極の法嗣、弘濟大師と號す。正安二年來朝、元保元年十月二十五日寂、遺偈に云く

橫行一世、佛祖吞氣、箭既離弦、虛空落地、

(二十一) 西洲子曇は台州の人、法を石帆に嗣く、正安二年來朝、建長寺の十一世なり。徳治元年十月二十八日壽六十五にて寂、遺偈に云く

來無所去、去無所至、白日麗天、清風匝地、

(二十二) 無隱圓範は紀州の人なり、蘭溪の法嗣、建長寺の十二世、徳治二年十一月十三日壽七十にて寂す。遺偈に云く

來去無方所、去來更沒踪、要知吾住所、明月與清風、

(二十三) 南浦紹明は駿州の人なり、法を虛堂に嗣く、建長寺の十三世、勅諡圓通大應國師と號す。延慶二年十二月二十九日壽七十三にて寂す。遺偈に云へ

呵風罵雨、佛祖不知、一機瞥轉、閃電猶遲、

(二十四) 高峰顯日は洛陽の人なり、法を佛光國師に嗣ぐ建長寺の十四世、勅諡佛國禪師應供廣濟國師と號す、正和年十月二十日、壽七十六にて遷化す。遺偈に云く

座脫立亡、平地骨堆、虛空翻筋斗、刹那動風雷、

(二十五) 約翁德儉は相模の人なり、蘭溪の嗣、建長寺の十五世、勅諡佛燈國師と號す。元應二年五月十九日壽七十六にて寂、遺偈に云く

七十六年、不生不死、雲散長空、月行萬里、

(二十六) 靈山道隱は杭州の人なり、雲岩の嗣、元應三年來朝、建長寺十九世、正中二年三月二日、壽七十一にて寂、勅諡佛惠禪師と號す。遺偈に云く

還源歌々々々、還源一吹脫、娑婆哩々囉、

(二十七) 玉山德璇は信州の人、蘭溪の法嗣なり、建長寺の二十世、建武元年十月八日壽八十にて寂す。遺偈に云く

三劫塵數諸如來、無所從來亦無去、僧當歸、桂輪正午、

(二十八) 清拙正澄は愚極の法嗣なり、嘉暦元年來朝、建長寺の二十二世、勅諭大鑑禪師と號す、曆應二年正月十七日壽六十六にて寂す、遺偈に云く

毘嵐捲空海水立、三十三天星斗濕、地神怒着鉄牛鞭、石火電光追難及、

(二十九) 明極楚俊は明州の人なり、法を虎岩に嗣く、元徳二年來朝、建長寺二十三世、勅諭佛日焰惠禪師と號す、建武三年九月二十七日壽七十にて寂す。遺偈に云く

臨行一着、不假兩脚、踢倒須彌、踏翻碧落、

(三十) 佛頂禪師諱は惠宗、佛光の法嗣なり。下野の人、建長寺二十六世、貞和二年十月晦日壽八十二にて寂す、遺偈に云く

入門逆旅、來往如織、久客即今歸去來、清風明月與無極、

(三十一) 樞翁妙環は下野の人、佛國の嗣なり、勅諭佛壽禪師と號す、建長寺の三十世、文和三年二月十八日寂、遺偈に云く

踏破太虛、踢翻大地、別有末後句、今年八十二

(三十二) 象外禪鑑は肥州の人、桃溪の法嗣なり、勅諭妙覺禪師と號す。建長寺三十一世、文和四年十一月十八日寂、壽七十七、遺偈あり云く

上無攀仰、下絕已躬、若又有生可度、不妨隨處露蹤、

(三十三) 實翁聰秀は葦航の法嗣なり、建長寺の三十六世、某年二月二十七日寂す遺偈に云く
末後一句、佛祖不知、掀翻四大海、踢倒五須彌

(三十四) 古先印原は薩州の人、中峯の法嗣、應安七年正月二十四日寂、壽八十、勅諭正宗廣智禪師と號す。自贊の偈に云く

即心即佛、非心非佛、釋迦彌勒是何物、信手拈起須彌槌、等閑敲出虛空骨、是麼咄々、

(三十五) 青山慈永は夢窓の法嗣なり、建仁寺大統院の開基、勅諭佛觀禪師と號す。辭世の偈に云く
無榮無枯、鉄樹開花、萬象吐舌、虛空咬牙、咄

(三十六) 可翁妙悅は佛國の法嗣なり、建長寺五十二世、某年二月廿二日寂、遺偈に云く
天真自性、無死無生、碧落雲散、長空月明、

(三十七) 鈍夫全快は靈岩の法嗣なり、建長寺五十三世、至徳元年八月十四日寂、壽六十六、遺偈あり云く

末後一句、應用無虧、手把明月、倒上須彌、

(三十八) 中山法類は相州の人、佛國の法嗣なり、建長寺の五十六世、康應元年十一月七日寂、辭世の自贊に云く、

鬼面神頭、全身半身、氣奪分毒、更得後手不盡人、惠竺乃問云、稱天下大善知識、本命元辰下落處在、師勵聲云、森羅萬象家風、非是備境界、

(三十九) 無學祖元は無準の法嗣なり、勅諭圓滿常照國師と號す、弘安二年來朝、同九年九月三日寂、壽六十一。辭世の頌に云く

來也不前、去也不後、百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼、
(四十) 大喜法忻は太平の法子、勅諭佛滿禪師と號す、辭偈に云く、
諸佛降跡處、續燈大光明、岩上開一室、一座五百生、

(四十一) 夢窓疎石は佛國の法子なり、觀應二年九月三十日示寂、壽七十七、遺偈に云く、
轉身一路、橫該堅抹、畢竟如何、彭八刺札、

(四十二) 少室慶芳は空室の法嗣、圓覺寺正眼菴の開基なり、辭世に云く、
生也快活、死也快活、更問如何、快活々々、

(四十三) 大川道通は佛源の法子なり、圓覺寺臥龍菴の開基、辭世の頌あり
末後一句、始到牢關、不通凡聖、潭北湘南、

(四十四) 大休正念は温州の人なり、石溪の法子、勅諭佛源禪師と號す。文永六年十月九日來朝、正長二年十一月三十日寂。辭世に云く、

拈起須彌鏡、打破虛空鼓、藏身無蹤跡、日輪正當午、
(四十五) 東峰通川は佛源の法嗣、圓覺寺利濟菴の開基、遺偈に云く、
大用現前、不存軌則、此是甚麼軌則、上天堂入地獄、

(四十六) 此山妙在は信州の人、佛國の法子、建仁寺如是院の開基、辭世に云く、
賣弄一生過、彌天犯罪多、今朝機轉位、無佛亦無魔、

(四十七) 天外志高は南洲の法子、勅諭眞覺禪師と號す。圓覺寺瑞光菴の開基、辭世に云く、
示不生、現不滅々、天上人間、清風明月、

(四十八) 天澤宏潤は雲屋の法嗣なり、圓覺の大義菴開基、辭世の頌に云く、
天澤無私、草木悉知、別轉一路、佛眼不窺、

(四十九) 雲屋慧林は佛光の法嗣なり、勅諭佛地禪師と號す、圓覺寺長壽院の開基。辭世に云く、
動靜本無像、去來又無蹤、風叫萬岳、月照千峰、

(五十) 嵩山居中は西澗子曇の法嗣なり、建仁寺の二十五世、廣燈菴の開基、貞和元年二月六日寂、
壽六十二、遺偈に云く、

生死涅槃、春行冬令、將錯就錯、中和提景、

(五十一) 南山士雲は聖一の法嗣なり、東福寺の十二世莊嚴藏院の開基なり、建武二年十月七日入滅、遺偈に云く

了達三世、撥轉一機、祖也不會、佛也不知、

(五十二) 桃溪德悟は蘭溪の法嗣なり、圓覺寺の四世、辭世の偈に云く

芭蕉虛幻體、片々摠成真、募地振歸去、露出法王身、

(五十三) 東明惠日は直翁の法嗣なり、圓覺寺白雲菴の開基、明州定海縣の人なり。延慶二年來朝、曆應三年十月三日寂、遺頌に云く

六十九年、有生有死、古渡雲收、青天在水、

(五十四) 不聞契聞は東明の法嗣なり、圓覺寺二十三世、等慈菴の開基なり。應安元年七月十二日寂、遺頌に云く

也太奇兮也太奇、末後一句沒人知、大洋海底遭火熱、虛空產下木羊兒、

(五十五) 大用慧堪は佛光の法嗣なり、相州壽福寺世代、正隆菴の開基なり。遺頌あり云く

諸佛凡夫、不生不滅、今日天風、庭柏吹拆、

(五十六) 南洲宏海は兀菴の法嗣、相州淨智寺の準開山なり、勅諭眞應禪師と號す。遺偈に云く

大唐日本、六十餘年、欲知此事、看取目前、

(五十七) 太平妙準は佛國の法嗣なり、勅諭佛應禪師と號す、正源菴の開基、遺頌に云く

末後一句、向下文長、處々無蹤跡、地獄與天堂

(五十八) 無象靜照は石溪の法嗣なり、勅諭法海禪師と號す、相州淨智寺の世代、遺頌に云く

諸佛來也如是、去也如是、諸佛來去一般、我今說也如是、

(五十九) 天菴妙受は佛國の法嗣、相州淨智寺の世代なり、勅諭佛性禪師と號す、遺頌に云く

幻生幻滅、寂滅現前、千江有水千江月、萬里無雲萬里天、

(六十) 別傳妙胤は虛谷の法嗣なり、相州淨智寺大圓菴の開基、辭世に云く

來者是阿誰、紅霞穿碧落、白日透須彌、

(六十一) 大同妙哲は佛國の法子なり、淨智寺正印菴の開基、辭世の頌に云く

末後一句、透過牢關、金錘影動、寶劍光寒、

(六十二) 雲山智越は無隱の法子なり、相州淨智寺禪昌菴の開基、辭頌に云く

問佛々不會、問祖々不會、百不會百不知、是誰死是誰生、

以上はたい半夜涉獵の勞に過ぎぬのであるが、綿密に傳記類を穿鑿したなれば幾百千の偈頌を見出すことは易々たることである。茶人俳人詩人歌人等の辭世なぞいうことも、其の起源は禪僧の頌に効ふ

たものではあるまいか。

碧山日録の著者に就きて

南北朝の末から室町時代を通じて、五山禪僧の筆録した日記は數種ありますが、今日一般史家の間に最も知られてゐるのは南禪寺義堂周信の空華日工集と相國寺瑞溪周鳳の臥雲日件録、それから蔭涼軒日録であります。此外に東福寺季弘大叔の蔗軒日録と碧山日録の二つがありますが、是れ等はあまり知られて居りません、伴信友の「史籍年表」にも前の三書は擧げてありますが後の二書は記して居りません。空華日工集は原は空華日用工夫集と名けて四十八冊ありましたが永正の頃、相國寺の惟高妙安が抄録しまして日工略集と名づけ二冊だけ現存して居ります、是れは正中二年に初まつて嘉慶二年四月に終つてゐます。次に臥雲日件録は是れも原本は七十四冊ありましたが同く惟高妙安が拔萃しまして二冊より現存して居りませぬ、此は文安三年四月に始まつて文明五年の五月に終つてゐます。蔭涼軒日録は室町幕府の日録とも見るべきもので永享七年から起つて明應二年九月に終つて居ります、是れは相國寺の季瓊眞業、益之集箴、龜泉集證等の筆録したもので主として將軍家に關する事柄が多いのです。彼の永享日録とか、季瓊日録とか龜泉日録とか申すのはこの蔭涼軒日録の或る部分を申したので、此れ等の日録を綜合すれば蔭涼軒日録となるのであります。又、鹿苑日録と申すのがありますが是れ

は鹿苑院僧録の日録で長享元年十一月より慶安四年まで原本で三十五冊あります、それから碧山日録と蔗軒日録でありますが蔗軒日録は文明十二年に始つて同く十八年の十二月に盡きて居ります。それで空華日工集と臥雲日件録、碧山日録、蔗軒日録の四種は簡人の日記でありますから一般歴史の材料にならぬ事柄が間々ある代りに風俗史料に富んでゐます、之に反して蔭涼軒日録は幕府の日記ですから前の四種の日録に比して随分無味乾燥の事柄が多くあります。空華日工集の著者義堂は足利義滿を輔佐した人ですから、當時の五山では中々に勢力もあり學殖も深く見聞も博く殊に思慮の綿密な人であつた様で、又來往の人々が當時高名の人々でありましたから書中には中々有益な事柄が記載せられてあります。臥雲日件録の著者瑞溪も、當時は僧録で中々の派利きでありましたし、又深き讀書趣味を持つて居た人ですから其の記載の事柄は、當時の文献上非常に参考になる點があります、季弘の蔗軒日録は碧山日録と其の内容は伯仲の間にある物ですが、季弘は東福寺にも南禪寺にも往山した人だけあつて、五山に關する事實は多い様です。碧山日録の著者は五山にも住せず十刹にも補せられず平僧で一生を了つたから、毎日あちらこちらと出あるき、途中の見聞などを記して、就中應仁亂につきては色々當時の状態を記して居りますから、一面からは當時の風俗を知るに都合よく、前の三種の日録に比して一種の特長を持つて居る様に思はれます。此外にまた鳳林承章の隔冥記とか、策彦の初渡再渡の日記とか、種々ありますが、是れは本題にあまれ關係のないことですから略しまして、碧山日

録の著者に就て愚見の大體を申述べ様と思ひます。

碧山日録は「史籍集覽」の第二十五冊に百三十丁より三百四十五丁に涉つて載せてあります。是れは舊東福寺龍眠菴の所藏であつたのが後に前田侯爵家の藏本となり、侯爵家の藏本に據て東京大學が影寫せられたものに依て、活刷に附せられたのであります。此の日録は長祿三年正月に始まり應仁二年十二月に終つて、丁度十ヶ年間の日記であります、而して別冊に成て居ります「史籍集覽」の解題、八十丁の所に碧山日録の解題が載つてありまして、左の如く記してあります、

碧山日録 五卷

僧碧山自筆の零本五冊、前田家に藏せらる、長祿三年より應仁二年に至れる日記にして此書即ちそれなり、然れども長祿三年と應仁二年を除きては皆殘欠なりし、今東京帝國大學所藏の影本に依てこゝに收めたり、と

扱て碧山日録の全部を讀みますると惠山又は本寺などと書して東福寺の事柄が澤山記してあります、其他當時の五山僧との關係の事も見えます、依て當時の五山僧中に碧山と申す文字に長じた人があつたかと段々詮索を致しましたが見當りませぬ、東福寺に碧玉山正覺菴と申す寺がありますので或は此の寺に居た僧ではあるまいかと考へまして更らに一應調査を致しましたが全く見當がつかませぬ。

爰に於て解題に碧山和尚とあるは愈々間違で、何人か外に著者が無ければならぬと思ひまして、穿鑿

に取掛りましたが何等の手懸りが御座りませぬ、一面東京の辻史料編纂官へも碧山日録の著者は大學で既に調べがついて居るや否やを問ひました、所が同君よりも「碧山日録の著者詳ならず聖琳と申す人の著ならんとの候へど不確候」との返書を得て五里霧中に迷ひました、致方がありませぬから再び碧山日録を精讀しました、所が長祿三年十一月六日の條に至りて

六日甲申、玄兄工彫、鑄於印文、余以雲泉野衲之字、需之、兄乃許諾矣

とあるのを見まして、始めて別號を雲泉と稱する人であると云ふことだけ分りました。併しまだ是れだけでは一向要領を得ませぬので段々讀で参りますと、遂に長祿四年閏九月即ち寛正元年九月二日の條に

二日乙巳、文安乙丑之正月、余侍伏見之退藏於勗仲、勗仲以偈見示、於古紙堆中得之、其叙曰、太極藏主偶來城南幽居、聚頭分歲尤愜老懷、矧亦究明已事、爲切、領略本地風光自家田園、必矣、作偈祝利曰

刹々塵々如意輪、季頭佛法甚尖新、分明契卷不離手、萬斛春風屬主人、

とあるのを見まして、此の日録の著者が太極藏主であることを發見した次第です、發見と申すと大層ですがツマリ見出した譯です。此の偈は長祿四年より十六七年の昔に太極が伏見の退藏院と云ふ寺で勗仲と云ふ老僧に參禪して居た時に、勗仲より與へたものなんです。此頃、太極は二十五歳より六歳

迄と考へます。著者が分りましたから次に此の日録は太極が何歳頃の筆録であるか是れが調べたくなりまして、段々讀で参りますと、應仁二年十二月十六日の條に於て、

是日立春、余既享年四十九

とあるのを見まして、是れより太極の生年を逆算しました所が、太極は應永二十七年の生れで、此の碧山日録は彼れが四十歳の時に始めて、四十九歳の時に終つて居るのであります。

次に太極の師承に就いて「惠日山宗派圖」を見ました、所が越中の崇聖寺と云ふ寺の開山に竺山至源と云ふのがありまして、其の弟子に全璧志蘭と云ふのがあります、全璧の弟子に虎溪齋遠と云ふのがあつて、この虎溪も矢張り越中の崇聖寺に住し又東福寺にも住山して同寺の百九世に列して居ります、歿年は分りませぬが同寺の歴代住持籍に依て推測しますと永享年間に遷化した様に思ひます、太極は此の虎溪の弟子と云ふことになつて、矢張り同じく越中の崇聖寺に住したことに系圖が成て居ります。太極は何人に就て學問をしたかと申しまするに、前に擧げました退藏院の昴仲には參禪だけで、主として建仁寺の瑞巖龍惺に就て學んだかと思ひます、夫れは碧山日録の長祿四年九月五日の條に「瑞巖和尚入滅、余出入和尚之門二十餘年、慈誨善諭所沾不少也、是以哀感不減諸弟、即赴哭於龕前、」

とあります。瑞巖は當時五山にては高名の僧で、語錄(三冊)の外に蟬菴外稿と云ふ詩集があります、其の外稿の中に太極に就て二箇所見えます、無用の様でありますが参考上此に記して置きます。

次韻太極賢侯咏雪

漫天飛雪散瓊絲、過訪期君共詠雪、美景難逢急行樂、人生俯仰作綠髭、

一夕朔吹攪林、飛雪打窓、而無口共言詩者、唯獨吟消永夜耳、明日太極賢侯寄詩統子(正宗龍統のこと)

又和以付使

咸平處士髭如絲、千古名高兩句詩、詩比昔人君更巧、雪時燃斷數莖髭、

余、和尚の門に出入する二十餘年とありますから、永享の末から出入し始めた者と見えます、即ち太極の二十歳頃に當ります。次に又長祿三年二月十三日の條にも清原常忠に就て論語、孟子、尚書、詩經、左傳等を學んだことが記してあります。又後年に至りましては雲章一慶、等持院の竺運等運等の百丈清規や漢書の講筵に列したことが記してあり、建仁寺の九淵龍暉にも師事した様子が見えます。太極の平素最も親しくして居たのは、東福寺の季弘大叔と同寺塔頭永安院の惟精見進の二人で、其外に建仁寺の正宗龍統、東福寺の華岳建胃、儒者では清原常忠、歌人では栗棘菴の清巖正徹書記等であります。併し徹書記は長祿三年五月九日に七十九歳で寂したことを同く十一日の條に書いて居りますから是れ以後徹書記に關しての事柄は見へませぬ。

太極は又其の日録の中に寛正三年五月四日と同年八月五日の條に「爲諸子講杜詩」と記して居りますから、東福寺の若僧等を集めて杜詩の講を開いたものと思ひます。次に此の碧山日録の草案を友人に見せて字句の批評を求めたこともあつたと見へて、長祿三年三月二日の條に

問_ニ繳惟精於靈泉、對床而談、正宗又至、出_ニ予之日錄、以商略焉、（此の條に、碧山日録の草案を友人に見せて字句の批評を求めたこと、あつたと見へて、長祿三年三月二日の條に）

とあります。又長祿四年四月八日の條にも

余去春、以_ニ日録數冊、求_ニ忠公之鑑、（此の條に、碧山日録の草案を友人に見せて字句の批評を求めたこと、あつたと見へて、長祿三年三月二日の條に）

とあります。忠公は清原業忠を申したのであります。是で見ますると太極は碧山日録の文章や日録中の詩偈を先輩又は友人に見せて是正して貰つた様に思はれます。

又此の碧山日録に一條兼良公が序文を書いて與へられた様で、日録の應仁二年三月七日の條に
前關白一條殿下、賜_ニ碧山日録之序一篇、（此の條に、兼良公が序文を書いて與へられた様で、日録の應仁二年三月七日の條に）

とあります、同月の十五日の條にも

與_ニ左太史長公、謁_ニ一條殿下、謝_レ賜_ニ日録序、（此の條に、兼良公が序文を書いて與へられた様で、日録の應仁二年三月七日の條に）
とあるのを見ますと此の日録には序文があつたことと思ひます。この前關白一條殿下は一條家の系圖に依て考ますると彼の有名なる一條兼良公に當るのであります、兼良公は桃華老人又は三關野老人と

も稱せられて文明十三年に八十歳で薨せられた方で、恰も此の日録の序文を書かれた時が六十七歳に當ります。彼の正徹書記の歌集草根集にも兼良が序文を書いて居られます。

次に太極は當時相應に詩文の作者であつた様に想像されます、それは應仁二年五月六日の條に
前板首座、見_レ求_ニ余之製_ニ淋汗幹線之疏、拒辭再三、請不己之矣、（此の條に、兼良公が序文を書いて與へられた様で、日録の應仁二年三月七日の條に）

とあり、九日の條に
問_ニ季弘於長樂、出_ニ淋汗疏、而求_ニ其品判_ニ也、（此の條に、兼良公が序文を書いて與へられた様で、日録の應仁二年三月七日の條に）

とあり、又十日の條にも
謁_ニ常喜和尚、亦出_ニ拙語、受_ニ慈教_ニ、（常喜は華岳、建胃を指す）

とあり、同く十三日の條にも「淨書淋汗化疏」と記し、其の作疏の全文を記載して居ります。茲で一寸申上げねばならぬことは五山で疏を作る人は多くは西堂以上の人であります、中には藏主位の人で作るのもあります、彼の相國寺の興彥龍の如き建仁寺の楞元方の如きがありますが是等は異數です。それで太極は此頃既に西堂位になつて居りはせんだかとも思はれます。彼の藏主であつた文安二年から既に十五六年も過ぎて居りますから或は西堂位であつたかとも思はれます。又季弘大淑の蔗軒日録文明十八年八月四日の條を見ますると

昨日雨中入_ニ充子寮、戲開_ニ机上册子、而見_レ之、亂中惠山之諸友相借所作之聯句詩、在_ニ此冊中、太周、

碧山日録の著者に就きて

太極、郁文伯、湖梅西等諸友也、此四人皆逝矣、其外存者、僅愚老一人、愚在田舎、加以病、雖存非存、不覺讀之潛然、太極與余同甲也、亂中、南禪瑞要西堂、竺關、和先祖慈氏和尚與普明國師雖字和答、四五十首八句也、各求和一首、月建及愚亦和一首、太極四五日之際、和者五十首、一代之絕作也、其中妙語奇對不爲不多、月建和尚絕賞特甚、余求其草稿於太極、秘之、好事之人奪之、今失其人之名、雖求不可得、恐竺關猶得著之乎、充子、爾年猶少、他日求於竺關之左右、寫而留則可矣、可以傳於後也、云々

とあります。是れで考へましても太極は當時諸友の間から作者を以て推奨を得て居つたことが分ります。

次に太極は餘程能書であつた様で、日録に醍醐の三寶院の僧正から聖濟總録の不足を謄寫して呉れぬかと頼まれたが斷つたこと、後にあまれ頼まれるので其の初卷だけ寫したこと、菊阿と云ふ人から扁額の揮毫を頼まれたこと、雲章一慶の語録を淨書したことが記してあります。

次に碧山日録を讀みますると、木幡より靈隱に歸るとか或は靈雲に歸るとばかりありまして碧山に歸ると云ふことは一箇所も見へませぬ、靈雲と申すは今も東福寺にあります、是れは彼の有名なる岐陽の不二菴を後に靈雲と稱したので、太極當時の靈雲は當時不二菴の境内に小菴があつたと云ふことであります、靈隱は靈雲の變名か、或は別寺か分りませぬが兎に角文章の鹽梅から推測しましても東

福寺の境内にあつたものと思はれます。而して日録の中に碧山の語はたつた二箇所よりありませぬ、長祿三年五月七日の條に

攤_ニ朽冊_ヲ於碧山窓下_ニ得_ニ往年予之所賦偈頌若干篇_一

とありまして、又應仁二年二月五日の條に

藤公來、寄_ニ惠礪石印函_一、以_ニ他適_ニ不相接_一

と記し、同く八日の條に

應子春仲五日、陽留居士(藤公のこと)問_ニ予碧山_一、而值_ニ不在_一、留_ニ意於門下_一、又願惠以_ニ礪石印函一枚_一とあります。是れで考へますと、太極は碧山にも居り、又靈隱や靈雲を兼務して居たかと想像せられます、其の他から歸いつた時を記したには多くは靈雲又は靈隱と記して居るにも拘らず、虫干をしたり珍客の來訪には碧山と記して居る所を見ますと彼れの本住院は碧玉山であつたかと想像します。是れで前に申上げた如く碧山が人の名でなくて、寺の山號であることは一層明瞭に成た事と存じます、太極には碧山日録の外に押韻集と云ふ著述があります。それは前に申上げた太極の親友の季弘大叔の文集に蔗菴遺稿一冊があつて、其の遺稿中に「書押韻後」と云ふ一文があります。この押韻集は太極の著述で、太極が應仁の亂を避けて何れへか逃れて居た中に、日々諸書を涉獵して其中から偈頌や詩句の妙所を摘録したものであります。季弘の文中に「太極之此作也、偈頌以_ニ吾徒之先務_一、實_ニ之於首_一、

詩之與句、岐而作^レ一、而次^レ焉、摘語甚簡、觸^レ類而分、可^レ謂能知^レ所^レ擇^レ焉」とあります。是れて押韻集の内容が分ります、此集の跋文は季弘が文明四年に書いたものでありますが、其の初めに

我友太極、遭世方擾、避兵山中、杜絕人事、四換青黃、

とあります。應仁は二年で終つて翌年は文明元年であります、文明四年に書いた文に「四換青黃」とありますから文明元年から太極は京師の亂を避けて何れへか參つて居たらしく思はれます。碧山日録は應仁二年の十二月に終つて居りますから其後のことは分りませぬが「遭世方亂、避兵山中」とあるより見ますと、或は江州邊にでも避難して居たかと思はれます。申す迄もなく應仁の大亂は京都至る所大變の騷擾で東西兩陣の大戦につれて、白晝諸所に盜賊が横行し、現に碧山日録にも東福寺へ賊が入て北谷の寺の住僧が何れへか避難したことを記して居ります、日録の應仁二年八月二十八日の條に

十四日、自^三西兵入^ニ本寺、常喜、法幢、長慶、本成之諸老、及長幼之徒數百員悉下^レ山而去、鐘鼓止^レ響、香燈絶^レ光、欠^ニ晨誦晚參之勤、邊夷^レ戎卒、狼籍於諸室、屠^ニ肉庫下、繫^ニ馬廊間、行力未^レ逃者、跼蹐只恐^ニ殺戮^レ而已、其暴虐不^レ可^レ言、

とあります。右様の有様ですから、太極も逆も東福寺には居られなだこと、思はれます。此の當時の五山僧徒は多く東江州に避難をして居ります。彼の有名なる相國寺の横川景三も應仁元年の八月に桃源瑞仙や景徐周麟と共に江州の永源寺に亂を避けて居ります。其時の其時の文集に東游集と云ふ一

冊がありますが、それを見ますと江州邊にも賊徒が横行して居つた様であります。

最後に一つ申上げねばならぬことは、初めに挙げました解題の中に「零本五冊」と云ふこと、「長祿三年と應仁二年を除きては皆殘欠なりし」と記してありますが是は何も證據のないことで、果して零本であるか、殘欠であるかは判断に苦むのであります。現に瑞溪周鳳の臥雲日件録でも瑞溪が五十五歳の時に始めたもので、日件録の卷首にも

文安三年三月晦、予退^ニ崇壽、移^ニ壽星軒、退圃無事、記^ニ日用事、名曰^ニ日件録^ニ云々

とあります、即ち瑞溪が功成り名遂げて退隱後、無事の餘に記したものです。又季弘の蔗軒日録でも彼れが東福寺を退院後、漸く文明十二年から記し始めたもので、彼れは同く十九年に寂して居ります。何も日録は若い時分から記述するに極まつて居りませぬ。然れば此の碧山日録も何の根據もなくして零本とか殘欠と云ふことは出来ませぬ、私は寧ろ是れだけのものかと思ひます。零本とか殘欠とか斷定するよりも此の見定めが適當の如く思はれます。

以上述べました所で碧山日録の著者は太極藏主と云ふ東福寺の僧で雅號を雲泉と稱した人であると云ふことだけは御了解に成たこと、存じます。然れば今日の講演の目的は不束ながら一應達したのでありますから是れで御免を蒙ります。

以上の記述は、予が明治四十二年二月二十一日、京都史學研究會に於いて講述したるものにして、後

に史學研究會講演集第二冊(明治四十二年十月 東京富山房發行)に掲げたり。然るに其の翌年に至り東福寺の僧惠鳳翔之の竹居清事を讀みたる際、吾雲軒記と云ふ一篇を見たるに左の文あり、

吾雲乃太極上人所扁其燕處之軒也、宇在先塔西北之罅隙焉、其地從衡不益畝、宇之製也不踰數楹、號曰靈隱、謂曰、此地光浮而苔色凝矣、夕鳥宿而午禽聚焉、不知其幾年、今入乎吾之手、叢片版以障風雨、架數椽以支歲月、有平頭之備指麾、有白足均氷藥、朽策之注目也、則樂以忘年、坐蒲之憩勞也、則靜以自怡、有親故故人、氣稱意合、則延以共話、頽然天壤内之一逸民也、吾曾披北戸一坐、前山蕩々以來、碧而集乎吾懷焉、因以碧山佳處命之矣、(以下略)

是れを見て始めて碧山の出所を明瞭にし、又前の記述中に靈隱につきての考證をも一舉して判然することを得たり。即ち太極の東福に在る菴を靈隱と云ひ、所居の軒には吾雲と扁し、又後に碧山佳處と扁したるなり、其の日録に碧山の二字を冠したる此に於いて氷然解釋することを得たり、追記して前きの推測の誤れるを正す。

龍山德見禪師 附、本邦饅頭の創始

我國の禪宗が、建仁寺の開祖榮西祖師に依りて傳へられたることは何人も知る所であるが、其の祖師の法脈は、支那の天童山の虚菴懷敏より出で、榮西は實に黃龍慧南禪師八世の嫡孫に當るのである、

然るに現今この法脈の残つて居る所は全國を通じて僅かに七八ヶ所に過ぎずして、就中、勅賜眞源大照禪師龍山德見の一派が其の重なるものである。龍山は黃龍下第十三世の嫡流にして、日本の黃龍派は龍山に依て中興せられたのである。龍山の滅後、茲に春秋を閱すること五百五十餘年を経て、今や南浦大應國師の一派は天下の禪林を風靡して、自餘の法派は甚だ振はず、就中、黃龍の一派は絶へざること絲の如き有様ではあるが、報本反始の上から我國の禪僧は永くこの法派の恩澤を忘れてはならぬ。余が今龍山の傳を叙するも亦この不忘の意を表するに過ぎぬのである。

誕生

我國の平氏は桓武天皇第二の皇子葛原親王に出で、後に姓を賜ふて平氏と稱したが、其の子孫が甚だ繁榮して、就中關東にありし者が最も昌んで、千葉氏は其の長であつた。師は實に千葉の一族で諱を德見と稱し、もとは利見と稱したのである。下總國香取郡の人で、郡に龍山と云ふ山があつたから自ら取つて號とせられた。一日、母が日輪を呑むと夢みて孕み十三ヶ月目に出生になつたので、時は弘安七年十一月の二十三日、即ち蒙古の襲來より四年目である。丁度この前後には五山で有名なる宗匠方の出生になつた頃で、龍山の誕生より十二年前には鎌倉淨妙寺の天岸惠廣生まれ、次で建仁寺の大鑑禪師(支那)、天龍寺の夢窓國師、建仁寺の嵩山居中、東福寺の虎關國師、南禪寺の佛德禪師、天龍寺の無極志玄等も相次ぎて誕生になり。又師が誕生の七年後には永源寺の寂室禪師、建仁寺の雪

村友梅禪師、又一兩年を隔て、東福寺の大道一以、南禪寺の竺仙梵仙（支那）、建仁寺の別源圓旨、仁浩無涯等の人々が誕生せられたので、後來彬々たる禪門の巨匠が一時に呱呱の聲を揚げられたのである。龍山は幼年の頃より聰明利發にして常に好んで儒書を読みしも、然も俗と混居することを喜ばれなかつたと云ふことである。

出家

そこで後伏見帝の正安二年、時は恰も建仁寺で、有名なる中巖圓月、又天龍寺の默翁妙誠の生まれられた歳に、父に送られて鎌倉の壽福寺に抵り、勅諭宏光禪師寂庵上昭を拜して師とせられた。時に師の齡十七歳。寂庵はこより先き、支那に遊び、當時の禪界にては甚だ高名の方であつたが、龍山を常に愛撫し、翌年より法華經を教へられた。龍山其の經を讀むに復習を勞せずして、克く背誦し又、義理にも通じて内典は素より外典をも學ばれたが、其の卷を開いて讀まるゝのに、皆肯綮に當りて、少しも違ふことはなかつたと云ふことである。筒様の風であるから寂庵も常に龍山を稱揚して、利見は再來の人なりと云はれたと傳へてある。それより間もなく剃髮受具し、寂庵の左右にあつて朝々暮々定省少しも怠る色なく、三年一日の如く服事して居られた。

參學

是れより先き龍山が出家の前年、即ち正安元年に、支那から寧一山が來朝して鎌倉の圓覺寺に虎踞

し、道譽甚だ高く、天下の雲衲は多く此の所に集まつた。依て龍山も往いて之れに參せられたが、これと同時に掛搭を求むる者四十餘人あつて、一山は道場を開いて之を選ぶことゝなし、繩床を指して題となし、頤を作らしめ其の良好の者を選んで掛搭を許すことゝなつた。即ち龍山は筆を把て立所に一偈を作られたが、實に四十人の最であつて、一山之れを一見して善と稱し室中の一單を與へ、大小の事を除く外、餘は室門を出せず大に參究し、暫くして侍司の職に補せられ、賓客の送迎を司つて居たが、大凡二年の後、齡二十二歳の頃支那に遊ばんと志し、歸つて寂庵に志のある所を披瀝せられた。庵即時に之を許し密に秘訣を付し畢りて、而も人に之を知らしめず、一夜竊に庵に送られて門を出で、遂に去つて商船に搭じ、四明に着せられた。時は我が後二條帝の嘉元三年、彼の國にては成宗皇帝の大徳九年で、雪村友梅の入元に先だつこと三年前であつた。

入元

龍山は滿腔の雄志を齎して、海洋萬里孤帆恙なく四明に上陸はしたが、當時の支那は既に元の世となり、世宗皇帝の東洋侵略主義の餘焰は猶ほ未だ熄まず、高麗、江南、大理等の諸國は皆一統せられ、我が國の如きも弘安四年に來襲を受けたが遂に十萬の兵を屢にし、生きて歸る者僅に三人と云ふ有様であつたから、成宗の時代になつても遺恨骨髓に徹して居たゝめに、容易に本邦人の上陸を許さず、唯だ商人のみは之を禁せなかつた。ために我國より雲游の衲子も城門内に入ることを許さず、犯せば

罪に座せらるゝと云ふ次第、是に於て龍山自ら誓て曰く、古人は法の爲めに軀を喪ふ今正に是の時なりと、大勇猛心を起し一夜竊に雉堞に登り身を城中に投せられた。所が幸にも富豪の庭中に墮ち守衛の者に捕はれて縛せられた。其の翌朝に至り家主が龍山を召して何に因て此に來たかと問ふた。龍山は言語の通せざるを以て紙筆を求めて吾れ日本に在つて遠く天童山の東岩和尚の道徳高きを聞き來つて生死解脱の道を問はん欲するなりと書して答へられた。時に家主の夫妻は素より佛法を崇信し、又東岩和尚を拜して衣盂を受けて居たので、當時東岩は天童山に住持となつて居られたから、自分等の師の道徳が外國にまで聞へて居るのは甚だ喜ぶべき事に思ひ、乃ち官に白し自首を以て罪を免され、又携へて東岩を天童山に尋ね、具さに前の事を陳べた。依て東岩も亦其の道に志のあるを喜び、收めて之を僧簿に録し、上字の利を改めて徳となし、禪堂に入らしめた。然るに其の翌々年即ち我が徳治二年、彼の國の大徳十一年に、我が邊民が海賊となつて彼國に押し寄せ、遂に慶元路の一城を焼くと云ふ異變が起つて、是れが爲に諸寺を巡檢して日本僧を捕ふることとなつたが、當時天童山は尤も重責に遭ふたので、既に數十人を得て姑船に載せて之れを大都に送ることとなし、龍山も亦其の一數に預り遂に洛陽の白馬寺に置かるゝこととなつた。この間にも龍山は自ら常に白馬寺の老僧に就て參究せられたので、當時彼の國北方の叢林にては自ら進入室商量を試みるものもあるも、一夏の間に或は一則の公案を透過する能はずして退く者も多く、若し三則又は五則を過ぎ十則を過ぐる者は上科とせ

られたのである。龍山は一夏の間に百則の公案を透られたために、群衆の内にて驚く者もあり、忌む者も出來て、少なからぬ辛酸を嘗められたと云ふことである。幾もなくして又大童山に歸ることを許されたが、時に東岩は既に寂して竺西和尚が後席を繼いで居た。乃ち侍香の職に補せられ、この間に復た吳門に游歴せられた。恰も東洲和尚が虎丘山に主となり、茂古林は隆和尚の塔を守つて居たから、主賓相忘れて日夕に敲唱激揚せられた。而も龍山は參方の志益々萌し、江西、蘇、杭、黃龍に上り、目撃して過ぎ、又錫を匡廬の東林に駐めて此所にて輿論を掌り、職解けて後、また豫章に遊び、修川に遡り、分寧に至られた。時に高平山和尚が蘇州平江府雲岩寺の席を董して居て、師を留めて分座説法せしめ暫くして平山和尚が黃龍に遷ることとなつたので、雲岩の東菴を以て龍山に附し養高の所となさしめられた。この時、濟川和尚が雲岩の住持に請せられたから、川は龍山を厚く遇し、又分座説法を命せられた。龍山が游歴中、この時が最も會心の時季であつたらふと思はれる。是れより先き後醍醐帝の正中元年に建仁寺の中岩圓月が元に入り、又二十餘年を経て佛通寺の愚仲周及も入元せられたが、二師は彼の地にて邂逅せられたことが諸書に見えて居る。即ち中岩の自歴譜に據ると「大元の泰定三年丙寅冬、雲岩に抵りて掛搭す、濟川和尚に見ゆ、時に龍山和尚、單寮に在り、郷の尊宿を以て朝夕參扣す」と記し。又同書に「元の文宗天曆元年己巳春、江西に旋り、再び龍山和尚を訪ふて、夏を過す」とある。是れで見ると中岩は彼の地にて龍山の提撕を受けたことが分明である。龍山が雲岩

に在りし時、廬山に遊はれた詩がある、

一雨消殘暑、秋色滿天地、柱杖化蒼蛙、草鞋追赤驥、踟躕五老峰、吸盡虎溪水、遠公運著忙、失却鐵如意、(黃龍十世錄)

と云ふのである。又訥藏主が日本に歸る時にも

只將一默應來機、負汝負吾人莫知、東海今朝歸有路、大唐何處得禪師、(同上)

と云ふ偈を書して送られた。當時龍山は支那に遊ばれてからモ一二十三年も經て居るから、本國より參方した衲子の多くはその提撕を受けたに相違ない。又龍山が歸朝の後、南禪寺天授菴の平田慈均に語られた話に據ると、龍山が雲岩の首座寮に居た時、一日、飽參の一僧が東司の下でさめく泣いて居たから、龍山は其の故を問はれた。時に僧が曰ふには、我に一人の老母があつて故郷に病で居る近頃行つて病を見舞はんと思ひ、藥料の爲に一封の金を所持して居たが、今洞に登つて圖らず之を惡水の中に落し、た依つて母を見舞ふても、病は藥でなくば癒へず、藥を求むるには資がなければ求むことが出来ぬ、依て我れは母に先だつて死なんと決心して居ると答へた。是に於いて龍山は自ら衣を脱ぎて惡水の中に入り、落した所を問ひ僧の指すがまゝに之を探るに、果して其の金を得て、僧に渡された。是に於て僧が合掌して曰ふには、母と我と二人の命を賜ふ何の恩か之れに加へん、此の生に於ては酬ゆることは出来ぬから、來世に於ては必ず弟子となり、身を奉じて事へんと云ふて別れ去つ

が、龍山が後に歸朝して、弟子にせられた天祥一麟の顔貌と言辭とを見るに、恰も雲岩にて金を失つた僧に似て居ると云はれたことがある。此の頃。我が豊後の萬壽寺にて住持を虚ふしたに就て、檀越の大友氏より寺僧の本禮首座を專使となし、龍山を住持に請しやうとした。然るに是の歳、彼の地、江淮の間が大に荒れて盜賊四方に起り、塗を硬くと云ふ有様であつたから、龍山は行路の難を口實として其の請を拒み且つ壽龜を經營して雲岩寺の單寮を以て終焉の所とし、骨を異域に埋むるの決心をせられた。

兜率寺住山

然るに此の時、寧州の兜率寺は、悅禪師が唱道の地なるも、久しく廢して振はざりしため、東堂の安初心和尚より知府に告げて、龍山を起して住持たらしめんとしたが、龍山は固く辭して可かず、幾度か迫るに及で命を受けて之れに赴かれた。時は彼の國明宗の天曆三年六月で、寧州の大官并に諸山の耆舊等歡呼して相送り、直ちに兜率に進み、其の入寺の日には一條の青蛇が法座の下に盤まつて居たので、人々は皆奇瑞と稱して之を賀したと云ふことである。住山十年の間に百廢皆興り、四方より衲子も來り參じて、人々は皆、悅禪師の再來なりとまで稱揚した。蓋この時に彼の國にても黃龍の一派は既に斷へんとしつゝあつた時で、龍山に依て又大に復興したのである。龍山が住山中には大に土木の工を起したものと見へて、床榻を造つた時の勸縁の偈がある。

兜率募緣成底事、殿堂床榻要重新、須知浩劫十千佛、便是如今一萬人、
と云ふのである。又當時支那に游方した、東福寺の十八世一峰明一の海滴集と云ふ詩集には左の偈が
載せてある。

次 兜率建僧堂韻 賀方丈龍山 (四首)

掀翻蓋却黃金瓦、彈指圓成休歇場、老悅今朝再來也、一新門戶道彌光

移來天上率陀院、地下經營怒出奇、畢竟元無二彌勒、分身百億是何誰

堂前連叫金牛飯、無柄鉢孟口向天、三世如來因慶讚、十鎚聲徹最高巔

打得三關門大開、安禪偏向此中來、五間屋下無閑漢、總首叢林布蔭材

是れで見ると一峰和尚も、彼の地で龍山に邂逅し、又僧堂の建つた時には賀にも登つた様である。然
るに龍山は、晩年に及で漸く歸郷の情動き、直ちに兜率の寺事を謝して、金陵建康府の龍翔寺まで來
て此所は暫らく滞在して居た。此の時龍翔寺の住持は笑隱訶禪師で、龍山とは同庚でもあり、又遠來
の客と云ふので厚く待遇せられた。すると兜率からは專使が龍山を追ふて來り、モー一度是非歸山し
てくれとの事で、止を得ず再び寺に歸られた。この時には彼の一峰和尚も再住を勧められたものと見
へて、海滴集に又左の偈が見へて居る、

見龍山西堂、將回日本至杭州、不遂、再歸江西兜率、偈勸再住

南宕山中親塵佛、別來不覺已三年、因懷東土松枝偃、又聽西州象駕旋、道化如春融萬國、行藏同
月在中天、率陀內院真彌勒、更爲迷情開法筵、
それから又天岸惠廣の東歸集に左の二首の偈が録してある、

次 韻寄見龍山催回鄉

拗折烏藤稱飽參、百城煙水百城山、胸中五逆應須懺、握打爺拳劈面還、

寄龍山見首座催回鄉

聞說片心金石堅、寒灰鄉念不重然、西山相共三千里、東海拋來二十年、堪笑馬師慚梓下、況無婆
子在溪邊、煩君磨取成明鏡、處々菴前多碌磚

これは恐らく、師が兜率寺に住山前即ち雲游時代に還郷の情を催されたことがあつて、其の時に天岸
が贈つたものであらう。天岸は師の入元後十六年、即ち後醍醐帝の元應二年に支那に入り、留まるこ
と六年にして正中二年に歸朝したので、この時分は龍山がまだ諸方の名師に歴參時代であつて、兜率
住院よりは六七年も以前で、年月が合はぬのみならず、天岸は龍山の歸朝に先だつ十五年前、建武二
年の三月に鎌倉で寂して居るから、この二首の詩に由て、龍山が游歴時代に一度歸郷の情を催された
ことを推測し得らるのである。又是より先き元の至正元年、我が暦應四年に藝州佛通寺の開祖愚仲
周及が支那に行脚せられたが、愚仲も彼の地で、龍山に逢ふて商量せられたことがある。其は黃龍十

世録の中にある左の偈と、愚仲の年譜とを對照して始めて知ることが出来る。其の偈は

次韻送及藏主歸金山

爰業紫金橫半空、南來特々遠趨風、楞伽室內無傳授、華藏界中都混融、初日纔昇天下曉、百州鏡注海門東、九州外有九州在、隨所應須立本宗

と云ふのであるが、是れは愚仲が金山の即休契了に隨侍して居たときに、偶々龍山を兜率に尋ね、其の再び金山に歸るに當り贈つたものらしい。愚仲の年譜を見ると「元の至正八年（中略）石室、龍山と時々往還す」とある。又同年譜に「至正十年庚寅、丈室に詣り辭を告ぐ、休（即休）且つ喜び且つ悲み筆を命じて云々」と書し、左の送別の偈がある

裴寺相親閱幾秋、左探右索出時流、機輪三轉輪元淨、定慧雙證慧無修、睡虎耽々拋故穴、游龍矯々奮靈湫、好翻一滴長江水、漲起東方廣海州、

この即休了の送別の詩に、龍山は又和韻して愚仲に贈られた一首がある。其の偈は「和金山即休韻送及藏主」と云ふ題で

參扣金山已六秋、洋々韻度異常流、藏無大小都容攝、道絕功勳不用修、但得擊頭還戴角、自能倒嶽又傾湫、蒼生渴望多時也、霖雨何妨徧九州、

と云ふのであるが、愚仲は當時二十八歳、龍山は正に六十七の高齡で、而も支那に入つてから、既に

四十六年も経過して居るのであるから、彼の地にては、愚仲は少なからぬ龍山の恩顧を受けたに相違ない。

さて龍山は兜率寺の特使に迫まれて、一旦は歸山せられしも、寄る年波と、もに歸心又動き、即ち瓢然として更に山を辭し、初め我が日本を離れてから茲に四十六年目にして愈歸朝することに決せられたのである。

歸朝

懷郷の情一度動きては歸心矢の如く、又停むべくもあらず、即ち彼の國順宗皇帝の至正十年正月二十七日に舟を崑山に買ふて蘇州の大倉に纜を解き、洋上にあること凡そ四十八日餘にして三月の十四日、一帆恙なく我が博多に上陸せられたので。時は我朝正平四年、龍山の齡六十六歳であつた。當時龍山に隨侍して歸朝せし人々は、日本の禪僧十七人と、船主以下支那人が十一人で、一行の總計二十九人即ち左の人々である。

前兜率龍山和尚

圓薰首座、祥麟首座、一清首座、致柔首座、元東首座、守一首座、元榮首座、自肯書記、裏淨藏主、清安藏主、寬珍藏主、祖麟藏主、妙奇侍者、智燈侍者、妙愚侍者、（入道冬長朝臣なり）正幡侍者、善慧侍者、（以上日本人）

船人施榮甫以下十一人(以上支那人)

是れは商船でなくて、龍山が特に雇はれた船であるから、當時にても少なから費用を要したであらうと思ふ。園大曆に據ると、貞和六年四月十四日の記に

按察入道來、此間宋船來朝之由風聞、不信受之處、彼禪門持來一通、伴僧來朝、子細鎮西注進武家也、此間趣符合歟、爲後勘續之

と記して、歸朝僧の名次を始め、鎮西より武家に注進したる左の文書が記載してある、

今月十五日、宋船一艘着岸于築前國息濱津之由、當津代官幸任、馳申軍陣之間、彼注進狀一通、(中略)謹進上之、大元兜率龍山和尚以下禪僧十八人日本人并船主十一人宋人來着云々、巨細差遣使者致其沙汰候、追可令注進候也、以此旨可有御披露恐惶謹言

貞和六年三月十七日

宮内少輔

進上御奉行所

これで見ると龍山の雇つた宋船が、博多の津に着したにつき、驚いて九州の探題より京都へ注進したらしく、當時外國出入の船舶は、幕府の指揮を待つて行動したもので、其の乗込人も亦其の指揮を得て、始めて入京することを得るのであるから、本國に歸つたからとて直ちに入京が出来なんだからい。其れは愚中和尙の年譜に「至正十一年(本朝觀應二年)辛卯三月解纜、四月博多の津に達す、龍山、師の至

るを喜び相伴ふて洛に赴く」とある。愚中は龍山より一年後れて歸朝したのであるが、然るに龍山が猶ほ歸朝後殆んど一年も博多に居たと云ふことは、雇船の始末、其の他幕府よりの指揮を待つて居たのであらふと思ふ。其は左の上書に由て大體を知り得らるのである。

上宰府探題君一書

德見端肅上啓、探題宮内少輔殿閣下、德見伏審、閣下大施善政、爲國藩衛、台候動止萬福、德見訪參佗邦、四十六年矣、臨老懷歸、而鄉舟不至、只得率同志團黨等一十七人、雇倩小船一隻、棹者施榮甫等十一人、正月二十七日、離蘇州大倉、三月十四日方至本國博多津上岸、適逢閣下接行他州、不克具陳所懷、是不遇之大者也、(中略)棹工等在此、日夜思念郷土、恹々不安、其欲歸之心、實爲感憐、惟閣下爲民父母、遐邇無不綏懷、敢乞移文上申京師政府、早賜發歸、故圖、是所至懇、茲遣澤藏主詣廳下代稟、此意伏乞垂察不具、三月日、德見端肅上啓、

これは彼國より雇ふて來た船并に船員等も、幕府の許を得ねば發船することが出来なために、其の許を待つて居たが、あまれ永引くために九州の探題へ宛て、早く指令を下さる様にと願つたので、龍山が一年程も博多に滞在して居たのは是れがためであらふと思ふ。この間に龍山は對馬へ行つたことがあつたか、或は博多へ着く迄に對馬に寄られたか、何れにもせよ歸朝早々對馬に向はれたらしい。

黃龍十世錄の中に

龍山德見禪師

歸郷至對州、呈中村廳下

西風吹到海東山、千古巍々對馬韓、多謝賢資能顧我、莞然一笑共歡顏」
馬伏波家勳業在、繼承應是丈夫兒、海山萬疊凌雲漢、靄々春風自四時」
と云ふ二首の作がある。又廳中で響應を受けたり、演史を聴かれたものと見へて「同廳中聽演史」と云ふ題で

四十七年今復回、一心贏得冷如灰、無端聽着演前史、不覺令人悲感來
と云ふ詩がある。四十七年目の歸朝であるから、見るもの、聞くもの一として懷舊の感があつたに相違ない。又博多に滞在中は、承天寺なり、聖福寺などの堂頭と唱酬せられたものと見へて、「承天寺定山の韻を和す」と云ふ題で左の二首がある。

三韓過了至扶桑、到得扶桑匪故郷、若問故郷何處是、但言生鐵鑄旌陽」
珍重松山真導師、應機殺活少人知、要令法社增光彩、須待寅賓慧日時」
是れは東福寺芬陀院の開基定山祖禪和尚が、當時承天寺に住持であつたから、滞在中に往來せられた時の唱酬であらふ。又一日聖福寺の前任無隱元誨(二十一代)が京師より扇子を贈つたに對して和韻の詩がある。

孤風歸到海東邊、舉目無親孰眷憐、多謝炎炎三伏裏、仁風來自九重天、

と云ふので、無隱元誨は建仁寺の三十二世、勅號を法雲普濟禪師と云ひ、中峰派の宗匠で、後に南禪寺(二十一代)にも住山した高名の方である。

建仁、南禪、天龍の住山

愈々雇船の開洋も幕府の許可があつたから、觀應元年彌生の頃、愚中周及并に一行十七人の僧の外に林和晴の末裔に當る林淨因と云ふ彼地より隨つて來た支那人等を伴ふて京都に歸られた。すると、武衛將軍足利直義が敦く龍山を請じて東山の建仁寺に住せんことを願ふた。是に於て其の請を容れ、觀應元年の八月五日に入寺して、一香、寂菴和尚の乳恩に酬ひ、且つ千光の兒孫猶ほ在ることを知らしめられた。この時山門の疏は古鏡明千、諸山の疏は此山妙在、江湖の疏は別源圓旨が各々作つて贈られたが龍山の道聲は一時に洛の内外に響き、王臣の歸依は勿論、雲衲も又四方より來集して寺門は甚だ繁興した。當時彼の有名なる義堂周信も師の道聲を聞き、錫を建仁に掛けたが、其の年譜の空華日工集觀應二年九月の條に「時に龍山和尚、方丈に端居し、一世を俯見して尤も許可を慎めり、(中略)命せられて書狀に侍す、和尚建仁より南禪に徙る、余皆之れに隨ふ」とある。又同集應安四年の條に義堂が徒弟に聽教の事を語るの例に龍山の事を引證して「龍山和尚毎夜必ず徒弟に對して説話す、少年雜道者と雖も亦必ず尊宿に對するが如くして欺かざるなり」と記してある。龍山が建仁寺に住持して雲衲を接した様子が甚だ分明である。住山の冬、開爐上堂には

丹霞遇寒燒木佛、沒些暖氣也徒然、法昌說法對泥像、幾層得擊小彈一偏、可_レ是東山無_レ計較、冷灰深擁待_レ生煙

と云ふ偈がある。越へて文和三年には、救命を奉じて年の三月二十八日に南禪寺に往せられしが、この時、龍山は愚中を書記に充てた。愚中の年譜に其の事を記して「文和二年癸巳、龍山、南禪の教を受く、(中略)江南の叢林書記を以て重任となす、苟も其の才なくんば闕く、公や異城の莫逆なり、願くば舊知を以て此の職に居れ」とある。是の時、愚中は嵯峨の臨川寺に居たのを龍山が一日訪問して頼まれたので、當時、龍山が人材を擇んで各々重職を授けたことが明かである。此の年、中秋明月の日、雨ありければ上堂に

月圓月闕不_レ須_レ問、順數猶如_レ倒數時、多少未忘光境者、雨中暗座斂_レ雙眉、

と云ふ偈を打せられた。南禪に在ること僅に一兩年、是より先き、偶々、足利尊氏、夢窓國師を請じて天龍寺を開創せしが、國師は中華の禮樂の山中には行はれて、且つ永く其の軌式の後に貽らんことを欲し將軍に告げて龍山を天龍に請せんことを請ふた。是に於て詔降り、遂に寺位を下つて天龍寺に移られしが、住山間もなく延文三年の正月四日に火災があつて一山悉く烏有に歸した。この火災の最中に龍山は中夜にも拘らず北山の大聖歡喜寺に退かれたが、輿を昇ぐ者が一人を欠いた爲に、弟子の一隣一菴が昇夫の役に當つたと傳へてある。龍山は此時既に天龍寺の職を辭する決心なりしも、聖旨再

三懇留に逢ふて再建を督することとなり、再び天龍に歸られしも此の年の十一月に至り微疾あり、四大ために調和を欠くこととなつた。是れより先き、朝廷よりその道僧を尊び、眞源大照禪師の號を賜ふて、尊崇の意を表せられたのは當時龍山の聲望高き一端を知ることが出来るのである。

示 寂

延文三年の十一月十日に、天龍寺の方丈にありて微疾を示し、翌十一日の早天に至り一山の大家に別を叙せらる仍つて一衆は固く請ふて猶ほ山に留らんことを願ふた。時に龍山は對へて、老僧前日東山の建仁寺に往き自ら一穴を掘つて瓮を中に設けて置いたから、即ち今は衆に告げて永別し去らんと思ふ。病革まれば轎に上るに不便なり、若し死せば吾を輿して瓮中に歸してくれよ、と云はれた。一衆は皆其の顔色を視るに常の如く、信せざる者多かりしが、翌十二日の晩に至り沐浴して寢所に入り、夜半に至つて座より起つて新淨の衣を着け、燭を秉つて遺誡數紙を書かれた。侍僧は又辭世の偈を請ひしに、世は辭すべからず頌を傲して奚をか爲さんと書して聞かれなかつた。固く請ふに及び「西湧東沒、南往北來、末後一句、掘地深埋」と書して侍僧に與へ、即ち戶外に出でんことを求められた。侍僧即ち扶けて出づれば龍山は仰で月の已に斜なるを看てまた座に歸り、終に十一月十三日と書し、筆を投つて眠るが如くにして化を他界に遷された。仍て門人等皆遺命を奉じ、昇て東山建仁寺内の知足菴に至り、先きに師の堀りし所に葬り、盛んなる葬儀は諸山の尊宿并に大衆に依りて營まれたのである。

龍山の遷化せらるゝや、四方の縑素は深く之を悲み、各々哀悼の辭を眞前に供せしが、中にも天龍寺の龍湫周澤は深くこの遷化を悲み

掘地深埋慈氏佛、須彌倒卓柱黃泉、也知窈々黃泉底、更有上方兜率天

と云ふ悼偈を眞前に供へ。又更に人の悼偈に

四居名利大動成、忽見浮雲蔽大明、隨順世緣超有界、勝游方外示無生、鴨川逝水湯々淚、龜橋悲風瑟瑟聲、嗟我胸中天與地、不知何日得昇平

と云ふ和韻をして深く悲まれた。この他、建仁寺の無涯仁浩、中岩圓月、天境靈致、東沼周嚴の諸師は、或は祭文或は拈香を作つて天下の巨材を失ふたことを悲み、遷化の翌年には、中岩圓月が龍山の行狀を叙して、其終りに

師平昔志を道に勵まし、而して禮人に疏なり、内に充る所ありて外事とする所なし、言行相踐みて虚偽を容れず、已に胸中に果決することあれば威武の凌加するも以て屈すべからず、而も況や近侍褻狎の者の能く枉る所ならんや、若し夫れ操行の至潔、證解甚深の驗は末後臨行の時にありて親切著明なり云々

と贊語を附して在世中の跡を追慕し。又其の翌年に龍山の法嗣一菴一麟が薩州の大願寺に住し、後に元侍者が洛に入り東山に登つて龍山の塔を禮して歸つて來た時に、一麟は左の述懐を作つて元侍者に

贈つて居る。

先師室内侍衣孟、熱喝噴拳見丈夫、滅後今雖踰一紀、影前猶似聽三呼、離郷再到東山寺、拜塔便歸西海隅、綠鴨頭邊橫主丈、金鰲背上拂珊瑚、蓬萊夜月宿仙仗、桃李春風願帝都、沆瀣吹衣金翠曉、滄浪濯足錦帆鋪、青霄飛下天童蓋、白日擊來龍女珠、絕代縑流英武裔、彌天釋氏道安徒、莫將素髮老桑梓、須有黃麻召慈芻、我也餘生無幾歲、何時風雨話江湖、龍山の法嗣は凡て十人あつて、其の嗣法の順序から云ふと

一菴一麟(南禪) 草堂林芳(建長) 大杭慈船(善福) 中菴允 無等以倫(廣嚴) 占樵壽能 壽蟻立岩本(聖福) 古耕壽懷(聖福) 正宗承

となつて居るが、中にも一菴、草堂、無等の三師は其の名最も世に聞へて、化を四方に揚げ、黃龍派はこの人々に由つて再び繁興したものである。義堂の空華日工集、應安八年の條にも「正月十二日草堂和尚を壽福に禮して歎話、龍山和尚の舊徳に及ぶ、堂、余に謂つて曰く、黃龍の一派東海に入り絶へんと欲して復た續く、吾祖寂菴の後、先龍山を得、龍山の後、某乏を此に承く云々」とあつて、當時は勿論、現今までも流派の絶へぬと云ふことは、全く龍山の餘徳と云はねばならぬ。

附 饅頭の創製

龍山の生涯は以上の叙述によりて大體を悉したが、茲に林淨圓の事蹟につき其の大略を述べねばな

らぬ。龍山が崑山から船を雇ふて歸朝の時に、日ごろ歸依して居た居士の林淨圓と云ふのが、龍山に隨ふて來朝した。夫れは前に擧げた一行中の支那人十一人の列に加はつて居たので、この林淨圓は、宋の林和靖の末孫で、彼地に在つていたく龍山に歸依し、又隨ふて來朝したが、龍山と別るゝに忍びぬと云ふので、我國に歸化し、後に大和國の奈良に住して、其の住家の町名を當時の人が林小路と名けて居た。さて淨圓は歸化して奈良に住居したが、別に生活の業もないから饅頭を作つて賣り弘め、これが爲に我國にて始めて饅頭が出来ることゝなつたのである。この饅頭の製法は、林和靖が山房の傍にありし庵蔓樹の實にまねて作つたのを、淨圓が其の遺法を傳へたと或る書に記してある。さて淨圓は其饅頭を宮中に献じた所が、天皇は甚だ之を喜びたまひ、爾來度々宮中に召されて寵愛淺からず、遂にはその獨身なることを聞きたまひ、宮女を賜はりて妻とせしめられた。この間に四人の子を設けて夫婦睦まじく暮して居たが、延文三年に龍山が遷化せられたに就きて、俄に世をはかなく思ひ、歸郷の情も従つて動き、遂に翌延文四年に妻子を残して本國に歸つて了つた。妻子共は其れより相變らず饅頭を業として盛んに世に賣り弘めて居たが、遂に世人が饅頭屋と呼び倣して、名物の一に數へることゝなつた。是れが現今にある饅頭の元祖である。

系圖に據ると、淨圓の子に妙慶と云ふのがあつて、妙慶に男四人と女二人都合六人の子がある。長子を長林祥增禪門、次子を惟天盛祐禪門と云つて、惟天が京都に移つてから林家は南家北家と分れ、又

惟天の子に持平道太禪門と云ふのがあつて、その道太の子に林宗二と云ふ我國で始めて節用集を作つた有名な人が現はれたのである。

淨圓の孫の紹梓と云ふ者に至つて、また菓子子の製法を學ぶために支那に渡航し、歸朝の後に三河國設樂郡鹽瀨村に住み、これより性を鹽瀨と改めた。又其の子孫に當る宗味といふは、風雅を喜び、茶事を愛し、後に千利休の孫に當る女を妻とし、饅頭を賣る傍らに茶帛を製して商ひ出し、これが遂には今日行はるゝ鹽瀨茶帛の元祖となつたのである。

現今京都の饅頭屋町に残つて居る記録に據ると、林氏の子孫は初めより烏丸通に住居し、天正の頃、豊臣秀吉の寵遇を受け、又後水尾院、東福門院、明正院、後光明院、後西院天皇の各時代には始終宮中に入出し、後水尾院天皇よりは御宸翰并に御製の和歌をも賜はり鹽瀨山城の大椽と公稱することも許されたので、一門は之を榮譽として町名をも饅頭屋町と稱したらしい。

又この林家には淨圓以後十九人ほど出家して居る人があつて、就中禪僧となつて著名なのが、圭甫支璋、悦岩東慈、和仲東靖、梅仙東通、利峰東銳、剛外令柔の六師で、圭甫と悦岩は前に掲げた長林祥增の子。和仲は惟天盛祐の曾孫。利峰と剛外とは宗二の孫に當り。梅仙は宗二の子であるのみならずこの六師中で、圭甫は相國寺。剛外は東福寺に出世し。悦岩は建仁寺に。和仲は博多の聖福寺に出世し。又梅仙は和仲の弟子となり、利峰も梅仙と弟子となつて共に建仁、南禪の兩刹に住し。又、悦

岩、和仲、梅仙、利峰の四師が龍山の塔所たる兩足院に住して、黃龍派の系統を繼ぎ、龍山と林家との關係が四百餘年も繼續し、又その塔所兩足院と鹽瀬家が祖先の林淨圓以來、寺檀の關係を保つて、今に其の一族の墳墓が存して居ると云ふことは、深き宿縁のあつたこと、思はれるのである。林氏即ち鹽瀬家は享保寛政の頃に至つて、不幸にも繼嗣を絶つて了まつたが、饅頭屋町の名は現に烏丸三條下ル所に存して、その春秋の祭祀は今も町内にて之を怠らずに修行して居る。苟も我が文化史の一頁を繕き、其の淵源と由來とを知る者は、淨圓の遺功を思ふと同時に、龍山徳見の遺徳を忘れてはならぬ。

饅頭屋本節用集の著者林宗二の事蹟

建仁寺兩足院の藏書中に、天文から永祿にかけての寫本で、唐宋詩類の抄物が大凡百餘冊もある。是れは主として黃山谷や、蘇東坡の詩の講義を口語體に書き綴つたもので、當時代の文學史料として有用の者と云はねばならぬ。嘗に其の書の有要なるのみならず、其の抄の筆者林宗二の篤學と精力とには、少なからぬ敬意を拂ひ、且つ彼れの事蹟は永遠に傳へたいと思ふのである。

宗二の事蹟を語るに就きては祖先に當る林淨圓の事を述べねばならぬ。淨圓の事を述るに就ては、兩足院開山龍山徳見の事を記せねばならぬ。龍山は建仁寺の第卅五世で敕號を眞源大照禪師と申す方

である。總州香取千葉氏の出で、弘安七年に生れ、十二歳の時、鎌倉の壽福寺に抵り、寂菴常昭師に就て出家を求め、越て廿二歳にして、元國に渡り四明に錫を留め、貞和五年六十六歳の時歸朝せられた。丁度彼の國に在る事四十五年の久しき間であつた。黃龍十世録に、歸朝の時、對馬に至り中村庵中に於て演史を聽かれた時に「四十七年今復回、一心贏得冷如灰、無端聽著演前史、不覺令人悲感來」と云ふ作があつて、四十七年と四十五年とは前後に二年の違算を生ずるが、兎も角四十餘年も、支那に留まられた大徳の方である。この龍山の歸朝に當つて、常に彼の地で歸依して居つた林淨圓と云ふ居士が、龍山に別るゝに忍びぬと云ふので、從ふて來朝し、遂に我國に歸化し、後に大和國の奈良に住んで居つたが、時人が其の住家の町を林小路と名け、今にこの町名は存して居る。(今の奈良市三條通北側開化天皇陵の東通)

この林淨圓は、林和靖の末孫であると言來から云ひ傳へてあるが、これは疑はしく思はれる。この事は尾崎雅嘉の群書一覽(二八七)にも「按ずるに林逸を林和靖の後といふ事そのよる所を知らず、清の楮稼軒が堅瓠集に曰く林可由みづから和靖七世の孫と稱す、和靖が娶らざることには已に梅聖俞、序中に見へたり妻石帚詩を作つて嘲りていはく和靖當年不娶妻、因何七世有孫兒、若非鶴種并梅種、定是瓜皮搭李皮、今の通譜亦瓜皮李皮に搭といふべし」云々とあつて、和靖は一種の仙士で彼れは梅と鶴とを妻子の如く愛して世俗の事には愛着せなかつた、又彼れに妻子のあつたことなどは諸書にも

見へない。然るに兩足院に現存して居る林家の系圖(是は極めて中古に出来たもので、非常に間違がある様に思ふ)にも林淨圓を以て和靖の末孫として居るのは、其性の林氏から推測して附したものであらふと思ふ、依て爰では一先づ淨圓を以て林和靖の末孫と云ふことは證明することが出来ない。さてこの林淨圓は歸化して奈良に住んで居つたが、別に生活の業もないから饅頭を作つて賣り弘め、これが爲に、我國に始めて饅頭が出来ることゝなつた。これに就ては黒川道祐の雍州府志卷の六、土産門に左の記事がある。

饅頭 古建仁寺第二世龍山禪師入宋于時中華人林和靖未裔林淨因執弟子禮斯人於中華製造

饅頭元順宗至正元年龍山歸本朝日林淨因相從來在本朝改氏鹽瀨始住南都製之其形狀片

團是稱奈良饅頭是本朝饅頭元始也於中華始自諸葛孔明曾鹽瀨淨因有數子其内一人爲僧

從龍山則建仁寺中兩足院祖無等以倫是也故到今鹽瀨一家悉爲兩足院之檀越以倫弟某於北京

造之今烏丸鹽瀨之祖也(下略)

この記事中に龍山を建仁寺の第二世としたること、無等以倫を兩足院の祖としたるは間違で、龍山は建仁寺の卅五世、無等以倫は兩足院の二代である。以倫を林淨圓の子とあれど、林家の系圖には以倫の名が見へぬ。即ち淨因に四子ありて、道安居士、心地淨印法眼、妙慶禪門、前住建仁文林和尚の四人で、この文林と云ふのは建仁寺の百卅七世文林壽都で、壽都は建仁世代記には龍山の弟子とあれどあまり時代が違ふから是もどうかと思ふ。又淨因が歸化して直ちに氏を鹽瀨と改めたこと云ふことも間

違であるが、是れは後に述べることゝしやう。

さて林淨圓は其の作る所の饅頭を宮中に献じた。主上甚だ之を喜びたまひ、爾來度々宮中に召されて寵愛淺からず、遂にはその獨身なることを聞きたまひ、宮女を賜はりて妻とせしめられた。即ち前にあげた四人の子は、この間に出来たのである。(林家の系圖には淨因、道安、淨印、妙慶の四人を唐人とせり)越て延文三年に龍山が寂せられたに就きては、淨圓も歸心俄に動き、翌延文四年に妻子を殘して獨り支那の本國に歸つて了つた。妻子共は爾來相變らず饅頭を業として盛んに世に賣り弘めて居たが、妙慶に男四人女二人都合六人の子ありて、其の長子を長林祥増禪門、次子を惟天盛祐禪門と云つた。祥増が京都に移つてから林家は南家北家と分れ、南家の祖が祥増で、北家は盛祐が祖となり奈良に住して居つたが(祥増の妻は團と云ふ北野大筋達の酒屋の姫で、法名を溪子悟禪)盛祐に九人の子があつて、六人目に持平道太禪門と云ふのがある。この道太に四人の子が出来て本題の主人公たる宗二はその第三子である。彼れは奈良に住して博學を以て時人に知られ、一乗院の宮などにも眷顧を受け、且つ著述なども大にしたものである。

宗二は林逸と稱し、法名は桂室宗二居士とある。後土御門帝の明應七年(紀元二千百五十八年)に生れ、正親町帝の天正九年(紀元二千二百四十一年)に八十四歳で世を終つて居る。彼れの妻元室妙祐の死に後ること四年目である。彼れは足利氏の末葉より織田信長の覇を天下に唱へし間に生れた

ので、その在世中は接戦攻伐の斷へ間なく、群雄の天下に横行した時代である。彼れは曾て牡丹花宵柏より源氏物語を傳へて、林逸抄五十四卷を著し、又古今集の奈良傳授と云ふのも彼れから起つたものである。武器考證廿卷の末に「饅頭屋宗二(中略)好和歌三條西内府實隆公之門弟也、著源氏物語之註林逸抄五十四卷」ともある。又節用集一卷を開版し世に饅頭屋本と稱して大に當時の學界を裨益した。群書一覽の二の七十九丁に、その解題がある。

節用集 寫本 二卷 林宗二

節用の二字は論語學而篇より出たり日用の字をいろはに分ちをのく天地門時候門人倫門人名門官名門文體門財實門食服門草木門畜類門光彩門言語門數量門等の十三門を立て眞字を以てこれをしるしまた注釋をくをふ終に京の横小路九陌の名壹貳參肆より百千萬億にいたるまでの數并に十千十二支十二律點畫小異の字等をしるす○此書作者の事或は東福寺の虎鬪といひあるひは舟橋環翠軒といふ説あれど皆しからずこれは南都の饅頭屋林宗二が作なりと本朝書目録に見えたり(中略)今



林宗二 節用集 寫本 二卷

節用集の古本を饅頭屋本と稱す予が藏する所の古寫本卷末に明應五年五月三日としるして花押あり云々

これで節用集の内容の一斑は推了せらるゝであらうが。さて爰に一の疑問がある、夫れはこの節用集の古本は昔から饅頭屋本と稱して林宗二の著作と云ひ傳へてはあるが、寫本で傳へてある本の奥書には明應五年云々とある、明應五年は宗二が誕生に先だつ三年前であつて、生れぬ先きの宗二が節用集を著しそうな筈がない、是れに就ては新村博士とも相談したが、同君の考では宗二と云ふ名の人が二三代も名跡相續して居りわけぬかと思ふと云ふことであつたが、林家の系譜には宗二と稱する人は一人よりない。依て余の考は、宗二の先代又は先々代の人が節用集を作つて、一度開刊したのを宗二に至つて増補して更に翻刻した者でありはせまいかと思ふ。即ち明應五年云々は開版の年代でなくて祖先が著述した年代と見れば差支へないのである。況や其の年號は版本になくして寫本のみにあるのだから斯く見ても差支はなからふ。又この林家は家號をこそ饅頭屋と云つたけれど、其の家は代々學者の出た方で、宗二の祖父に當る盛祐の弟温仲光公などは建仁寺の僧で、系譜に記する所に據れば才學、著述能書ともあり。又父の道太は能書で、猿樂道にも精通し其の兄弟には策之助公、東鐔沙彌など云ふ僧があつて、策之は相國寺の僧で詩や聯句に長し公家達へ出入もしたり。東鐔は温仲光公の弟子となつて幼より利根で、九歳の時に古文眞實を暗誦したと云ひ傳ふる位であるから、是等の人々

の中で何人か、著作して置いたのを、宗二が後年に増補して翻刻したものと見るのが正しからふと思ふ。この節用集は徳川時代には盛んに一般の家庭に用ひられたもので、後には之れに倣ふて幾種も出来たが、就中、宗二の節用集は一般の學者にも貴重視せられたやうである。新井白石が安積澁泊に與へた書簡にも。

一陸奥五十四郡の事年來心に懸り候へ共、兎角知れ兼候(中略)せめて引用にも足り候程の書に五十餘郡と申事も見え候へかしと存候に節用集より外管見も無く云云

と記し、又白石の著したる五十四郡考にも、
節用集所載、亦如拾芥抄、而加以之大名門、阿曾沼、石川、稻我、磐前、金原、階上、葛岡、本吉、群裁、鹿角、比内、閉伊、津輕、爲五十四郡

又貝原好古か和事始に、林逸か節用集に文武天皇の御宇に六十六國に分たまふとあるは誤なり(群書一覽に據る)など記してあつて、多くの學者の参考書となつた様である。この節用集は幾本もあつて、群書一覽には又左二書の解題が見へる、

節用集 活字本 二卷
真字にて卷末に文龜の年號あり又一本には奥に慶長二年易林の名あるもの有
節用集 印刷饅頭屋本 一卷

明應の寫本をいさゝか増損して卷末に實名の頭字を附したる真書の本なり後人のしわざと見へたれども古本也尋常の冊子を横に半截にしたるものにて奥書年號をしるさず

今時傳ふる所の饅頭屋本節用集なる者はこの横半截のものであつて、これか宗二の世に流布したるものであらふ。後人のしわざと見へ云々とあるは宗二の附したるものであるまいか。又活字本の節用集には文龜の年號ありと記してあるか、文龜は三年で終つて、宗二の生れてから四才又は七才に過ぎぬ。して見ればこの節用集は、宗二以前林家の何人か、一度開版したのを宗二が改訂増補して更に翻刻したものと見ねばならぬ。次ぎに彼れは抄物に就きては非常の知識を以て居たもので、その今時に存して居るものゝ中ても、

- 山谷抄 六冊 山谷幻雲抄 廿一冊
- 尙書抄 十三冊 山谷詩抄 廿二冊
- 杜詩抄 廿四冊 杜詩續 十冊(内一冊欠本)
- 柳文抄 七冊 春秋左傳抄 十冊
- 史記世家抄 八冊 東坡詩抄 三十冊
- 江湖風月集抄 三冊

是れ等は皆その自筆で傳はつて居る。杜詩抄二冊目の奥書には「元龜二年辛未正月十五日抄之、以雪

饅頭屋本節用集の著者林宗二の事蹟

嶺和尚御聞書令清書也」と記し。三冊の奥には「以雪嶺和尚聞書并續翠抄之畢」と書し。又杜詩續の十一卷の奥には「元龜三年壬申五月十七日抄之畢」と記し。廿冊の奥にも「天正七年己卯十月四日己刻抄出了宗二」と書してある。柳文抄にも「永祿第八乙丑十月朔日寫與之了、禪昌院繼天首座本借用宗二十六八才……書之」と奥に記し。東坡詩抄にも「永祿第八乙丑年春季春後六日三條烏丸不休菴而記之、坡集一部大略抄之訖、宗二十六八才」との奥書がある。其の他山谷詩抄にも、永祿九年より十年に涉りて南都一乘院云々の奥書がある。是等の抄物は多く彼れの手に據て成つたもので、中には先徳の抄を寫したものでないではないが。其の大部分は自ら抄したものである。彼が歌學に就きての知識は牡丹花宵拍より得たであらふか、漢學は何人から業を稟けたか、是れは判然せぬが、其の生涯の大部分は南都に住し、まゝ京都へも往來した様である。彼れと同時代に京都の公卿に清原宣賢と云ふ人があつて盛んに諸方の講席に立ち、或時は禁裡に入りて御前に進講し、又は南禪、東福、建仁等の僧達のために諸書を講じ、時に若狭、越前等にまで書笈を負ふて講筵に蒞んだものである。即ち永祿七年彼れ六十七才の時は宣賢が南禪寺で春秋左傳を講じた事が、彼れの春秋左傳抄の奥書に見へて居るして見れば彼れは宣賢とも交つて居た事が明かである。又南都に居つては常に一乘院に出入をして、門主覺慶などにも進講した様である。彼れが自筆の山谷詩抄一の奥書には「永祿九年丙寅十月九日於一乘院殿長講堂抄之」と記し、又其の五卷以下數冊の奥書は悉く永祿十年であつた或は「於一乘院殿

陣中抄之」とか「亂中於一乘殿院抄之」とか、又は「於一乘院家云々と記してある。此に一つ思ひ浮べたとは當時一乘院の門主は覺慶であつて、覺慶は將軍足利義輝の同母弟であるが、義輝が永祿八年四月、三好松永等の爲に害せられたに就きては、一族の故を以て松永の打手來らんを恐れて此年七月二十八日の夜に一乘院を出で、江州に落ち、後ち永祿十一年には名を義昭と改め、足利家最終の將軍となつた人で、即ち永祿九年より十年にかけては既に出奔して不在である。然るに山谷詩抄の奥書で見ると宗二は此の頃猶ほ一乘院に居つたのであるから、此點から推すと彼れは當時一乘院の家臣にでもなつて居りはせなかつたかとも思はれる。

この林家には林淨圓以後十九人ほど出家して居る人があつて、就中、禪僧となつて著名なのが圭甫支璋、悦岳東念、和仲東靖、梅仙東通、利峰東銳、剛外令柔の六師である。圭甫と悦巖は前に述べた長林祥増の子で、和仲は無傳宗傳（無傳は惟天盛祐の子）の孫、利峰と剛外は宗二の孫に當り、梅仙は宗二の子である。前の五師は悉く林家の系譜に載つてあるが梅仙和尚だけは見へぬ。併し梅仙の傳記には俗性林氏、林淨因之族、天正五年に建仁寺に住し、輪董すること七十三節、慶長十三年十月二十七日に八十歳で寂したとあるから、其の誕生は享祿元年で、宗二が三十二歳の時である。又梅仙自筆の草稿の中にも、慈父宗二居士云々と云ふ語が幾箇所がある。是れでみると梅仙が宗二の子たることを疑ひないが、系譜に見へぬのが甚だ残念である。宗二の一生中には悦岩の如き、中頃は和仲の如

き、後には梅仙、利峰の如き僧侶の學者を一族から出して居るのであるから、自分が學問をするに付けても種々の便宜を得たに相違ない。悦岩は永正五年に薩州の大願寺に住し、永正十八年(大永元年)宗二の二十四才の時には建仁寺に住し、享祿二年の十二月に寂した。又和仲は天文十七年即ち宗二の五十才頃には建仁寺に居つたので、自分の子も梅仙も天正五年には建仁寺に住する位であり、孫の利峰も梅仙の弟子となつて句讀を受けて居る時代であるから、宗二にあつては老後最も愉快な時であつたやうと思はれる。(圭甫は相國寺、剛外は東福寺の僧であるが爰には深い關係がないから事蹟は述べぬ)

以上の記述は太だ断片的ではあるが、是れで粗ば林宗二の一生は髣髴する事が出来るであらふと思ふ。たゞ確かなる記録がないので、生涯を通して記することが出来ぬのは残念である。彼れは前にも述べた如く八十三才で没くなつたが、その死に先だつこと四年前、最愛の妻を失なつた。梅仙和尚の草稿には左の悼詩がある。

天正戊寅夷則二十又一日者、吾慈母元室妙祐大姉小祥忌之辰也、先甲三日、勞蛙步入南京、臨

忌日牌前燒香、而不勝慟哭、因賦禪詩一章、以述餘哀云

閻浮七十七年夢、一歲又過如一朝、濕却破裂三字不明□□□、蕭々秋雨落芭蕉

又、同じ草稿に宗二の遠逝を悼む左の二絶がある。

萩 悼宗二居士三十一首歌題

淚痕恨別濺花枝、野苑千莖帶露奇、春事爭如秋草錦、輪斯昏月鹿鳴時

辛巳仲秋十又一日者、慈父宗二居士之忌日也、諸徒之潤色學者、書寫蓮經、或刻塔、重闢忌日之佛像、而塗以五綵者若干、助冥福同利群生也、或詠和歌、或連句、人々箇々盡情勵志、居士之感至德者乎、予絨口彌月、不才之不能塞餘哀謂也、雖然昨夜五更持咒後、支枕弓臥、及東方之白不睡、卒走筆唱一偈述其懷云

南去北來如幻身、讀書聲斷淚濡巾、請看別有塔婆在、無縫團々一樣新
同じ草稿中に又左の一絶が載せてある、

慶長丁酉孟秋十又一日、乃老爺桂室宗二居士十有七年遠忌之辰也、予過南京爲登墳墓也、年光屢移余踰則年□□、老癯日加、鬢雪心灰、壯氣益衰、作小偈奠之無心、雖然宗伯老、設忌齋、供衆之次、諸公各詠一首和歌見追悼、不獲默止、賦野偈一章述老懷云
不覺居諸駒隙忙、牙籤萬軸仰殘光、德標未滅愈□□、□□□□雪星霜

又梅仙東逋は、偶には南都に往來したものと見へて、草稿中に左の三首がある、

詠 白 萩 會南都一乘院詩歌席

秋草凄々風露如、鹿鳴始發小籬笆、若其白地有藏口、合把西施比此花、

饅頭屋本節用集の著者林宗二の事蹟

笠 入 僧 衣 南都會愛樂院

山僧寂寞立空庭、時見孤光開闔蓋、燭耀豈然三宿戀、重來衣裡照殘經、

南都於一門即席各以和歌見和

綠樹成陰池畔涼、玉樓深殿詠吟長、十暑故山歸意樂、炎天梅似送風香、

是れ等の詩に據つて見ても、梅仙が宗二の子であること、又宗二が南都に住し、又一乘院とは從來の關係があつたことは推し測られる様である。又宗二の自筆本が悉く兩足院に納まつてあると云ふことも、悅巖、和仲、梅仙、利峰の四師が皆兩足院の世代であつて、而も是等の人々が皆林家から出た人々であるからだ。之を系圖にすれば、

龍山德見 建仁卅五世

無等以倫 廣嚴寺世代

文林壽郁 建仁卅七世

西菴 亮

悅岩東

建仁三百六十六世

和仲

東晴 聖福寺世代

梅仙東道 南禪二百九十一世

利峰東銳 南禪二百九十七世

即ち龍山から利峰までは悉く林家の人々で兩足院を持つて居たと云ふてもよいのである。又兩足院の院號も文林壽郁より起つたので、龍山から無等以倫の間は知足院と稱して居たが、文林に至りて院内に兩足軒を設けて隱棲の所とした、この寮舎の名が遂には知足院の名を厭して仕難つたので、依て龍山の傳記又は中古の建仁寺史には知足の名はあつても、兩足の名の見へないのはこれが爲である。話が横道ばかりそれたがモー一つ二つ云はねばならぬ事がある。夫れは林氏が後に鹽瀨と稱するに至つたこと、次に何れの時代に子孫が絶へて了つたかと云ふことである。林氏が鹽瀨と稱するに至つたのは淨圓の孫に當る紹祥といふ者が菓子菓子の製法を學ぶために支那に航し、歸朝の後は三河國設樂郡鹽瀨村に住み、後に京都に移住してからだ云ふ説があるが、是は別に記録の據り所がないから確言することは出来ない。併し林氏が鹽瀨と稱するに至つたのは天正年間の事で、雍州府志の著者が、祖先淨因の性を鹽瀨と稱して居るのは太だ當らない次第である。次に林家は享保、寛政の頃絶へて仕舞つたと云ふ説があるか、是も其説の據り所が分明でないから確言するとは出来ぬ。が延寶の頃に林宗甫と云ふ人があつて和州舊跡幽考と云ふ大和名勝記を著して居る。其序文中に「余生洛陽銅駝坊住寧樂植槻傍」とある。この宗甫も林氏の系圖には見へないが、林家の人でないかと思ふ。舊跡考を著す時分には大和の郡山に住して居つたので、序文の終り「林氏宗甫涉筆和州添下郡郡山之草舎」とあるから初め京都に生れて奈良に移り、奈良から又郡山に移つて居たらしい。舊跡幽考を著した時が延寶九年であるから今より二百二三十年前である。依て林氏が此頃まで續いて居りはせなかつたかと思ふ。其後のとは史實の徵すべき者がない。宗甫は俗名を惣右衛門と稱し、明治三十年頃に朝廷から祭資料をも下されて居つて、學界には少なからぬ功績を貽した人である。

普門院の藏書目録に就きて

普門院の藏書目録に就きて

普門院藏書目錄一冊原紙廿四葉は現今京都東福寺常樂庵の什寶にして、題目には「普門院經論章疏語錄儒書等目錄」と記され、筆者は同寺の二十八世大道一以なり。

大道は正應五年七月を以て生れ、應安三年二月に寂した方で、延文元年の正月に一條經通の鈞命を以て東福寺に住し、又是れより先き文和二年六月に同く一條家の請によりて淡路の棲賢寺より移りて普門院に住し、居ること僅かに六ヶ月にして衣を卷いて棲賢の故居に歸られた人である。此の藏書目錄は大道が住院中、即ち文和二年の六月から十一月迄の間に出來た者と推測せらるゝのであるが、舊記に據て考ふるに、當時の普門院は、既に荒廢の極に達して居たらしく、大道が住院中偶作にの「道慚無力撐門戶、漏屋尋常持傘眠」と吟し、或は「瓦不黃金壁不銀、破垣敗簀足容身」の句（住普門寺語錄）に依ても其の狀態が察せらるゝのである。

普門院の創立は後嵯峨天皇の寛元四年（聖一國師四十一歳の時）にして、最初は藤原道家が東福寺大伽藍の建立に歲月を要するを以て、先づ小規模の普門院を建て、國師をして居らしめた所で、云はゞ一時の腰懸け場に造つたのであるが、其後東福寺が建立出來上つてからも、國師は矢張り普門院に常在して居られた様に思はれる。國師の年譜に依ると、其の入滅の五ヶ月前、即ち弘安三年五月二十一日の條に、普門院を以て本智房俊顯に付せられたことを記し、又同寺現存の文書中「普門院々主職事」と題する一通の中に

右當院者、圓爾別賜、光明峰寺殿之御付囑者也、專弘通佛法、永讓付門弟、及于盡未來際、不可有
甲乙綺妨之由、忝所被下嚴命也、爰俊顯參學卅餘年、給仕拔群之間、永讓與當院、表師資之儀（以下略）

弘安三年庚辰五月廿一日

東福住持聖一（在列）

と云ふ讓狀がある。彼此を綜合して考て見ると、國師が宋國から將來せられた書籍、其他の物品も多くは普門院に置かれて在りはせなかつたかと思はれる。又年譜に據ると、此年の六月六日には「師自造三教典籍目錄置普門書庫」と記されてあるから、普門院には國師の在世中から澤山の書籍があつたことを證明せらるゝのである。

然るに多年の星霜を経るにつれ、寺門の荒廢と共に所藏の什具其他の典籍等も追々に散亂して、大道が住山の頃には衰頹其の極に達したものと思はれる。依て大道は住山僅かに六ヶ月なるにも拘らず其の間に將來の散佚を防ぐため當時現在の書籍目錄を作つて殘されたのが、今時現存の書目録で、當時には既に聖一國師の造られた、所謂三教典籍の目錄も佚して居たかと思はれるのである。何となれば若し當時國師自筆の目錄が存して居たとしたならば、吾家の青氈として其の目錄をも、更に大道が自分の作つた目錄の中に書き加へて置かれねばならぬ筈である。

次に此の目錄中の書籍は、國師在世中の物のみでなくて、後に開版せられた書籍、又は國師の法

嗣或は法孫が支那から齎し歸られた分も混じてある様に思はれる。其れは此の目録中の書籍には元版もあれば明版もある。又目録中の來の箱にある宗鏡錄二十冊は多分國師の當時より存して居た物と想像せらるゝが、此の宗鏡錄をば年代は正確に分らぬが文和から延文の初年にかけて春屋妙葩(普明國師)が借用せられたことがあつて、東福寺現存の古文書中に又左の一通がある、

宗鏡錄壹部二十冊送給候、千萬不勝感悅至候、開版以後三本攸調進候、爲當來般若緣、發大願可終功之由存候、子細申入御使者了、夏中禁足之間、不能來謝候、此儀追可申入候、恐惶謹言

六月六日

妙葩(花押)

此れは春屋が宗鏡錄開版に就きて普門院本に據て校讎せられたもので、開版の上は三部を贈られたこと、思はれる。目録中の暑の箱に宗鏡錄一部百卷とあるのは、其の三部中の一本が、或は尊氏の寄贈した物か分らない。同寺の古文書中に

宗鏡錄 全部百冊 副音義 一冊

右所施入普門寺經藏如件

延文元年七月十一日

從一位(花押)

右の施入状がある。春屋は曩きに開版の上は三本を進めると云ふてあつたが、卷数の多い物であるから、都合上一部より寄贈せなかつたものか、果た春屋よりは三本を贈り、更に當來結縁のために尊氏

が又一部を寄進した者か其れは分らぬ。兎に角、同目録中二十冊一部の宗鏡錄と、百卷一部の宗鏡錄とがあつて、其の百卷の分は春屋が尊氏より寄進した物で國師在世中より存在せなかつたことが證明出来るのである。斯様な譯であるから此の目録中の書籍は國師以後の物か混じて居ることだけは明瞭である。

次に余の推測では、此の藏書目録の中に記されたる典籍の中、モ一一つ範圍を擴めて云へば、聖一國師の臨終に作つて普門の書庫に置かれたと云ふ目録の中には普門院版が混じて居りはせなかつたかと思はれる。其れは聖一の存世中に既に宋版の典籍を同院で覆刻せられたらしい形迹がある。先づ第一に同寺現存の古文書中「普門院造作并院領等事」と題する一通がある。便宜上左に其の全文を記載して見やう。

記録 普門院造作并院領等事

合

一本堂 三間四面檜皮葺々者圓兩葺之

奉安置三尺十一面觀音像一體、等身毘沙門天井二童子各一體此外地藏菩薩一體此者丹波堅者阿觀

讓之

中門 一字 檜皮葺同前

普門院の藏書目録に就きて

三面廻廊 三十三間有、又庇等但疊縁上人縁柱立之後圓爾造畢、本智房爲院主致上葺之功矣

四足一字 木瓦葺

假僧堂一字 七間 圓爾造營之

東司一字 同前、但大破處本智房爲院主修理之

方丈二字 圓爾造之、大破處々上葺等本智房加修繕

雜舍二字 作續方丈、本智房造之

行者堂一字 五間 假

中門一字 木瓦葺、圓爾造之

車宿一字 本智房造之

經藏一字 圓爾造之、納内外典書籍等

印版屋一字 本智房造之

雜庫二字 圓爾造之

一燈油料田事 西七條待從池田 田數所當可見本券

故岡屋禪定殿下御寄附、予爲宗鏡錄以下御談、數年之間參勤積功、御感之(此間一字脱するか)雖立

錐之地、限永代寄附之由忝所被仰下也、且至來際可奉訪御菩提者也

一眞如寺地事

限東行者堂西限南中築地跡限西五大堂堺限北辻子北行

此地者圓爾相傳之相副調度文書等令讓與本智房畢

此の中に經藏、印版屋、印版屋、印版屋と云ふ項目がある。經藏は勿論書庫であることは下の細註で分るが、印版屋一字と云ふのは當時普門院で宋版の翻刻をせられた時に用いられた建造物であるまいかと思ふ其れは坊間では曾て見ないが、五山の中、就中、東福寺の支院で偶に見る古版物の中に、日本の紙質で其の刻版だけが宋版の形式を帯ひて居るのがある。現に此の目錄中にある傳記本の中で二三點は確に普門院版ではあるまいかと想像せらるゝ物がある。又其の當時の版工や刷工は多分支那から率いて來た人々の手を假つたのでありはすまいか、逆も日本人の細工とは思はれぬ程巧妙な點がある。是に於て上に挙げた印版屋一字とあるのは全く其の當時使用した建物であつて一時は盛んに東福寺で宋本下つては元本の覆刻をしたものと考へられる。從來我が刻版史上に於ては俗に五山版と稱して、南北朝以後五山での刻版物に就て、色々記述した人もあるが、聖一國師の當時、即ち鎌倉時代に於て普門院での開版物に就ては何人も調査したもの、果た稱述したのを見ない。春屋妙葩が貞和の頃から觀應、文和、延文の間にかけて盛んに經籍の覆刻又は開版せられたことは、今日にも實物が存して争は

れない事實であるが、普門院の印版に就て全く世人の注意を惹かぬのは、一は當時に刻版が少なかったのと、今一つは年代が比較的攸久なるがため、現存物が稀れなる結果でありとは云へ、今日に至るも斯道識者の一人として之を知るものなきは、聖一國師の功績に對して深く遺憾に堪へぬのである。

普門院の刻版事業は、何時頃迄續いて居たか史實の徵すべきものはないが、多分南北朝の初めにはモ一絶て居たかと想像せらるゝのである。大道一以の住山の頃は同院は非常に衰微して居たのであるから、逆も刻版なんぞに手が及ばなかつたらうと思ふ。併し普門院は別として、東福寺で其後刻版を遣つた形迹はある。富岡謙三君所藏の永享版臨濟録の卷末に

永享九年八月十五日 板在法性寺東經所

との識語がある。東福寺の現境域は舊と法性寺境域の大部分を領して居るので、同寺現存古文書中康暦元年十一月晦日、當時の住山固山和尚よりの訴狀五箇條の中にも「一法性寺町八町寺家被管所々可被停止檢斷並課役等事」と云ふ一條があり。永正五年九月廿日門前課役免除之狀にも「當寺領法性寺八町檢斷」云々の文句がある。更に遡つて聖一國師年譜中、弘安三年の條には「四月建法性寺五大堂」とある。法性寺と東福寺とは六百年來の關係がある。して見ると永享年間に同寺で臨濟録を開版して其版木を同寺領の法性寺の東經所に置いたものであらうと思はれる。普門院創立の原因は上述の如くであるが南北朝の末に至り春屋妙葩の奏請によつて十刹の一に列せられ、山號をも凌霄山と稱し

院を改めて寺となし、國師末葉の人々が出世の道場とまでなつたのは、他門の春屋が法の爲に用意の甚だ周到なることを知り得らるゝのである。而して普門寺の住持職は朝廷或は公方より命せらるゝことゝ成つたのであるが、由來東福寺は國師一門の人々が歴住して他派の人々を容れなかつたのであるから、普門寺の住持も朝廷又は公方よりの推舉では他派の人々が入る傾きがあるので、康暦元年十一月晦日東福寺住持よりの訴狀にも

一普門寺住持職可爲本寺計事

と云ふ一箇條が見えてある。是れは他門派の人々をして普門寺に住せしめない防禦策を講じたるものと想像せらるゝのである。

要するに普門院刻版の一事は、舊記舊書を檢討して見ると争はれない事實で、鎌倉時代の刻版史上是非幾頁かを埋め得なければならぬ事、又聖一國師が當時の我が文化に貢獻せられた事蹟は長く、讀書家の忘却すべからざる事柄であらうと思ふ。従つて此の藏書目録一冊は彼此を證明する上に於て太だ有益なる物と考へるのである。

普門院經論章疏語錄儒書等目録

天

法華經 一部七卷 張即之書

法華經 一部七卷 三四二

地

首楞嚴經 二部 各十卷

首楞嚴經 一部 二册

立

寶積經 十卷

寶積經 一卷 經與有傳

金剛經 一卷

涅槃後分 上下

觀普賢經 二部 大小

觀普賢經 張即之書 一卷

黃

四十二卷經 一卷 又一卷

華嚴經 三册

天台三大部

助覽 三卷 欠第一

補注 十四卷

備檢 四卷

法華經 七卷

法界次第 三册

字

次第禪門 十册

法界次第 三册

大乘止觀 二册

止觀大意 一册

金剛正文 一册

金光明經玄義 一卷

同科文 一卷

國清百錄 上下

十不二門 一册

指要鈔 上下

四教儀 一卷

法要數 三册

宙

楞嚴義海 一部 卅卷

注維摩經 三册

維摩經疏妙樂 十册

同垂裕記 十册

同科文 六卷

圓覺直解 五册 付料

洪

圓覺經略疏 二部 唐、日本各八册

圓覺直解 五册 付料

圓覺集解 八册

荒

金剛經 一卷 又一卷

傳大士金剛經頌 一册

川老頌 一册

天親金剛般若論 三册

長水金剛經刊定記 七册 付料

金剛經集解 一册

柏庭楞伽通義 六册

竹菴草錄 一册

普門院經論章疏語錄備書等目錄

三四三

日

靈芝觀經疏	科觀經	阿彌陀經疏	科阿彌陀經	妙宗抄	同記	扶新論	淨土十疑論	比丘尼抄	十昆尼義抄	盈	歸教儀	同科文	同應法記	具
二冊	一卷	一卷	一卷	三冊	一冊	一冊	一冊	七卷	十卷		二卷 又一本上下日本書本	一冊	一冊	
同	同	同	同	遺教論	同	同	樂邦文類	十昆尼記抄	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三冊	一卷	一卷	一卷	一冊	一冊	一冊	六冊	七卷	上中下	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊

三四四

辰

五教章	大樂止觀	四經略記	同經略記	十不二門	法華游意	四分戒本	太賢古述	待犯要記	五教章	三論玄義	戒壇圖經	阿彌陀經勸持	歸敬儀	大藏經律論等目錄	金剛鉾論
三冊	上下	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	上下	一冊	三卷	一冊	一冊	一冊	二冊 同籍	二冊	一冊
孟蘭盆經疏抄科	小止觀	阿彌陀經略記	觀音經疏	龍樹法要偈	圓覺經略疏	釋門布薩儀	同宗要	施食通覽	法華遊意	十二門論疏	宗要	四分戒本	補助儀	諸木儀	四明拾義書
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四冊	一冊	一冊	一冊	一冊	四帖	一冊	一冊	一冊	一冊	二冊	一冊	一冊	一冊	一冊	三冊 上下科

普門院經論章疏語錄備書等目錄

三四五

大乘止觀	二册 上下
四教儀	四册 上中下 諸類
菩薩戒義記	二册
釋論	十册
十類因革論	四册
傳錄	一部 三十册
續錄	一部 三十册
字音	三册
普錄	一部 十册
傳錄	一部 五册
宗派圖	二册 大小
五燈會元	一部 十册

止觀義例	一册
四教集解科	一册
起信論	二册 一册 舊本
山家義苑	一册
天台高讚	一卷
廣燈錄	一部 三十册
傳心法要	一册
聯燈錄	一部 十册
普燈錄	一部

三四六

宗鏡錄	一部 廿册
宗鏡錄	一部 百卷
正林傳	一部 十卷
正宗記	一部 四册
宗門統要	一部 五册
僧寶傳	三册
雪竇明覺語	一部 二册
黃龍四家語	二册
睦堂佛海錄	三册
塗毒語	一册
晦堂語	一册
佛眼語	二册
石田語	一册

付法藏傳	一部 四册
祖庭事苑	四册
宗門類要	一部 八册
大光明藏	三册
明覺語	一部 三册
宏智錄	二部 各六册
石巖語	三册
洋嶽太清之瑕	一册
痴絕語	一册
即菴語	一册

三四七

普門院經論章疏語錄備書等目錄

冬

圓悟錄 二部 各五
碧巖集 二部 各八册書本
無準和尚語 二部 一部書本各三册

藏

大慧普說 十册
大慧普說 四册
又 普說 一册
禪門寶訓 二部
人天寶鑑 一册 又一册
寒山詩 一册
靈源筆語 一册
大明錄 三册
又 源序 一册
禪苑清規 一册

心珠要 二部 各二册
聯珠集 二部 各三册
無準行狀 二卷

又 一册 但年譜別本也
同語錄 一册
御書法語 一册
善慧大士錄 一册
人天眼目 一册
古禪師語 二册
血脈論 一册
如來居士錄 三册
永嘉集 一册
黃檗心要 一册
翠老同風集 一册

成

鐸津文集 十册
北碕文集 一部 六册
同語錄 一册
同洲文錄 一部 二册
同錄 一册

歲

宋高僧傳 廿卷

律

楚契帖 十二卷
一册 不具

呂

南山行業記 一册
佛法繫年錄 一卷
法藏碎金 七册
勸學文 二册
五杉備用 一册

普門院經論章疏語錄備書等目錄

又 一部 五册

又 一部 四册

同外集 一册

無文印 三册

大藏一覽 十卷

佛道論衡 四册

豐源僧史 二册

價史略 一卷

釋門正統 四册

戒殺生文 一册
廷光集 一册
淨土自信 一册

詩律捷徑	注坡詞	露	事物叢林	雨	致	騰	五先生語	黃石公素書	百家性	晦菴中庸或問	三	莊子疏	六臣注文選	文	事物叢林	漢	紹	詩律捷徑
二册	二册	一册	十册	二册	三册	二十一册	十卷	三册	一卷	七册	三册	蒙求	胡曾	周彙	三册	蒙求	胡曾	周彙

東坡長短句	筆書訣	方典勝覽	帝王年運	韓子	揭子	晦菴大學	小字孝經	九經直音	同大學或問	連相注千字文	一册	三册	三册	一卷	一册	三册	一册	三册	一册
一册	一册	九册	三册	一册	三册	三册	一卷	一册	三册	一册	三册	一册	三册	一卷	一册	三册	一册	三册	一册

道場水儀	寶塔傳	樂善錄	周	易	陽	纂圖五註周易	毛	春	孟	論語精義	無垢先生中庸說	論語直解	毛詩句解	毛詩
上中下	一册	三册	二卷	二册	一册	二册	二册	五册	二册	三册	二册	一册	三册	三册

觀菴或對	注心賦	同音	易集解	尚書	禮記	周禮	呂氏詩記	孟子精義	晦菴集注孟子	直解道德經	尚書正文	胡文定春秋解
六卷	二册	一卷	八册	一册	三册	二册	五册	三册	三册	三册	一册	四册

誠齋先生四六	四册	三五二
萬金啓寶	三册	
帝王事實	二册	
京本三層會同	一册	
搜神秘覽	三册	
合璧詩學	二册	
小文字	四册	
說雅兼義	十二册	
附雅兼義	三册	
爲		
大字玉篇	五册	
玉篇	三册	
校正韻略	二册	
韻略	二册	
霜		
白氏六帖	八册	
啓劄於式	八册	
聖賢事實	二册	
三層會同	三册	
連珠集	一册	
賓客接談	一册	
四言雜字	二册	
又		
一部 十二册 欠第六七		
大字廣韻	五册	
廣韻	五册	
韻關	二册	
歷代職源	一部 十册	

白氏文集	十一册	
韓文	十一册 不具	
麗		
老子經	一部 二册	
莊子	一部 欠自一至五	
水		
菩薩戒抄	二帖 不具	
覆韻集	一册	
同風象和尚錄	二册	
歷代法帖	五卷	
十王經	一卷 不具	
黃檗心要	一册	
心宗記	一卷 不具	
西游錄 蒙古問答然居士 四天游行記也	一册	
初心始學抄	上中下 三帖	
同進官錄	一册	
普門院經論章疏語錄備書等目錄		
機前語	一册	
真心要訣	上中下 三卷	
諸式文 諸方疏等也	上下	
六祖壇經	上下	
釋摩訶衍論記	一帖	
五臺山記	八帖	
經籍傳授記	一册	
智證大師傳	一册	
拾(歟)佛門舉抄	上中下 三帖	
三五三		

五	王氏本草方	十册	又	活人書	一部不具	王叔和脉訣	一册	和劑方	五册	本草節要	一册	明堂圖經	二册	易簡	一册	崑	魏氏家藏方	六册	本	魏氏家藏方	四册	崗	五臟秘旨	一册	枕中方	八册	藥抄	一册
---	-------	----	---	-----	------	-------	----	-----	----	------	----	------	----	----	----	---	-------	----	---	-------	----	---	------	----	-----	----	----	----

三五四	十便方	八册	局方	一册	易簡方	一册	通眞子脉訣	一册	圖注本草	九册	本草問經	十册多脫略	三册	指迷方	二册	十便方	八册	要穴抄	一册	明堂圖	一卷
-----	-----	----	----	----	-----	----	-------	----	------	----	------	-------	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----

指迷方	五册	家藏秘方	散	外鏡治方	二册	太平御覽	一部	號	太平御覽	一部之內二册	關	徑山書額字等	一卷	歷代地理指掌圖	一卷	珠	古人墨蹟等	部	稱	古經等	部	夜	聖教目錄	簿	借書簿
-----	----	------	---	------	----	------	----	---	------	--------	---	--------	----	---------	----	---	-------	---	---	-----	---	---	------	---	-----

消渴飲水方 一册
雜 破了

歷代法帖 一合

普門院經論章疏語錄備書等目錄

禪僧と繪畫

古來から禪僧にして繪畫に名のある者は少くないが、殊に足利時代には、尤も多く輩出した様である。中には自ら支那に往つて名手に就て筆法を傳へた人もあるが、又天性丹青に妙を得て其の運筆も非凡の者が間々ある。其の多くは人口に膾炙した人物ばかりであるが、時には未だ多く世に知られぬ人々もある様じやから以下其の略傳を叙して見やう。

無外和尚

諱を爾然と云ひ、東福寺開山聖一國師の弟子である。曾て一字の梵刹を創して實相寺と名け、自ら其の開基となつた人で。天性圖書を好み、當時は隨分珍重がられたそうである。

可翁和尚

此の人は隨分名の高い人で、然可翁と云へば何人も恐らく知らぬ者はなからう。諱を宗然と云ひ、大應國師(南浦紹明)の法嗣である。其の畫には多く寧一山の賛がある。人物畫は其の傳彩は顔輝を學び、墨畫は牧溪に學ぶ所多いと云ふことである。海西人良全作と題してあるのは即ち此人の畫である。近來可翁と良全とは別人であるとの説もあるが今は之を穿鑿するの材料を有せないのは残念である。

曇芳和尚

字を周應と云ひ、天龍寺の開祖夢窓國師の法嗣で、中年以後、多くは鎌倉の建長寺(五十八世)に居られた。墨畫は牧溪を學びて、常に花鳥や竹石を善くせられた。

鐵舟和尚

字を德濟と云ひ、同く夢窓の法嗣である。萬壽寺の住持となり、後に嵯峨の天龍寺内に一院を創して龍光院と名け多く此所に居られた。此の和尚の畫は設色は少くして、山水花鳥も水墨の者が多い。

妙澤和尚

妙澤の不動と云つたら、是れ亦何人も知らぬ者はなからふが、是れも夢窓の法嗣で、天龍寺壽寧院

の開山である。諱は周澤、又は龍湫と號した。中々の英物で詩も出来れば文も達者で、一世の宗匠であつたが、曾て三會院に居らるゝ日に大願心を發し、竊に塔院の擁護を佛天に求められた。すると一枚の紙が空中より風に随つて飄ふて落ちて來た、フト見れば不動明王の像である。是れから不動の像を寫すことに願心を起し、毎日一尊づゝを百日の間寫された。そうして一日たりとも怠りなく、殆んど二十年餘りも缺かされたことがない。其の又像の靈驗も甚だ多いので密教の人々は珍重した様である。師は又時に達磨の像を書かれたが、筆法は牧溪や顔輝を學ばれた様である。

周位侍者

周位は無等と號し、夢窓國師に戒を受けて、侍者の職を授けられ、道德堅固を以て稱せらる。此人は書を能くしたが、夢窓の畫像より外には何も描かない。其の畫像は現今嵯峨の天龍寺と、妙智院に各一幅づゝある。

周豪和尚

此人も夢窓と時代を同ふした人で、其書は主として鐵舟に似たりと、本朝書史に記してあるが、曾て實物を見たことがない。周の字を名に用ひてあるから夢窓派下の人に相違ない。

梵芳和尚

玉腕と號し、又別に知足軒とも號した。南禪寺の春屋妙葩の弟子で、書は明の雪聰の法を學ばれたと云ふことである。常に蘭竹の墨畫ばかりで、一種の風韻を帯びて居る。意に適する時は自ら詩を畫の上に題し、又蘭蕙同芳と書いたのが多い。

仲安和尚

諱は梵師、別に竹天叟と號した。同く春屋の弟子で、此人は常に不動や大黒天を書かれた。畫の上に明應六年十一月、前天龍松屋梵師筆とか、米年梵師と書いたのがあると、書史に記してあるから、時代も粗ぼ明かで、又八十八才までも長命をせられたことが推測せらるゝ。

明兆殿司

明兆は吉山と號して、淡路に生れ、京の東福寺に投じて大道一以の弟子となられた。少年より繪畫が得手であつたが、大道は非常に之れを戒め、師弟の縁を絶たんと迄云はれた。依て明兆以爲らく、道路に委棄せらるゝ者は破れ草鞋に過ぎない、我れも今繪事を以て大道に棄てられたのちやから自ら

破草鞋と號しようど。或る日、偶々大道和尚の出るを俟つて不動の像を書いて居る所へ、大道俄かに用が出来て歸院せられた。兆は驚いて之を膝の下に隠したが、書中の火燄が膝の下から勃起して捲ふことが出来ぬ。此れによつて大道も其の書の神に感じて再び戒めなかつたと云ふことじや。應永の中頃東福寺の殿司となり、寺中の南明院に住した。書法は宋の李龍眠、元の顔輝の筆法を得たと云ふことで、古來より佛像又は人物は本邦第一を以て目せられ、其の畫も多くは大幅である。東福寺の涅槃像の如きは横二丈六尺、縦三丈九尺で、應永十五年六月に描かれたものぢや。夫れから五百羅漢の圖がある。是れは其當時鎌倉の建長寺に顔輝の五百羅漢が所藏してあつたのを見て、東福寺に歸つて畫いたので、其の草本は常樂菴に存して居つたと云ふことぢや。又同寺法堂（今は焼失して存せず）蟠龍の圖も、兆の畫いた者であつたが、今は焼失して其の影も見ることが出来ない。抑も寺院の法堂天井に龍を畫く様になつたは是れが權輿である。是れより先き兆の母が淡路に在つて病の床に臥して居られた。依て一度我が子の顔を見たいと望まれたが、兆は其の時東福寺で五百羅漢の像を畫いて居つて其の功未だ半も達せぬ。よし老母の命に背くとも、佛像の事も捨つるに忍びぬ。夫れで自ら眞を寫して母に送り、其の心を慰められた。當時退耕庵の性海靈見、其の像に讀して「衣破戒不破、身貧道不貧」と題せられた。又將軍足利義持は兆の書を大いに愛して、時折には殿中に招き寵遇せられたが、一日、兆に其の志を言はしめ、何事にても望む所は叶へて進せようど申された、明兆曰く、財貨も官

爵も一衣一鉢の身には望み御座らぬ。只た一つの願ひは近頃東福寺の衆僧達が櫻樹を植ゆるを好みます。是れが後世に至つたら梵刹變して遊宴場となるの虞れがある。願くは之を伐らんと命じて戴きたいと申し出た。義持も其の言に感じて悉く之を伐らしめたと云ふことである。平僧を以て終り、法階は殿司に留まつた。寂年は永享三年八月廿日である。

一之藏主

藏主は職名で、名は一之、別に江藏主とも稱した。明兆に就て書を學んだが兆ほどには高名でない。

一休和尚

諱を宗純と云ひ、後小松帝の御子である。其の性行は人々の知る所であつて今更めて述べる必要がない。此の方も書畫を善くせられたが、畫には狂逸の物多く、山水人物花鳥に至るまで粗草であつて其の中に氣韻の高い所が現はれて居る。一世の大宗匠であつて、つまり餘藝に過ぎないのじや。

愚極和尚

諱を禮才と云ひ、高名の碩徳で今日に至るも其徳を慕ふ者が少くない。東福寺の曹源院に居られて

書畫の外、詩文にも中々の大達者であるが、書は兆殿司の筆法を慕はれたと云ひ傳へてある。

三六一

如拙首座

生國は九州で、相國寺に寓して參禪の傍ら常に山水人物花鳥を書いた。當時我國の畫師で宋元の風を學ぶものが無かつたが、如拙に至りて始めて興り、爾來流行することになったそうじゃ。兩足院所藏の如拙筆と傳ふる三教圖の讚語中に「能畫者、其名曰拙、廣照師所命、取大巧如拙之義也」とある。如拙命名の意はこれで分る。如拙の下に周文を出し、周文の下に宗丹を出し宗丹の下に狩野正信續いて元信を出し直信を出したのであるから、彼は我國に於ける宋元畫の基礎をなしたものである。此人も平僧で終つてしまつた。

周文都司

諱は春育、京の藤倉氏の子で、相國寺に在りて都司の職を領し、參禪の傍ら心を畫に寄せ、當時の達人を以て聞へたそうじゃ。嘗て江州の永源寺に隱遁して居つたことがあるので、印文には越溪周文とある。これは永源寺の境を越溪と云ふから因んだものじゃ。相國寺の周興彦龍藏主、曾て周文を評して「胸吞三王吳、眼睨三章郭、畫中三味手也」と稱揚して居る。畫は如拙に就て學んだものじゃが、拙より

は出藍の譽がある。彼は其の畫室を高遠軒と稱したと見えて瑞岩龍愷の蟬閣外稿に下の一絶がある。

題畫師周文高遠軒

星月排簷手可捫、開窓雲嶂又煙村、主人胸次無窮景、不托丹青托此軒、

雪舟首座

諱は等揚、別に備溪齋、又は米元山主と稱して、俗性は小田氏、備中赤濱の人である。天性畫を好



雪舟等揚の像

み、相國寺の如拙、周文等に就きて其の法を學び、後遂に一機軸を出して斯界に重きをなした。幼年の時、父に携へられて州の井山寶福寺に投じて出家となつたが、壯年の頃、相國寺の僧録司洪德禪師に師事し、又鎌倉に赴いて建長寺の玉隱永璵和尚に從游した。永璵は當時鎌倉での大宗匠であつたが、等揚の才を愛して漁樵齋の記を作つて與へられた。寛正年中に明に遊び四明天童に登りて第一座に補せられ宗旨を舉揚したが其の後は畫後に四明天童第一座と書するのが例であつ

た。又扶桑紫陽等揚とも書したと云ふことである。歸朝の後周防山口の雲谷菴に棲居して居つたから雲谷又は雲谷軒と書することもあつて、現存の圖書中にもこの略名は澤山に見受ける様である。東福寺惠鳳鳳翔之の竹居清事に左の文がある。是れは惠鳳が周防に下つた時に寄せたものである。

寄揚知客

楊雲谷、蓋慕顏秋月、常牧溪爲人、以傳染居於人之上者也、方今洛下登書榜者、不過數人、里譚巷論、兒童走卒、咸知西周有揚知客、予偶以事屆此間、一日扣其蝸房、頗說十年前握手者、不能無故人之意、仍揮毫、而作有聲之書、以獻之云、
京洛曾游揚客卿、結茅此地要終生、喜君書格出天下、兒卒亦知雲谷名、

宗丹上座

俗性は小栗で、小栗宗丹と云へは大概繪事に志ある人は御なじみである。此の人は中年迄は書で將軍家に仕へて居つたが、後に相國寺に入つて僧となり、宗丹上座と稱した。是は宗丹が幼年より周文に就きて書を學んだ緣故ではあるまいかと思ふ。宗丹一日、その別號を蔭涼軒の季瓊眞藥に請ふた季瓊以爲らく、宗丹の書の妙は牧溪の筆法に比すべしと、因て自牧といふ號を與へられた。曾て季瓊に従つて有馬の温泉に遊び、一日阿彌陀堂に登つて自ら山中の風景を寫したが、到る所妙手を以て時

人に稱せられたと云ひ傳へてある。惜ひことには宗丹の畫は今時傳ふる者が甚だ稀れである、爲めに其の妙處を知る者が少ないと云ふことぢや。

祥啓書記

世に所謂啓書記のことで、別に雪溪、又は貧樂齋と稱した。書記は叢林の職名で、鎌倉の建長寺に在つて此の役を掌つて居たから常に自ら稱したのじや。畫は牧溪を學び、佛像人物山水を善くし、又雜畫に工みであつた。本朝畫史には野州宇都宮の畫家九良子の子なりと記してある。景徐の翰林胡蘆集に、「啓書記入洛、國工藝阿、一見其畫以賞有高超、遂招到其家、悉出相府所藏畫本、爲之摹、以故筆勢益進云々」とある。して見れば當時既に重んぜられて居たことが分る。茲に全文を掲げて置かう。

題貧樂齋詩後

賢江啓公記室海東相陽人也、栖笠於福山者有年矣、平居修心禪悅之餘、發其胸中所蘊於繪事、前年公入洛、國工藝阿一見其畫以賞有高超、遂招到其家悉出相府所藏畫本爲之摹、以故筆勢益進、宋季有般濟川者、稱名畫、常牧溪嘗從其學、今也似之、及其歸、藝阿親作觀瀑僧圖付之、公就予求贊、弗辭而題、爾來洛人之評畫者、咸知關東有啓書記、今年又入洛、寓此山中、到處以貧樂齋爲扁、請諸

老賦詩、禪林遺老栖芳大士序其首、一日扣鹿苑之室、求予之跋其尾、豫章太史、有黃顔徒貧樂齋詩曰、兒報無炊米、浩歌繞屋梁、此一聯盡矣、蓋晞顏々之徒也、按清淨法行經曰、我遣三聖、化彼真丹、光淨菩薩彼稱孔子、迦葉菩薩彼稱老子、日光菩薩彼稱顏回、儒云老云釋云、不外乎是、子揚子曰、孔子鑄顏淵、或人跟爾曰旨哉、問鑄金得鑄人吁、顏子即登地菩薩、々々身皆金色、豈非吾佛所鑄成之物乎、貧樂齋中、猶有這箇在、眼高看不到黃金、賢江賢哉、書以贈之。

眞盛首座

此の人も首座とあるからには禪僧に違ひはない。本朝書史には寶祐院の尼なりとある。曾て北野天神龍淵神遊の圖を書いて禪侍者に授け、惟肖得巖が讚を其上に加へたと云ふことじや。讚詞は東海瓊華集に載つてある。

濟翁和尚

諱を景樹と云ひ、東福寺の十一代南山士雲の法弟で、南山は元弘、建武頃の人であるから時代も粗ぼ同様じや。後に萬壽寺に入りて、明雲子、又は紫塞逸民と號して、書法は兆殿司を學んだと云ひ傳へてある。

子建西堂

諱を乾植といひ、絶海和尚の弟子じや。相國寺の公文を領して、法階は西堂で終つて居る。常に書を好み、牧溪の風を慕ひ、自ら自牧、松屋老人、是菴等と號して居つた。書も又中々の見事なもので、當時の叢林では大に鳴らしたと云ひ傳へてある。

朴堂和尚

諱は祖淳、建仁寺の興雲菴の住寺で、常に不動明王の像を畫かれたと云ふことじやが、今時容易に見常らない。

江西和尚

諱は龍派、建仁寺の靈源院の住持で、此人の傳記は五山詩僧傳に載せてある。中々の學者であるが書も亦一家をなして居る。書法は小栗宗丹を學び、常に墨觀音の像を寫された。書後には多く暮齡七十四筆の字がある。印文には文溪、蘇翁と記したのが多い様で、これはその別稱である。

九淵和尚

諱は龍蹊、別に葵齋と號した。此人の傳も、五山詩僧傳に叙してある。當代の碩學で、建仁寺の靈源院に住し、後に本寺に視篆せられた。壯年の頃、明に遊ばんとして竊に誓願を立て、凡そ彼の國に遊ぶ者は先づ、補陀落山の觀音に賽して風難を祈るが常である、我も大士の加護を得ずんば南渡は出來まいと、毎日大士の像を畫き、歲月久しきに及んで千七百餘軀を得たが、歸朝の後、之を法姪の正宗龍統に示し、記を作らんことを求め、統は即ち文を製して其の誓願の大なりしことを稱揚したと、舊記に録してある。

桂 喆 和 尙

此人は京師萬壽寺の長老で、書後には前任萬壽慕真野衲桂喆と記してある。墨畫の大黒天を圖して「生佛二界、化身自由、肩頭脚下、珍寶應求」と題したのが有る。又八景、並に扇面の雜圖等、間々寺院に傳はつて居る。文龜年中の人で明に遊んだとも云ふが傳の徵すべき者がない。

宗 淵 藏 主

字を如水と云つて、相模の産で、自ら書後にオト子と記したのが多い。雪舟を師としたが、筆意は稍細い傾きがある。其の山水の彩畫には、まゝ咫尺千里の趣があつて、當時の畫界には非常に珍重せ

られた者である。宣竹の翰林葫蘆集に左の一文がある。

題 淵 藏 主 書 後

嘗在相之鹿阜、而掌藏職者、名宗淵、以如水爲字、禪誦之暇、游意於般濟川常牧溪之戲墨、以西周之雪舟爲師、而親炙之者有年、以故獲究其妙也、袖中嗣香、既拈却者久矣、東入洛、遂隱平街巷之間、一日訪予宜竹之室、出小橫畫以見示、展而觀之、幻作彼所謂玉津島和歌浦者也、小詩三章、題其上亦所自作也、仍語予曰、某昨登瑞龍見乎雪樵老師々々納而不拒、屢往來矣、凡吾有詩、刪而正之、厚於雪舟之於畫、此三詩、亦備于尊覽者、請署此一段於畫尾、以使時人知某之辱其一識、則足矣、予謂昔殷也常也、只見其畫、而未見其詩也、今公兼之、其雅思過於二子也遠矣、畫格之高趣、不言可知也、不可與世之俗工依本畫樣、以爲藝者、同日而論焉、況雪樵借潤者哉、此乃予之師友、故不辭以識其末云。

以て彼れが經歷の概を知ることが出来る。又雪舟は大いに淵を愛し、曾て自ら像を畫き淵に附したと云ひ傳へてある。

周 德 藏 主

惟馨と號し、天文頃の人である。雪舟を師として、山水墨戲は甚だ師に似て、本朝畫史には「真體

傳影剛眞而有無墨之法」と記してある。其の墨山水の書上に天龍寺妙智院の策彦和尚が賛したのが有つて、其の文に

雲谷菴主周德藏局、以繪事鳴西周者也、其徒波月等薩出紙以見需書本、周德所筆寫玉澗所摹之佳山水以付焉云々

とある。即ち周德は雪舟の高弟で、雲谷菴の後住であつたらしい。兔に角、名はあまれ人口に膾炙して居らぬが、畫は確かに一種の妙所があつたに相違ない。

智 傳

智傳は別に單菴と號し、筆法は牧溪、玉澗を學んだ様である。相國寺の僧と云ひ傳へてあるが其傳を詳にすることが出来ない。性圖書を好み、好で水墨の圖を作つたさうである。

柴 菴

此の人も亦古來より相國寺の僧と云ひ傳へてあるが、其の傳を詳にしがたい。其の常に畫く所は墨八景、柘榴の折枝が尤も得意であつて眞相を得て居ると云ふことぢや。

禪僧にして繪事に巧みな人はまだく澤山あるに相違ない。高名なる雪村友梅の如き、雪村周繼の

如き、其他雪舟の派流を汲みし人々にては等梅、等藝、等耕、等安、等傳、等本、等空、等譽、等悅等雪、等牧等叙し來ればまだく幾多もあるが今は之を省くことにする。



足利時代の繪畫と禪僧

室町時代に於て五山の僧徒が、當時の文權を掌握したることは、今更ら縷々するまでもなく、之れと同時に禪僧にして書畫に巧みなる者の續出したることも亦一奇である。然可翁、龍湫周澤、玉腕梵芳の如きは學徳俱に高きのみならず、繪畫にも亦入神の妙ありと稱せられ、其の後に出でたる明兆殿司、如拙首座、周文都司の如き、又は雪舟等楊、宗丹上座、祥啓書記、如水宗淵の如きに至りては各

自元明の畫風を傳へて、更に一機軸を出し、其の畫は管に當時の精神、僧家に愛重せられたるのみならず、現今に至りても倍々珍賞せられて、假令、粗畫斷片と雖も、得る者之を百襲して愛賞を禁せぬのである。

當時彼れ等の畫には、悉く五山の碩學が詩又は文を題したもので、一軸の中、多きは數十人、少きも三四人を下らぬ。以下試みに其の詩文の二三を列舉せんに、先づ京都花園村退藏院所藏の如拙筆鮎瓢の圖には左の三十師の題贊がある。

高翔雲者、以綰繖之、深泳水者、以網罟致之、乃漁獵之常也、夫以虛閑圓滑之瓢、欲捺住無鱗多涎之鮎魚於泱泱泥水之中、豈可復得焉乎、大相公俾僧如拙畫新樣於座右小屏之間、而命江湖群禿、各著一語、以言其志、蓋有深趣矣、全愚叟周崇不揆鄙俚、輒題十有六字於其首、曰、用活手段、瓢捺鮎留、更欲得妙、重著滑油

道人 崇印 大岳

瓢壓鮎尾、可以羹之、奈何無飲、欲把沙炊
一瓢因甚、欲捺鮎魚、江湖水濶、道術有餘
葫蘆々々、縮項坦腹、擬得鮎魚、待跳上竹
瓢轉鮎旋、兩箇浮跳、大地山河、同時失笑

玉 晚 梵 芳
雲 林 妙 冲
鄂 隱 惠 窺
愚 隱 昌 智

一瓢蘆下、急着眼着、若捺不得、飛上竹竿

竹竿路滑、焉得鮎魚、捺住得處、葫蘆々々

瓢上塗油、捺鮎急流、捺去捺來、捺不得休

按鮎何所圖、用箇大葫蘆、捺住捺不住、唯供一笑娛

葫蘆捺鮎魚、鮎魚捺葫蘆、生涯只麼過、天地一遮蘆

葫蘆提起去、泥裏逐鮎魚、心手如相應、何如捺著渠

聖朝恩澤餘、游泳及鮎魚、不費孟賁勇、葫蘆捺住渠

何物甚流滑、合無鮎尾如、大瓢難捺着、放下只噴渠

瓢團團鮎潑刺、捺着何時休歇、咬它作這去就、大人前莫輕忽

玩瓢不憤顏許、窺鮎唯臨深淵、按着還按不着、盡力這邊那邊

活潑々底衲僧、似伊變化升騰、一朝遭葫蘆捺、應待有龍門登

捺鮎頭捺鮎尾、左葫蘆右葫蘆、躡倒通身泥水、傍觀葫蘆々々

壯夫手提瓢子、切齒欲捺鮎魚、二物滑難把定、觀者咬而軒渠

石人水上捺葫蘆、一捺鮎魚捺又無、捺不得時重捺着、觸翻口口手中珠

不按鮎魚上竹竿、葫蘆和水轉團々、何容擺尾飛騰去、長要王公帶笑看

足利時代の繪畫と禪僧

惟 忠 通 恕
太 白 眞 玄
昌
西 胤 俊 承
仲 安 梵 師
盛 元 梵 鼎
季 章 妙 口
大 愚 性 智
廷 用 宗 器
古 篆 周 印
足 菴 靈 知
純 中 周 蝦
明 叔 玄 晴
周 千
聖 徒 明 麟

捺着葫蘆轉轉々、鮎魚下手竟無蹤、飄然却上竹竿去、定鼓風雷飛化龍
 鮎魚舉體滑無鱗、瓢子捺來如轉輪、又似童奴頑且媚、左逃右避動抽身
 一隻鮎魚躍出波、葫蘆捺着定諸訛、通身是滑把不住、大力量入無奈何
 竹竿頭上解翻身、俊鶴如何越得親、笑把葫蘆捺來住、天然妙手見斯人
 直把葫蘆欲捺鮎、太龜生處涉廉纖、等閑灑盡涎三斗、可笑全身不得黏
 魚尾甚黏瓢腹圓、使他捺住是驢年、今朝按去明朝按、未上竿先着一鞭
 潑々鮎魚出積流、腹虛口大可容舟、偶然一被葫蘆捺、憶昔令威當下休
 他家非是掣鰲手、提起葫蘆費力多、果爾鮎魚捺不住、無端平地鼓洪波
 手提鯁鮎力有餘、元非細網可能漁、出身路在一瓢下、應笑龍門點額魚
 百尺竿頭打筋斗、團圓瓢下欲抽身、左邊捺住右邊過、憐彼終朝狂苦辛
 孟八郎漢是掠虛、操瓢々走趁鮎魚、粘滑瓢宛轉東捺西捺口口勸口唯拈竹竿待掃頭
 この軸は現今國寶に編入せられてあるが惜い事には原紙が稍蠹缺して文字に不明の箇所はあるも如拙
 の書幅の中には尤も優秀なる者であらふ。
 以上列擧したる列嶽の書贊の如きは、他の山水書の夫れよりは大いに禪味を帯びて居つて面白味があ
 る様に思はれる。又京都帝室博物館所藏の周文筆竹齋讀書圖の題贊を見るに、始めに竺雲等蓮竹齋讀

大周周翕
 謙岩原冲
 獨鼎中舉
 子瑜元瑾
 惟肖得巖
 如積
 古幢周勝
 叔英宗播
 笑岩法閻
 嚴中周噩

書圖の序文があつて次に左記五山詩僧の題詩がある。

題周文筆竹齋讀書圖

置屋亂山荒竹中、論心此境與誰同、期人不至谿橋遠、手裡殘書讀欲終
 眼對圖經人白頭、海山風景思悠悠、此身何日拉琴侶、春宿花巷秋竹樓
 玉堂學士晚休官、掌上何書讀半殘、終古仙方除白髮、欲傳鴻寶事劉安
 竹裏節齋野趣長、攤書終日獨披襟、賢才皆自草萊起、可見青雲經濟心
 面水好山皆可廬、唯多竹處稱吾居、膺門非是厭佳客、日課猶愁欠讀書
 次に「古畫備考」に載する所の雪舟山水書の贊には

江西龍派

東沼周嚴

心田清播

瑞巖龍惺

村巷靈彦

題雪舟畫山水

瑞谿周鳳

元輝山水世無傳、下筆天然又自然、誰以胸中三斗墨、醉時吐出作雲烟
 雲霧茅堂路轉迷、山中恰與夜相齊、門前葉々客舟過、鳴軋聲津樹西

題自畫山水

雪舟等揚

洞庭日本一天秋、日在風波穩處流、蘆荻洲前明似畫、君山影落釣魚舟
 伺く「古畫備考」所載の中に

題周文畫山水

江西龍派

足利時代の繪畫と禪僧

遠近江山分淡濃、嵐光水色幾重々、誰將一斗醉時墨、掃出平生丘壑胸
又「古書備考」に據るに左の五師の贊がある。

題周文書荷花艤舟圖

松竹交青四作隣、偏恰荷氣夏宜人、繫舟知欲宿何處、五月如秋六月春

蘭坡景蕙

同

吟游避暑碧溪澗、移棹荷花荷葉間、堪笑此翁閑富貴、滿船載得露珠還

天隱龍澤

同

屋老青山門碧流、客來載酒此留舟、竹深荷淨涼如雨、子美詩中大八溝

橫川景三

同

沿岸誰歎客杖羣、晚風香處翫芙蓉、松陰寂寞亦齋上、却恐被花妨讀書

正宗龍統

同

落日乘涼艤酒船、主人堂上客門前、只今不羨鑑湖賜、荷葉吾家月俸錢

景徐周麟

又同く「古書備考」に

題真藝書瀑布圖

瀑布高哉下九天、袈裟濕却洞門前、謫仙活法坡詩得、也有銀河一派懸

月翁周鏡

同

路自溪橋入碧層、恹恹扶老曳枯藤、如何漲落雪山雪、若不洗詩非是僧

蘭坡景蕙

同

銀河成瀑掛雲端、孰與香爐峯下看、橋上誰歎僧太白、三千尺雪七條寒

橫川景三

次に京都金地院所藏の明兆殿司筆、溪陰小築圖には太白真玄の序一篇と以下六人の贊がある、

溪陰小築詩書序

詠梅葉於炎天者簡齋之神明也、書芭蕉於雪裏者摩詰之天機也、皆得之於心而相忘於物也、龍峯純子璞、身立禪林稠廣之際、而溪陰其名以居之、所謂門市而心水者歟、豈不亦謂得之於心者乎、其知心之友、圖溪山之佳處、而裝潢且倡於諸公以詩其側將贈焉、袖卷來求余措一辭、披而覽之乃山影參差水光激灑、躍游魚乎木末、迎歸鳥乎波間、以洗可塵之心、以塵可畏之暑、彼唐逸竹隱、秦人桃源何楚越於肝膽乎、唯虞號之唇齒耳、蓋是得於心而非境於外焉、然則斯圖之作也心之書也歟、千載之下足以觀主人之清心諸公之神妙、畫史之天機矣、獨竹隱桃源云乎哉、雪蕉炎梅云乎哉、應永癸巳夏河東真玄序

題明兆溪陰小築圖

小築豁陰地、誰人畫作圖、欄前流幾曲、屋後樹千株、萬國太平日、百年安樂軀、雲山赴清賞、此外

太岳周崇誠全德道人

足利時代の繪圖と禪僧

更何須

同

玉晚梵芳

水面無風碧蕪茂、山容削玉晚生煙、幽居堪羨卜佳處、不是詩人定是禪

同

履仲元禮

轟々奇峰烟霧凝、擊留雲水寄烏藤、泥牛入海無消息、一把荊茨圍碧層

同

大愚性智

青嶂層々俯碧溪、何人避世結幽栖、荆公草舍鍾山半、杜老柴門錦水西、巖樹帶春圍砌暗、峽雲含雨

護窓低、間情猶怯薛蘿淺、宿鳥時於深處啼

同

謙岩原

老樹成村護寂寥、想應溪友乏相招、春來暴漲流將去、不見門前獨木橋

同

大夏周六周

誰氏歸休已息心、茅齋僻在小溪陰、含雲樹色分濃淡、饒澗泉流作淺深、橋斷定知稀客至、巖高那復

許僧尋、只應采藥林間去、窓戶無人對碧岑

同

龍山

次に天龍寺策彦が天文六年大明初渡送行の軸には、明の柯雨窓が渡頭解纜の圖を描いて其の上に諸彦の送行が一筆で書してある。策彦名は周良、別號を謙齋、又は怡齋とも稱して、天龍寺妙智院の僧で

ある。當時詩文の達者を以て名を一世に高うし、織田信長などの歸依を受けて居つた。天文六年には大内義興の命に應じて入明の副使となりて支那に渡航し、天文十六年には再び義興の命を以て正使として北京に入り、大明皇帝に謁し、唱和の詩を賜はつた程の人物である。以下送行の詩は、初渡の時五山の諸彦が彼れの行色を盛にしたもので、當時猶ほ五山に於ける詩文の衰へて居なかつたことが、これに依て知ることが出来る。

龜阜策彦首座、有大明國之行、洛社諸老、作詩見饒、余亦同之云

龍山々長春庸宗恕(金地院)

南遊分袂出京師、風月文章更與誰、想得天門沐恩處、杜陵花底退朝詩、

饒策彦老人遊大明國

前南禪 汝雪法叔

尋師學道又參禪、江海茫茫萬里舟、若問日東士峯雪、四時飛絮落花天、

龜阜策彦禪伯、遊中華、洛下諸老作詩送之予亦附于驥尾也、有客告曰、公之此行、其志在扶起

先廬、可嘉尙矣、以故末句及之云

鹿苑老衲梅叔法霖

萬里大洋船若飛、春風得意拂征衣、先廬扶起書中屋、稱載燕山雪月歸、

謾賦一篇以贖龜嶺策彦禪師赴皇明、蓋吾惠日國師、二百年前入宋國、而佩烏頭老師左券、然而

耳孫罕續先緒者、故寓其懷已矣

三八〇

吾祖南遊年已陳、欲師其蹟總無因、羨君解纜過洋海、花咲皇朝一統春

澗花野釋茂彦善叢(東福寺)

龜阜策彥首座赴大明、作詩以壯行色云

前南禪秀林梵方

江海浸春漲碧流、孤帆高掛木蘭舟、扶桑風月不吟盡、去作天南萬里遊

大凡處人間世、其苦甚多、老而別者爲之最、釋典所說不虛矣、予茲歲天文六、俗年既得六十六、殘命在且夕之間、如少水魚、可謂可憐生、吾門策彥老人、廼三十年來舊識也、其才名、其門地、衆之所知、吾尙何言乎、老人頃日典翰南遊、挽留不得、老淚沾巾、此懷說向阿誰、唯仰皇天祝延遐齡、以待老人歸期而已、

三會天用真巖(天龍寺)

老來暫別又潸然、何況南遊萬里天、天若令吾再相見、宜延浮世者希年

送龜阜策彥首座赴大明

前建長九江妙龜

萬里波程去扣關、定知咫尺拜天顏、歸舟可載三千首、雲月江南處處山

詩一首、送天龍策彥首座遊大明國

東山希三宗璩(建仁寺)

遠渡滄溟志壯哉、定知應詔上金臺、行期一舸回旋日、載得大唐天下來

龜阜策彥老人、將作大明之遊、五岳諸老詩以送之、余亦弗默止、漫賦一章投之云

嵩陽東輝永杲(建仁寺)

告別夕陽山外山、晝遊有約幾年還、征帆宜得東風便、萬里滄波一瞬間、

淮陰見橘

航海南遊志壯哉、春風得意一帆開、報君若到龜山上、坡老舊題磨載回

小詩一首、餞策彥詞伯南遊

涼軒等善(相國寺)

人去海南吾海東、浪花萬里棹春風、中流顧視扶桑國、高掛銅鉦初日紅

寓龍山周進

鯨海蒼茫一葉舟、求師萬里事南遊、廬山他日徑行處、想見春湖着白鷗

寓龍峯宗香(南禪寺梅屋宗香)

休尋詩景到杭蘇、日本從來多勝區、好去風帆千里月、梅同北野定西湖

足利時代の繪畫と佛像

三八一

寓萬年宗管

萬里海平風不濤、大明天子德彌高、朝趨獻壽三千載、家有龜山王母桃

寓萬山集堯(相國寺仁如集堯)

遠傳明詔太平基、震且扶桑混一時、有約歸期日何日、庭松東指子規枝

寓東山壽戲(建仁寺繼天壽戲)

遠入大明朝至尊、諸君贈別豈無言、梅花若問惡詩客、休說江南古佛孫

送策彥詞伯遊大明國

承董頓首(天龍寺江心承董)

折柳橋邊淚濕衣、離城心友又應稀、此郎若到雲南地、杜宇聲聲苦勸歸

壽信頓首

南遊萬里泛船時、爲祝春風著力吹、易地看花水西寺、僧中太白可題詩

周堯拜手

相約須臾不可離、南遊何事隔天涯、朝來分袂萬行淚、染作回文錦字詩

永恩稿拜(建仁寺春澤永恩)

機鋒卓爾老禪翁、遙望大明離日東、萬里南遊何處是、吳頭楚尾一帆風

梵竺仙と足利直義

足利直義と南禪寺の梵竺仙とは當時親善であつたと見えて、梵竺仙語録の中に今日山僧雖非弄潮之人、而左武衛將軍真知音也、不知前報世中、有何因緣、十二三年中、相知如同一日、中間五六年、間闊不得相見、而檀那未嘗有一日不爲我念茲在、茲雖隔千里同一肺腑、山僧如此之言、人則曰、彼此言語又不通、何能知其愛念、汝乎當知、心通不在言也、相願之間、彼此心肝五臟皆可洞曉、又何在多言、若夫世之面交、巧言令色、以相和悅而心不然、故曰雖笑未必和、雖哭未必感、總設人不得、當知心法最不可欺、前年特蒙自關東千里之外召至、於此俾主名山、自愧乏德何可當也、

とある。直義の好悪は五百歳の下、唾棄すべしと雖も、一念懺悔發菩提心、造寺刻經の道念は梵竺仙の如き明匠の感化與つて力あつたに相違ない。

梵竺と直義と親善なりしことは、梵竺が真如寺住山の法語中に二人の唱和を掲げて居る。

記得、初在京師、受大檀那左武衛將軍茲山真之命、復召飯以餞、既而爲告別、檀那真即贈以偈云、西都東海際、相見幾般回、來往本無隔、毛頭沙界開。

山野當時和韻以謝云

梵竺仙と足利直義

蒙山智明と萬戶將軍